始

帝國圖書館藏

註譯

ファウスト

森田草平
東新共譯

大正
7. 7. 4
内交

譯序

『ファウスト』の譯新たに成る。而も予は此大作に就いて吸々の言を費やす必要を殆ど認めない。『ファウスト』は予輩の言を俟たずして『ファウスト』であるからである。たゞ此處に一つだけ是非とも言つて置きたいことがある。それは古今の大作、世界の傑作として許さるゝ作物の中には、讀んで我等に何等の感興をも與へないものがある。傑作とは蠹紙堆裏に一生を送る所謂文献學者の間にのみ通用する傑作であつて、生きた血の通ふ我等とは風馬牛相關せざるやうなものが往々にしてある。實際我等はさう云ふ傑作を讀まさ

れて失望に終つた場合が少くない。が、ゲーテの『ファウスト』ばかりは除外例である。永遠に除外例である。

何故さうか。唯一口にゲーテが偉かつたからと云へばそれでも濟む。が、私自身としては別に『ファウスト』に心を惹かれる理由がないでもない。それは世に言ひ古された如くゲーテの諸作は殆ど總てと云つても可い程、彼自らの傳記である。自敍傳の一節である。此天才の經驗したさまざまの體驗の表現である。そして、『ファウスト』に於て特にそれが云はれるのである。彼のあらゆる方面に飽くことを知らない知識慾、自然に對する敏感性、年少くして芽ぐみたる異性に對する溫情など一としてファウストの原型たらぬも

のはない。

中世紀に於けるファウストの傳說に關しては、特に必要な場合には脚註に述べることにしてあるから此處には贅しない。たゞゲーテの前に此傳說を劇に取扱つた者には英吉利にクリストファー・マアロウがある、西班牙にカルデロンがある。獨逸でもレッシングが眞先に此傳說に目を着けたが、大成せずして已んだ。

從來我邦にも『ファウスト』の譯は數種出て居る。我等は決して星上屋を架して、徒らに活版所の植字工を惱ますを期して能事とするものではない。此書の出でざるべからざる所以のものは、知る人ぞ知る。我等はたゞ此書を手にしたる

人々の批判に俟たんのみ。そして若し苟も此譯に採るべき所あらば、そは一に畏友東新君の功に歸すべきものであることを明言して置きたい。氏は名聞を求めざるがために、未だ多く世に聞えずと雖も、儕輩の間には隱然重きを成す篤學者である、思想家である、又詩人である。特に語學の造詣に到つては、深く獨、佛、英に通じ、進んで露語に及んで居る。予は氏の力を藉りて此大業を完成したることを喜び、且つ永く光榮とするものである。

大正七年六月十七日

森田草平識す

緒言

ゲーテの「悲劇ファウスト」はこの獨逸大詩人の青年時代以後の全生涯に亘つて製作されたもので、彼の第一の傑作とされて居るものである。今こゝに譯出したのはその二部のうちの第一部として、見方に依てはこれだけでも獨立した作品と考へられるものであつて、大體は十八世紀の七十年代から十九世紀の最初の十年代までの間に斷續して製作されたものである。斯う長い年月の間に斷續して書かれたゝめもあつて、普通の戯曲として見れば、筋の進行の上に自然の脈絡、合理的の統一の缺けて居る點が間々認められるけれども、これはこの作品の眞價を鑑賞する上には格別重大な問題とはならない。

獨逸で十六世紀の初期に成年者として知られた博士ヨハン（一說ではゲオルグ）・ファウスト（Doktor Johann (od. Georg) Faust）といふ現實の一人物（多分一四八〇年生—一五三九年死）の事歷が當時以降の民衆心理乃至宗教心理に由て色づけられ、又變改されて、所謂「ファウスト傳說」てふ一種特異な傳說が出來て來て、これが漸次通俗文學化され、稗史となり、通俗劇となり、又藝術劇となり、更に人形芝居ともなつて傳はり、ゲーテの少年時代に及んだ。彼はこの人形芝居を見たと言はれて居る。この傳說は時を經て種々の變化を受けて居るが、それ

に一貫した骨子を言へば、ファウストといふ人物が知識慾のために、亦享樂慾のために（前者に重きを置くと否と、見る人に依て異なつて居るが）、魔の力を藉らむとて、一悪魔と契約して、悪魔が長年月の期限の間彼の要求を充たす代償として、その期限の果てに悪魔に彼の生命靈魂を委ねるといふことにした。この契約が履行されて、ファウストは遂には悪魔に慘殺されて死後の苦患を受けるべきことになつた。基督教の思想から見れば、神に背いて悪魔に與みしたファウストは永劫に救はれざる者として天罰を受けることになつたのである。

ゲーテの「悲劇ファウスト」は外形的にはこの傳説を土臺として出來たものであるけれども、歴史劇と見るべきものでないことは言ふ迄もなく、實質に於ては、作者自身の閲歴の變裝された記錄と作者の人世觀乃至世界觀の具體的表現とから成り立つたものと見るべきである。殊に第一部に有ては作者の生活經驗の、外形を變へて鑄込まれたものが多いのである。亦、第二部に取扱はれた問題として、學問にも愛にも情慾にも安住することの出來ない主人公の魂が、唯一つ業作に於て、有益なる業作に於て安住の地を認め、斯うして神と自然との事業に有効に參することゝなるために、地獄は彼の上にその力を及ぼすことが出來なくなつて、彼は遂に救濟されるといふやうになつて居るのは傳説のファウストの終焉に比して根本的に相違するものである。斯ういふ次第でゲーテの「ファウスト」の實質を理解してその眞價のある所を味ふためには所謂「ファウスト傳説」なるものゝ智識は直接の必要はないのである。

唯だ併し、この傳説と關係して考へられる一つの問題がある。それはゲーテがこの悲劇の「時」を彼自身の時代に置かずして、彼れより餘程以前の歴史的時代に置いて考へたものと見做されることである。彼が、この悲劇の中に、彼自身の時代の事實現象とすべき多くのものを入れて居るに拘らず、全局面としては一種の古い時代感を漂はせやうとしたものであることは明かであつて、殊に第一部にあつて、獨逸の歴史的一時代の雰圍氣を表現しやうとしたものらしいことは、彼がこゝに、多くの方言を採用して一種の地方色を表はさうとした外に、多くの古い言葉を應用して居る點からも察せられる。この古い言葉の採用し方にも一定のプリンシプルがあつて、特に、一種の纒つた時代感を彷彿せしめるに役立つものを採つたらしく察せられるのであるけれど、これは外國人たる吾人の、殊に獨逸の舊時に就て何等纒つた智識を有しない吾人の精密に判斷することの出來ない問題であつて、殊にゲーテの表現しやうとした時代感を纒つた一世界として明かに心に實現することは不可能のことであり、尚又これを日本の現代語に散文として譯するに就ては特に重大な事ではないのであるけれども、これに關して玆に考ふべき一つの問題がある。それは面語代名詞（原則としては第二人稱を用ゐるもの）の用法に就てゞある。

獨逸語で他人を呼び掛けて言ふ代名詞卽ち面語代名詞の唯だ一人に對してのものゝ元始以來の形は、二人稱の單數 du〔汝〕である。九世紀頃に羅典語に於ける同例の影響を受けて、第二人稱複數 Ihr〔汝等〕を唯だ一人に對して用ゐて特殊の尊敬の意を示す事が始まつた。斯うした Ihr が次第に屢々用ゐられるに至るに從つて其尊敬を含む程度が漸次に減じて來た。降つて十七世紀の初期に恐らく佛語の影響が因緣となつて、尊敬のために或對者に向つて der Herr(od. die Frau)〔旦那〕(又は奥さま) とでも言ふやうなもの〕といふことから、轉じて次には第三人稱代名詞の單數 er〔彼れ〕又は sie〔彼女〕を一人に對する面語代名詞として用ゐ、Ihr〔汝等〕を用ゐるより更に鄭重なるものとするに至つた。併しこの用語が次第に廣く行はるゝに從つて、一面では極めて親しみのある者に對して、愛し且つ稱美する心持の自然の表現として用ゐられるに至つた。所が十七世紀末頃からこの第三人稱複數の男女兩性を綜合して第三人稱複數としての sie〔汝等〕が一人に對する面語代名詞として用ゐられ、一層多くの敬意を表はすものとされ、十八世紀半ば頃にはこの用語が右の單數形を壓倒して了つた。そして近代では、この複數が一般的尊敬語となつて、その單數形も Ihr〔汝等〕もその當初の威儀を失つて特殊の條件の下にのみ用ゐられることになつて居る。

右はグリンム兄弟の獨逸辭典（參考書目の第七）とヤーコブ・グリンムの獨逸文典とに可なり

細密に記述してあるものから摘要したのであるが、ゲーテの「ファウスト」の中での用法に就ては右の辭典に唯だ二三の特殊の用法に就て說いてあるのみで、總括的の說明を下しては居ない。例へば韻句五四八や三三〇六に用られた Er〔彼れ〕を不興乃至疎外の氣持の表現と見、唯だ一つの異例として三五二四に用ゐられた第三人稱複數の形を皮肉のためと見て居る。「ファウスト」註釋者にもこの事を總括的に說いた者を見ず、ゲオルグ・ラウシュといふ人の「ゲーテと獨逸語」といふ本があるのをも讀む便宜を得ないので、この點に就て確實な典據を得ないのは甚だ遺憾であるが、譯者は種々の點から考察して大體次のやうな解釋を下し、これに基いてこの點の譯を果したのである。

ゲーテの「ファウスト」第一部に於ける面語代名詞の用法は大體十七世紀末のそれに則つて居る。Ihr がこの中で一般普通の敬稱として用られて居るとグリンム辭典にも說いてあることから見、他方では Er〔彼〕と sie〔彼女〕が面語代名詞として用ゐられて居ることからさう認めなければならない。そして、この面語代名詞は一方では一段强い敬稱として形式的に用ゐられる反面には反意の皮肉として嘲侮、不興、疎外等の氣持を表現するもの、他方では極めて打解けた氣持で、愛し且つ稱美する感じの表現として自然に用ゐられて居るものといふやうに考へたのである。これに就ては一々の場合に脚註にこの點を指摘して置いたから、玆には用例を擧

けないことにする。

この點から推論すれば「ファウスト」第一部の「時」を十七世紀に置くべきことゝなつて、傳說上のファウストが十六世紀にあるのとは相違することになるけれども、戯曲上の時代感は歴史上の現實的時代相と凡ての點で一致するにも及ぶまいと考へられる（日本の舊劇ではこの相違の著じるしい例が多いと思ふが）ので、ゲーテがこれを十六世紀に置いて考へたと見ることも不可能ではない。併し、一種の古い時代感を表現するに必ずしも精確な歴史的の一時代を限定すべきものとするにも及ばないであらう。或はファウストの傳說書又は戯曲に斯ういふ表現法があつて、ゲーテはこれに倣つたものかとも察せられるけれど、これに關する史料を有しないので如何とも確めることが出來ない。

右の如き見解の下に出來たものであるから、この譯文の科白は大體から見て日本の現代語であるといふべきものゝ、決して寫實的現代語ではない。原文から受ける特殊の感じを傳へむとして乃至はこの感じに動かされた自然の勢ひとして、現代語に就いて或種の撰修が試みられたのである。その成功不成功の程度は譯者自身の斷ずるを得ない事である。又譯者はこの點に就ても、遺憾なき努力を費したと稱することは出來ない。

原文としてはゾフィー本（參考書目の第一）の本文を第一の典據とし、語句乃至句讀等に就

て異說のある場合には幾種かの刊本を參照し、註釋家等の說を參考して取捨し、時には疑問に留めた。その主要なる場合に就ては脚註に述べて置いた。又、原文の中に、謠ふ歌その他、普通の科白とは氣分情調の基調を異にするものとして區別して、特に段を下げて書かれたものがあるが、どれだけが斯う區別されて居るかといふに就ては、刊本に依て多少の相違がある。これに就ては註釋者等の說を成したのを見なかつたが、譯者は自己の見解に基いて取捨して、譯文にも段を下げて置いたのである。この取捨の理由に就ては煩を避けて一々說明しないことにした。

原文の解釋に就ては主としてデュンツエルの解說書（參考目書の第四）とシュレーエル刊本（同上の第二）の註疏とを參考にし、特に辭句のみの解釋に就てはモーリツツ・ハイネの大辭典（同上の第六）を第一の典據とし、時にはグリンムの辭典（同上の第七）をも併せ見ることにし、又ザックス・ヰラットの獨佛大辭典（同上の第八）をも參考にしたのである。ウイトコフスキーの解釋書も多少の參考になつたのであるが、これは中途でその便宜を失つた。尙ほ獨逸語辭典の證權の一たるザンデルの大辭典を參考することの出來なかつたのは遺憾である。

本文中に、上に述べたやうに、特に段を下げて書かれたものは、全體が詩形を取つた原文にあつても特に音樂的格調に重きを置いたものと見做される（この立場から判斷して譯者はこの

點の差別あるものに就て取捨を決したのであるが、譯者もこの部分に就ては根本の意義を害はざる範圍に於て、格調に重きを置いて譯出したのである。從つて原文の語句其まゝの意味に遠かることも往々あるために、原文を解讀せんとする人には其まゝ參考として役立つ程度がそれだけ減じて居ることを特に斷つて置きたい。尚はこの種の部分でも特殊の事情のために甚だ粗雜に取扱はれた箇處や努力しても遂に不成功に終つた箇處が間々あることを讀者に諒して貰ひたい。

脚註は大體、語句や事物に關して本文を適確に理解するに資する註疏に留めた。この悲劇の全部乃至は部分々々の深い意義や人物の性格や劇的技巧の如きことに遍る高尚な問題は、範圍外の事として、特殊の場合に僅かにこれに觸れた外は、一切これに言及しないことにした。かゝる點に關する譯者の見解も自然或程度まで譯文其ものを規定するのは已むを得ないことであるが、譯者には成るべく讀者各自の解釋の自由を妨げたくないといふ希望もあるのである。これがために、語句文節等の解釋の相違があるものに就ては多くの場合に、餘り煩瑣とならない限りに於て、諸説を併せ擧げて置くことにした。

この譯が一面に於ては直接原文を讀まんむとする人の手引となり、又讀む人の參考となることを希望する譯者は自己の經驗に鑑みて、普通の原文讀者が獨逸人の書いた煩瑣な浩瀚な註

釋や繁言細説せる大辭書を通見するの煩勞と時間とを節するに役立ちたいとの希望から、原文に就て今日一般普通の獨逸語の範圍外に出でた辭句や語法、其他特殊の難語難句に、然るべき典據を求めて、註解を施して脚註に添へた。若し、編纂上及び殊に印刷上多大の煩勞と困難を釀したこの原文註が多くの人達に利用されるを得たならば、譯者と植字工との勞が報ひられることの幸のみに留らない。

この譯は嚴密に言へば未だ完成されたものではない。粗漏缺陷の多いことは譯者の不滿を感じて居る所である。幸にして識者の愛顧示教を受けることを得るならば、他日更に修正せむことを期する。尚ほ又この悲劇の第二部の譯をも追つて公けにすべく豫定されて居る。

この書の譯出に際しては、終始森林太郎博士の邦譯を參考として、これに負ふ所が少くない。譯者は玆に感謝の意を表する。

實はファウスト傳説やゲーテの「ファウスト」製作の事歴や原文の獨逸語の問題などに就ていま少しく詳細な記述を試みたいと思つて居たのであるけれども、特殊の事情のために今はその意を果さないので、これを他日に期する。

一九一八年六月二十日

東新識

凡　例

一。本文科白の行下に記した數字は原文で詩としての韻句の數の順を示したものに倣つたのである。この數の算へ方は劈頭の獻頌の第一句（譯文の第一行目）から起算して、以下總てゾフィー本（參考書の1）やシユレーエル刊本（同上の2）に五句毎に數字を示してある通りに倣つたのである。所々に、短かい一行の後に、それより低くなつた一行又は二行までも最初の行と合せて一つに數へたのは原文でこれ等二行乃至三四行を合せて詩の一韻句としてあるのに準じたので、韻句といふことは、大體散文になつた譯文の方では通用しない言葉であるけれど、この順序數字は原文と引合せる上の便宜や註との對照の便宜のために形式的に用ゐたのである。

二。脚註は大體、本を擴げて見渡しになる偶數頁と奇數頁とを、章段が別々になる場合を除いて、一續きのものと見做して、この兩頁に對する註をこの兩頁の下の兩註欄に亘つて記すことにした。從つて、偶數頁の或行に關する註が全部或は一部分次の奇數頁の註欄に繰入れられて居ることがあることに注意したい。紙面の都合のために、時として、或る偶數頁に關する註がその前の奇數頁へ繰上げられたり、或る奇數頁に關するものがその次の偶數頁に繰下げられたりして居る。この事に注意を惹くために特別の符號を用ゐた。卽ち、或行の下（稀に或る言葉の下）に（+）の符號がある時はその行（又はその言葉）に關する註がその頁の前の頁にあることを示し、或行の下（或る言葉の下ではなく）に（*）の符號がある時はそれがその次の頁にあることを示す

のである。註の見出しの數字に括弧〔 〕をかけたのは原文に關する註であつて、譯文を理解するには直接必要ではない（間接に役に立つ場合もあるが）ものである。この區別で、普通の讀者に累を及ぼすことを避けたのであるけれど、時として不注意のために括弧を落したものゝあることを讀者に恕して貰ひたい。

四。原文の綴字法は、ゾフィー本やシュレーエル刊本に基いて、ゲーテ其人の用ゐたもの乃至それに近いものと察せられる形、今日から見れば一部分は古めかしく思はれる形を採つて註の中に用ゐた。從てレクラム版の如き今日普通の刊本のそれとは往々違つて居り、殊に外國語や獨逸化外國語の大部分の綴り方が、今日のと異つて、元外國語のそれと同一に又はより多くそれに近くなつて居るのである。

五。脚註の中で片假名（登場人物表でも）、をゴシック〔筋ぶと文字〕にしたのは原語でアクセント〔語勢〕のある部分を示したのである。音樂的格調を重んずる場合にはこの語勢表現が有意義であることをも考へたからのことである。

六。脚註の中に、片假名を用ゐるに就ての或る面倒と不正確とを避けたいために、獨逸語で書かれた固有名詞（羅典語でのものも僅少）を其まゝ羅馬字で記したのがあるに就て、玆に獨逸語の發音が普通の日本羅馬字發音法と異なるものだけを後者に比して示すことにする。

ei=ai. eu=oi. ie は i の長音、但し、特例として i と e との二綴りとして發音することがある。ä（又は ae）は a と e を一緒にした（英語の a の短音に似た）音。ö（又は oe）は o と e を一緒にした音。ü（又は ue）は u と i を一緒にした（yū とは違ふ）音。

c=ts. ch は h の更に餘程强い喉音。l は英語の l と同發音。s=z. sch=sh. sz=ss. th=t v=f. w は w と英語の v との間の音。z=ts. g は時に依て獨逸語 ch と同樣に發音される。

子音が一綴りの終りに來る時は（s が子音に先だつ時も）、濁音でも總て澄んで發音する。例へば Zeus は獨逸語としてはツォイス。Wieland はウィーラント。

因みに、羅典語の c は羅馬字 k の音である。

七。脚註に引用した基督教聖書の日本語文は日本の新教々會で普通に用ゐられて居る邦譯（參考書目の11）から採つたものである。印刷上の便宜のため用字法に多少の變改を加へた所もあるが、語句は少しも變つて居ない。脚註の中で單に聖書の「邦譯」と稱んだのは矢張この本を指すのである。特別の必要を感ずる時に限つてルーテルの獨逸譯や其他の譯を引用して、一々その事を斷つて置いた。

八。脚註に用ゐた略字の解。

D はデュンツェルの解說書。（參考書目の 4）

Gr はグリンムの獨逸辭典。（同上の 7）

H はハイネの獨逸大辭典。（同上の 6）

L はラルースの佛語百科辭典。（同上の 10）

M はマイエルの獨語大百科辭典。（同上の 9）

Schr はシュレーエル刊本の註疏。（同上の 2）

S-v はザックス・ヴィラットの獨佛大辭典。（同上の 8）

Witk は ウィトコフスキーの註釋書。（同上の 5）

以　　上。

目次

献頌……一
劇場にての前戯……五
天上に於ける序言……九
悲劇の第一部……
夜（一）……二
市門の前にて……六
書齋（一）……八
書齋（二）……一三
ライプツィッヒなるアウエルバッハの窖店……一五
妖婆の厨……一七
街（一）……一〇〇
夕べ……一〇六
そゞろあるき……一一二
隣の女の家……一一三

参考書要目

1. Goethes Werke, herausgegeben im Auftrage der Groszherzogin Sophie von Sachsen.—Band I, 14-15. „Faust"—Waimar. 1887.
2. Faust von Goethe, mit Einleitung und fortlaufenden Erklärung herausgegeben von K. J. Schröer. Erster Teil. Vierte durchaus revidierte Auflage. Leipzig. 1898.
3. Faust von Goethe. Erster Teil, Verlag von Reclam jun.
4. Goethes Faust. Erster Teil, Erläutert von Heinrich Düntzer. Siebente Auflage. Leipzig. 1909.
5. Goethes Faust, Herausgegeben von Georg Witkowski. Zweiter Band. Kommentar und Erläuterungen. Sechstes bis zehntes Tausend. Leipzig. 1908.
6. Deutsches Wörterbuch von Moriz Heyne. Grosze Ausgabe. Leipzig. 1892.
7. Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Leipzig. 1845-85.
8. Encykopädisches Französisches-Deutsches und Deutsches-Französisches Wörterbuch, von Karl Sachs und Césaire Villatte. Grosze Ausgabe. Zweiter Teil, Deutsch-Französisch. Berlin. 1903.
9. Meyers Groszes Konversations Lexikon. Sechste Auflage. Leipzig und Wien. 1904.
10. Nouveau Larousse illustré (en sept volumes), Dictionnaire Universel Encyclopédique. Paris.
11. 舊約新約全書。大日本聖書館發行。明治三十二年版。
12. 森林太郎氏譯「ファウスト」。

以上。

街（二）……一三七
園生……一四一
四阿……一五四
森と洞……一五八
グレーチェンの部屋……一六九
マールテの園生……一七三
井の端……一八五
外廓の内際の巷……一八九
夜（二）……一九二
伽藍……二〇五
ワルプールギスの夜……二一一
ワルプールギスの夜の夢……二四〇
曇れる日……二五四
夜（三）……二五九
牢屋……二六〇

（第一部終り。）

第一部の終までの主要なる

登場人物

支配人
座附詩人
道化人
「劇場にての前戯」の場にて。

主
ラファエル〔Raphael〕
ガブリエル〔Gabriel〕
ミハエル〔Michael〕
「天上に於ける序言」の場にて。

メフイストフエレス〔Mephistopheles〕　同上及びこの以後。

ファウスト〔Faust〕　「夜」（一）の場以後。
地の霊　「夜」（一）の場にて。
ワグネル〔Wagner〕，ファウストの門弟。　「夜」（一）の場以後。

一學生　「書齋」(二)の場にて。

フロッシュ〔Frosch〕
ブランデル〔Brandel〕
ジーベル〔Siebel〕
アルトマイエル〔Altmayer〕　「アエルバツハの窖店」の場にて。

妖婆
尾長猿等　「妖婆の厨の場にて。

マルガレーテ〔Margarete〕　「街」(一)の場以後。

マールテ〔Marthe〕　「隣の女の家」の場以後。

リースヘン〔Lieschen〕　「井の端」の場にて。

ヴレンテイン〔Valentin〕、マルガレーテの兄。　「夜」(二)の場にて。

以上。

悲劇　ファウスト

獻頌 *

汝等のまた近づくかな、よろめける姿等や、
昔工は夙にわが濁る目に見え來しものゝ。
いでや此度は汝等を固く捉へむと試みむか。
わが心尚ほかの妄想に惑かさるゝや。
汝等の群めくよ。さらばよし、知し治めかし、
霧と霧とより立昇りわれを包むがこと。
汝等の列を圍める秘かなる魔力の氣息
わが胸を若やかに搖り動かす心地ぞすれ。

汝等樂しかりし日の樣々の圖象を齎らして、
愛ほしき魂の影幾つともなく浮び出づめり。
半ば夢き失せたりし古への物語にも似て
初めての戀も友誼も諸共に現はれ來めり。

* この獻頌〔Zueignung〕はゲーテが1797年（彼の滿四十五歳の時）に久しく中絶されて居た「ファウスト」第一部の製作に再び手を下した頃の感想を述べたもの（此年六月草稿が出來たのち後に修正して公けにしたもの）で、こゝに彼が嘗に青年時代に意氣投合した人達の間にあつて、その感情を自由に表白した時代の心持と、今彼に親しみのない冷淡な公衆に對して居る心持との對照の表現が人の心を動かすのである。（Dに依て。）

1. よろめける姿等〔schwankende Gestalten〕はゲーテが傳說や俗劇杯に依て傳へられたファウスト物語の世界を土臺にしてファウスト劇を書かうとしたに就て、この傳說的ファウストの世界にある人物形象等のことを指して、これがまだ取纒めた確かなものとなつて居ないことを言つたものと察せられる。

2. 濁りたる目〔trüber Blick〕といふのは、ゲーテが後に（1831）エツケルマンに言つた言葉に、「（ファウスト）の第一部は 箇人の 幾分暗黑な狀態から〔aus einem etwas dunklen Zustande des Individuums〕生じて來た」と言つたと同じ意味で、彼の青年時代の心理狀態を啓明でなかつたものとして形容したものらしい。Sher がこれを暗い欲求努力の時代と見たのには一面の眞理があるであらう。（Sherに依て。）

3. かの妄想〔jener Wahn.〕とはゲーテが青年時代にファウスト劇を製作せ

痛みは新たとなり、哀歎は人の世の
迷宮のごと惑はしき道行きを繰り回し、
さて、美しき月日をば幸運の仄めかしゝも眞ならで、
われに先ぢて消え去りし人々の名をぞ呼ぶめり。

わが初めなる幾歌謠を謠ひ聞かせにし
かの魂等はその後の歌謠をば聞かじ。
友どちの犇めく群は飛び散り失せ、
初めに聞きし反響は、あはれ、消えて歸らじな。
わが悲しみはわが知らぬ人の群に響きて
その稱讃の聲にすらわが胸の安からじな。
嘗てわが歌を聽きて喜びしものは、
尙ほ生きてあるものも、廣き世に散りて迷へり。

さてもわれを襲ふかな久しくも忘れにし憧憬の、
かの靜かなる、嚴かなる、靈等の國を慕ふ心の。
今やわが囁やく歌の、定かならぬ響きして、

一五

二〇

二五

んとした欲求努力を大けなき欲望といふやうに見て言つたもの。(Dに依て。)
6. 霧と霧〔Dunst und Nebel〕とは傳說的ファウストの世界の雰圍氣を形容して言つたもので、同じ頃にゲーテがシルレルに書いた手紙の中に、ファウストの「霧と霧の道」といふ言葉がある。(D)
〔8.〕 Umwrittert を D は „ahnungsvoll umwtt" と解し „Schr は „Den Siunen ahnungsvoll wahrnehmbar macht" と解したのは共に結局同意であるが、斯うした意味から轉化した 496 に用ゐられたやうな意味も生じたものと考へられる。
9—10. 再びファウストの世界に接するにつけて、樂しかつた青年時代の思ひ出の浮ぶことを言つたもの。—愛ほしき魂の影〔liebe Schatten〕は親しかつた人の死して今はなきものに就て言つたもの。(Dに依て。)
〔12.〕 初めての戀〔erste Liebe〕と言ふに就ては、ゲーテの小年時代にフランクフールト〔Frankfurt〕で戀したといふ町家の娘グレーチエン〔Gretschen〕(2813の註參照)のことが考へられる。(Schr)—彼の女はその名前とその性格の或部分とたこの悲劇の第一部の女主人公に寄與して居るのである。
17. 農歌謠〔Gesänge〕とあるのは、Dはこゝでファウスト劇に就て、青年時に書いた部分と、それに次ぐものとに區別して考へたものといふやうに見て居るけ

アイオロスの竪琴の音の如くしも漂ひて、
身慓ひのわれを捕へ、涙の落ちて止めもあへず、
嚴しき心和み軟らぐ心地ぞすめり。
わが有てるものは遠ざかる如くに見え、
消え失せしものわれに現となりて來めり。

三〇

れど、これは必ずしもファウスト劇のみに就て言ふことゝ考へるには及ぶまい。
21. 悲しみとしたのは Leid の譯であるが、D はゲーテの死後に或刊本ではこれが Lied と改められて居るといふのを正しいとして、Leid とあるのを古い誤植と推定して居る。その理由とする所は、ファウスト劇の如きものを作者の悲しみと呼ぶことは不可能であるといふにあるけれど、これに同意して語辭を改める必要はあるまい。
26. こゝに言ふ靈等の國〔Geisterreich〕は彼れに先だつて死んで居る戀しき人達を一團と見做して指したもの。(D と Schrに依て。)
28. 囁やく歌〔lispe'nd Lied〕はの D 言ふやうにこの獻頌其ものを指したものであらう。
29. アイオロスの竪琴〔Aeolsharfe〕は古くからある竪琴の一種でその特殊の構造のために、これに風が吹いて當ると、微妙な、魅力のある、神秘的な響が生ずるといふ。アイオロス〔Aiolos〕といふのは希臘で風の神のことなのである。
31—2. 現在の自身の境涯が忘れられ、過去の追憶が現在の事實のごとく思はれることを言つたもの。

劇場にての前戯*

支配人。　座附詩人。　道化人。

幾度となくわたしを難渋の折々に扶けて呉れたお前さん方二人、
お聞かせなさい、獨逸の諸國での、
わたし達の今度の興業を何うお見込みか。
わたしは何かしら群衆が喜ばせたい、
殊にあれは我れ人共に樂しまうとする人達だから。
柱は立つた板は張れたで、誰れも彼れも
これからがお慰みと待受ける。
皆な眉を吊り擧け、どつかと腰打かけて、
一つあつと言はせるやうな事があれば好いと思つてゐます。

三五

四〇

* 劇場にての前戯、ゲーテはこの戯曲上の形式を印度の古劇たる Kâlidâsâ の Sakuntâlâ から假りたのである。ゲーテはこの劇を G. Forster の英譯から獨譯されたもので讀んでゐたのである。—〔41.〕 Augenbraunen. Augenbrauen の古き形の一つ。(Schr)

わたしは民衆の氣象を靡かせる道は心得てゐる。
が、今度のやうに當惑したことは嘗てない。
皆なが極上のものに慣れてゐる譯では固よりないが、
併し恐ろしく澤山讀んでゐるのでね。
何うしてわたし達は、何も彼も新らしく
又意義もあつて人氣に投ずるやうにしませうかね。
それもわたしは何うでも大入りが見たいからで、
人波が小屋を目懸けて押し寄せて
きつひ勢ひで繰返し繰返しどよみを打つて、
狹つこい惠みの門から押し入つて、
まだ日が高いのに、四時前から、
押し合ひ突き合ひで札賣口へ寄せて來て、
饑餓時に麵包屋の戸口で麵包を貰ふやうに、
切符一枚のためにほと〳〵首の骨を折らうとする。
斯ういふ不思議を樣々な人達の上に起すのは
詩人ばかりだ。これお前さん、今日は一つ其奴をやつて下さいな。

詩人

五五　五〇　四五

〔43.〕 Versöhnen 〔「靡かせる」と譯す〕, geneigt machen. (D). —〔51.〕 Unter den Wehen sind Stösze verstanden. (D).—52. 惠みの門 〔Gnadenpforte〕. 暗に新約馬太傳 7 の 13 以下を指して居る、曰く「狹き門より入れ

お、、あの雜色の群衆のことは言はないで下さい。
あれを見たら神靈も我々を捨てゝ逃げ出しますぞ。
可厭でも我々を渦卷に引き附ける
あの波を打つ人混みをわたしの目に離して下さい。
いや、わたしをあの靜かな天の一隅へ連れて行つて下さい。
詩人だけに清淨な歡びが花を開く所へ、
愛と友情とが我々の胸の祝福を
神々の手で作り出して育くむ所へ。
嗟乎、あすこで胸の底から躍り出でるものを、
唇が內氣に吃りながら唱へて、
今失敗るかと思ふさ、つい又何うやら旨く行くといふやうなものを
荒くれた刹那の暴力が呑んで了ふ。
時としては、幾年月を押し拔けてやつとのこと、
完成した姿となつてそれが現はれて來る。
ぴかつくものは其時限りに生れたものだ。
正眞のものは後世に殘つて滅びない。

六〇　六五　七〇

よ。沈淪〔ほろび〕に至る路は濶く、その門は大いなり。此より入るもの多し。命〔いのち〕に至る路は狹く、その門は小さし。其の路を得るもの稀なり。云々」(Witk).—54. 四時前から。—その頃の開演は六時ごろであつた。(D)

道化人

後世のことなんかわたしは聞かずに濟みたいものだ。　七五
假にわたしが後世のことを言はうと思つたとして、
さて誰が當世の人にお笑ひ草をいたしませう。
これだとて人の望む事、又叶へてやるべき事でもありますよ。
好漢愛すべき奴のゐることは、何れにしても
何かになるものだとわたしは思ひますね。　八〇
愉快に書いて見せることの出來る人は
世間の移り氣にむかつ腹を立てはしますまい。
斯ういふ人は感動を一層確かにするために
相手の範圍の汎いのを望みますぜ。
だからお前さんも確かりして、一つ模範をお示しなさい。　八五
空想に其合唱組を殘らず添へて聞かせて下さいな、
理性に悟性に感覺に情熱とね。
だが、よう御座んすか、たわけた事も落すんぢやありませんよ。

支配人

殊には併し事件たつぶりにして下さい。

人は見に來るので、何がさて只見たいのです。
色んな事が目の前に彷ぎ出されて、
見物が呆氣に取られて口あんぐりと見てゐるやうになれば、　九〇
最うお前さんは幅にかけては占めたもの、
お前さんは人氣者と云つたものだ。
群集はお前さんも嵩で壓しつける外はない。
結局銘々が自身に何かしら撰つて取りますよ。　九五
澤山物を持つて來る者は多くの人に何かしらやる譯で、
誰も彼れも機嫌よく小屋を出て行きますね。
狂言を見せるなら碎いて見せて下さい。
斯ういふ混ぜ物はお前さんに屹度旨く行きませうよ。　一〇〇
案じ出すのが譯ないやうに、擴げて見せるのも譯はない。
纏つたものを持出したつて、何うなるものですか、
ごうせ見物に拐り散されるんでさあ。

詩人

それがどんな好くない下等な仕事だかあなた方には感じがない。　一〇五
本當の藝術家には何んなに不似合な仕事でせう。

〔100.〕Ragout〔混ぜ物〕，こゝでは「種々の成分から出來た献立」の意（Sehr と D）

結構な先生方の拙作が、あなた方には、
金言となつてゐるのですねえ。

文 記 人

そんな非難はわたしの顔を潰しはしない。
よく効果を擧げようと思ふ男は
一等好い道具を差し指いてはなりません。
思つても御覽なさい、お前さんは軟らかい木を割りなさるのだ、
まあお前さんの書いてやる相手を見て御覽なさい。
こちらは退屈の餘りに來た人で、
あちらは有り餘る御馳走に滿腹して來た人だ。
そして何よりも一番いけないことには、
新聞を讀みさして來るのが隨分ありますよ。
假裝舞踏會へ出掛けるやうに上の空で急ぎはするが、
唯だ好奇心が一歩一歩をせき立てるので。
貴婦人達はお化粧ぐるみ御自身を見せ物にして、
給金なしで芝居の外の芝居をします。
何をお前さん方は詩人の高嶺で夢みてゐるんだ。

一一〇　一一五　一二〇

114. Uebertischt, überladen〔過載されたる〕の意 (D)—**119—20.** 比考。Ovid の Ars amatoria I, 99 に曰く：Spectatum veniunt, veniunt spectentur ut ipsae.〔彼女等は見物に來る、自分も見物されに來る〕(Schr と D)

何でお前さん方は大入を嬉しがるんだ。
最負客といふものを近くからようく見て御覽なさいよ。
半分は冷淡、半分は粗野に出來てゐます。
芝居の後ではトランプをやる氣なのがあり。
賣女の胸で荒んだ一夜をと思ふのがある。
何でお前さん方は馬鹿らしくもそんな目的のために、
心優しいミューズ達を小つひどく苦しめんですかい。
いや、何でも見せるものを餘計に餘計にと始終お殖やしなさい。
それだと決して的の外れつこはありません。
何でも人間を煙に卷く工夫をなさることだ、
滿足させるのは容易でない——
おや、お前さん何うしました？感じ入つたのか、切ないのか。

詩　人

他所へ行つて他に下郎を搜すが可い！
詩人はあなた故に最上の權利を、
自然の授けた人としての權利を、
亂暴にも、放り棄てろとでもいふのか。

一二五　一三〇　一三五

133. この時、道化人の言ひ草を聞いて、詩人がひどく興奮して居る樣子を見て言ふのである。

何を以て詩人は萬人の心を動かします？
何を以て四大の何れにも打勝ちます？ 宮地嘉六『地水火風』
その胸を突いて出て、そしてその胸の中に
この世界を卷き收める諧調に外ならないではないか。
自然は糸の永遠な長を
無頓着に繕りながら紡錘に卷きつけ、
萬物の不調和な集りかたまりが
忌々しく雜然たる音を立てるとすれば、
誰が何時でも一樣な順列を句切つて、
それに節奏のそよぎが起るやうに活かします。
誰が箇物を天來のうちに喚び集めて
華々しい諧調を奏させます。
誰が嵐に情熱を吹き荒ませます。
誰が夕榮を眞摯な心の中に燃え立たせます。
誰が有りと有る美しい春の花を
戀人等の辿る徑に振り蒔きます。
誰が無意味な青葉を編んで

一四〇
一四五
一五〇

154. Unbedeutend grünen Blätter は unbedeutenden grünen Blätter の縮り。かう形容詞を副詞にして現はのは、ゲーテが Iphigenie 以來好んで用ゐた形。(D.)

さま〳〵な功勞に酬ゆる譽れの花環にします。
誰がオリンピヤを確實にして神々を集へます。
詩人に於て啓示する人間の力だ。

一五五

道化人

ぢやあそれを、その美しい力を使つて、
詩人流の商賣をお遣りなさいな、
あの戀路の浮かれ事でもやるやうにね。
偶ま近寄つて、妙な氣持がして、立どまる、
それからおひ〳〵と絡み合ふ。
嬉しい嬉しいが募つた揚句は口說になり、
有頂天になつてゐると、今度は胸の痛みがやつて來て、
思ひも懸けない間に、それが卽ち小說ぢや。
わたし達も一つ斯ういつた狂言を出さうぢやありませんか。
何でも張り切た人生に手を突込んで掴みなさいな。
銘々さうして生きて居ても、それと知つた者はたんとはない。
でお前さんのしかと抑えた處なら、そこに面白味がありますわい。
色脈やかな繪をあまり曖然とはさせず、

一六〇
一六五
一七〇

澤山の間違ひとちらりと光る眞實と、　一七五
斯うして造れば極上の飲料で
天下萬人に元氣もつければ教訓にもなる。
すると青春の花の中の花がお前さんの
狂言を見に集つて啓示に耳を澄しますよ。
すると心根の優しい者は皆なお前さんの
作物から哀愁の養分を吸ひ取ります。
すると心に何やら彼やら攪き立てられて、
銘々が自分の胸に溜めてゐるものを見ますわ、。
まだこの人達は折さへあれば泣きも笑ひも致します、　一八〇
まだ心の躍動を奪とんで、假想を見て喜びます。
出來上つた人間には、何一つ氣に適るものはない。
出來上りつゝある人なれば、何時でも物を有難がりますよ。

詩人

ではわたしにわたしがまだ自身でも　一八五
出來上りつゝあつたあの年月を戻して下さい。
優き寄せられた歌の泉が絶間なく

新たなものを產み出したあの頃を
霧はわたしの前に世界を包んで、蕾や幼芽は
まだ後々の奇蹟を思はせたあの頃を、　一九〇
わたしが谷々到る處に豐かに咲き滿ちた
百千の花を折取つたあの頃を。
わたしは何にも有たなかつたが、でも足りて居た、
眞理を求むる熱欲と迷ひに樂しむ心とで。
返して下さい、あゝいふ衝動を不羈のまゝで、
苦痛に充ちた深い幸福の心持を、
憎みの力、愛の勢ひを、
わたしの青春を返して下さい！　一九五

道化人

青春がなくてならんのは、ねえお前さん、精々の所でね、
お前さんが戰場で敵に追ひ詰められる時、
無理無體にお前さんの頸つ玉に
可愛の可愛の娘御がぶらさがる時、
遙か向うに疾駈けの褒美の花環が　二〇〇

容易には着かれぬ決勝點から離く時、
旋風と烈しく踊つた後は
酒宴に夜々を飲み明かす時なぞだ。
だが世に知れた絃の奏べに
雄々しく優しく手を下すとか、
自から掲げた目的を迫うて
捨て難い惑ひを抱いて彷徨ひ行く、わざと迷ひ、気儘よく迷ふ。
これが、年寄りのお方々、お前さん方の務めといふもので、
わたし達がお前さん方を敬ふ心はそのため少しも劣りはせぬ。そうして士として
年寄ると小供じみると世話にいふのは間違ひで、
いつそ本當の小供になつて見えますまでさ。

Trotzdem ナリ.

支配人

言葉の違り取りはこれで澤山、
この上は實行の方を見せて貰ひませう。
お前さん方がべらぺらお世辭を並べてゐる間には、
何か有益なことが出來得ないものでもない。
調子のことなぞ喋々と辯じて、何になります。

二〇五
二一〇
二一五

21.6. 偶逸の詩にも曰く „Alte Leute sind zweimal Kinder“〔老人は二倍小供である〕(D.)

愚闇つく者には何時になつても調子は着かぬ。
詩人を以て任ずるからは、
詩歌に采配を振つて御覧なさい。
わたし達の要するものは御承知のこと、
わたし達は強いお酒が啜りたいのだ。
そこで早速醸造にかゝつて下さい。
今日行へぬ事は明日もやれない、
一日でも取外してはなりませんよ。
出來るだけのことを決心に元氣よく
直さま鬢を取つて抑へさせることだ。
すると決心はそれを手離すものでなく、
必然に迫られてその活働を進めて行きます。

御存知の通りわが獨逸の舞臺では
銘々が何でも好き好きに試してみます。
だから今度も背景にしろ仕掛けにしろ
どし〳〵わたしに注文をお出しなさい。

二一〇
二二五
二三〇

大天光(太陽)も小天光(月)もお使ひなさい、
星も矢鱈にお使ひなすつて構ひませんよ。
水や火や岩壁や
獸や鳥も拂底ではありません。
それで狹い板小屋の中で、
造化の全局面を股にかけ、
程よい速やさで天上から
娑婆を通つて地獄まで逍遙しなさい。

二三五　二四〇

2 5. 大天光は太陽、小天光は月。—〔238.〕Tier'（複數の積り）Tieren.

天上に於ける序言 *

主。　天使軍。　後にメフイストフエレス。**
大天使三人進み出づ。

ラフアエル

太陽は、古風に依て、競ひの歌を
諸ろの同胞天球のうちに響かせ、　天体ノ兄弟
その命ぜられし旅程をば
霹靂の歩みして果し終る。
それを見れば天使等は心强まる、
一人としてそれを究め得ざるとも。
不可思議に崇高なる天工は
莊麗なること開闢の日に異ならず。

二四五　二五〇

* 天上に於ける序言。—舊約全書ヒオブの書 1 の 6—12 を參照すべし。
243—4. Tacitus Germania 45 に依れば、太古の獨逸人は日出に際して一つの響きが聞えると信じてゐた　又、ピタゴラス學徒の考に依れば天體の回轉に當つて音響を發する〔諸天球の諧調が音響として現はれる〕けれど、吾人はそれに慣れて了つてゐるので、聞えないのである。(Sch.)—〔248.〕Wenn…mag = Wenn auch…vermag. (Schr.)　** メフイストフエレス〔Mephistopheles〕といふ名の起源や意味に就ては、これまで種々の說があるけれど、まだ一般に承認されたものはない。

ガブリエル

而して速かに、不可思議に速かに
華やかなる大地自から轉じ廻る。
樂園の明るさと深き物凄き夜と
交々に到る。
海は諸ろの廣き流れをなして
巖敷くその深き底に泡立つ。
而して巖も海も夫の永遠に
速かなる天球の道程に拉し去らる。

ミハエル

而して嵐と嵐と我れがちに怒號して、
海より陸へ、陸より海へ向ひ、
狂ひ立つて四邊に極みなく深き
効果の連鎖を形づくる。
時に雷道の行手に落ちて
稻妻の破壞の焰を擧ぐ。
されど主よ、君が御使等は君が日の

二五五

二六〇

二六五

なだらかに移るを敬ひまする。

三人して

これを見れば天使等は心強まりまする、
一人として君を究め得ませぬ故。
而して君が嵩高なる一切の天工は
莊麗なること開闢の日に異なりませぬ。

メフイストフエレス

あゝ上樣、そなた樣が此度またいらせられまして、
こちら一體の樣子を御尋ねなされます、
そしてそなた樣は常ふだん快よく私に御會ひ下されました、
それで私は又お召使衆に交つてお目にかゝります。
御免なされませ、私には堂々とした言葉遣ひは出來ません、
こゝに集りの方々が皆なして私を嘲笑なされても致し方が御座いません。
私がはづみに乘りでも致さうなら、そなた樣は屹度御笑ひなされませう、
尤も笑ふ習慣はなくなられたかも知れませんが。
太陽や諸世界のことは私は何にも存じません、
私は人間共の苦惱する樣を見て居るばかりで御座います。

二七〇

二七五

二八〇

〔279.〕 Sonn′（複數の積り）=Sonnen.

この小神樣は元の通りしよつちゆう同なし型に出來て居りまして、
開闢の當日にあつた通り奇怪なもので御座います。
そなた樣が彼に天の光の照影を見せずにゐらせられましたら、
彼もも少しよくして生きて居られませうのに。
彼はそれを理性と名けて、獨りでそれを使ひますが、
その甲斐には唯だどの獸にも勝して獸らしくして居ります。
彼は私の見ました所では、上樣の前で不躾で御座いますが、
あの長脚の蟬の一つのやうに
何時も飛んだり跳ねたりするかと思ふと
直ぐに草の中でお極りの歌を謠ひます。
で何時までも草の中にぢつとして居ればで御座いますが、
ざこの泥土にでも鼻をうづめます。

主

そちはその外には余に語ることはなきか。
そちは來る毎に唯だ愁訴するのみなるか。
地の國にては何一つとしてそちの心には滿たぬか。

メフイストフエレス　二八五　二九〇　二九五

288. 蟬〔Cikade〕はこゝでは、高く飛上ることの出來ぬ鰔鮃〔バツタ〕や蟋蟀〔イナゴ〕の類を指す。

いえ上樣、私には何うもあすこは相變らず情なくいけないものに思はれます。
人間共が苦患の月日を送つて居りますと、私も哀れを催ふします。
私さへあれ等が可哀さうで虐め一やる氣がない位で御座います。

主

そちはあのファウストを知つて居るか。

メフイストフエレス　あのドクトルで御座いますか。

主　余の下部のことだ。

メフイストフエレス　三〇〇
如何にも！彼は一つ變つた流儀でそあなたに仕へて居ります。
あのたわけ者は下界のものは飲みも食ひもせず、
胸の醱酵が彼を遠方へと驅り立てます。
彼も自分の途轍もなさに半分氣づいて居ります。
天上からは一番美しい星を取らねばと思ひ、
地上からは一番深い樂しみを殘らず究めねばと思ひ、
そして近くも遠くも、何處と一つとして　三〇五

〔298.〕 原文の言葉の順序は餘程反則である、普通ならば Ich selbst sogar mag nicht die armen plagen とすべきである。(D.)

あの深く動かされた胸をあきたらせる所は御座いません。

主

彼は余に今は漠然として仕へ居れども、
余は彼を驕し清朗の境へ導くべきぞ。
かの園丁は、木が綠に芽ぐむ時は、
花と實の來るべき幾歲を飾ることを知るではなきか。

メフイストフエレス

さあ何をお賭けなさいます。彼をのなたに背かせてお目に懸けますぞ、
若しあなたの御許しが出て、彼を私が
私の巷へそろりと連れて參つて宜しければ。

主

彼が地上に生を保つ限り、その限り、
そちにはそれを差留めはされまじきぞ。
欲求努力する限り、人間は惑ふものぢや。

メフイストフエレス

それは有がたう御座います。なぜと申せば、死人なぞに
構つて居るのは、私元から可厭で御座いまう。

三一〇

三一五

〔319.〕Si h befangen=sich befassen. (Schr)

一番に好きなのはむつちりした水々しい頰で御座います。
死骸が來ると私は留守といふことに致します。
私も鼠を相手の猫の流儀で御座います。――――先んぜん鼠を相手とせぬ

主

さらばよし、それはそちに任せられやうぞ。
この靈をその本源より引き放せ、
そして、それをそちが捕まへ得るならば、
伴ひてそちの道を降り行け、
そして愧ぢらひて立てよ、斯く思ひ當る時に、
善良なる人間は暗き欲望にせかれ居りても、
正しき道を忘れ果てゝは居らぬものぞと。

メフイストフエレス

よう御座います。たに長くはかゝりません。
私はこの賭に氣懸りは更にない。
私が本望成就しました時は
精一杯の勝鬨をお許しで御座いますね。
芥を彼に喰はせてやります、旨がつて喰ひますやうに、

三二〇

三二五

三三〇

335–4. 舊約創世紀 4 の 14 に曰く、「エホバ神蛇に言ひたまひけるは汝が是をなしたるに因て汝は諸〔すべ〕ての獸よりも勝りて詛はる。汝は腹行〔はらばひ〕て一生の間塵を食ふべし。」

私の緣つゞきのあの評判の蛇のやうに。

主

それも唯だそちの心任せに振舞うてよい。
余は嘗てそちの輩を惡みたることなし。
有らゆる空無の靈のうちにては
余には害戯の惡魔が一番に迷惑にならぬ。
人間のはたらきは餘りにも弛みやすく、
彼はともすれば怠なる安息を好む。
されば余は彼に伴どちを附け添へて、
彼を促がし彼を動かす惡魔の業を爲さしめる。
とはいへ、御身等は、神々の眞の子等よ、
この生動する豐かなる美を樂しめや。
永遠に活きつゝ生きる、この生り成るもの
御身等を愛のいとしで眞垣もて圍め、
而して、よろめく現象をなして漂ふものを
御身等持久する思想もて結び留めよ。

（天閉され、大天使等散ず。）

メフイストフエレス（獨り。）

折々あの老公に會ふのが惡くないな、
で、おれば氣をつけて、緣を切らぬやうにする。
あゝも人間らしく惡魔とでも話をするのは、
大した上つ方にして見ると感服の至りだ。

悲劇の第一部

夜

高く圓天井したる、狹き、ゴート式の室の中に
ファウスト机に倚り椅子にかけて、落つかぬ樣

ファウスト

嗟乎、おれは最う哲學も、
法理論も醫學も、
そして、慾ひに、神學まで
熱心に努力して隈もなく研究した。
然るにおれはこゝに斯うしてゐて、哀れなるおれの馬鹿が！
賢こさは以前と變りがない。
マギステルと稱し、ドクトルとすら稱して、
最う彼れ此れ十年もおれの門弟等を
上へ下へ、横に斜めに、
鼻柱を取つて引廻してゐる——

三五五

三六〇

354. 法理論と譯した Juristerei（羅典語から出來た言葉）を「法律學」の意味の普通の用語 Jurisprudenz に代へたのは音調のため（親律上では同一に取扱はれる）以外、恐らくこれに屢々含めて用ゐられる非難の意味を利かせるためであらう。—360. 昔は諸方の大學で Magister が初位の學位として、Doktor はその上の學位として第二の試驗を經て、與へられるのであつた。（Schr）

が、おれには見える、我々は何にも知ることが出來ないのだ。
それを思ふとおれの胸は燃えてなくなりさうだ。
成程おれはドクトルやマギステル、筆記者や坊主といふ、
あの獨りよがりの凡てよりも物が分るには違ひない。
おれは狐疑にも疑惑にも惱まされない、
地獄も惡魔も恐ろしくはない——
その代りおれには一切の悅樂が捥ぎ取られてゐる、
おれには一廉の物知りといふ自慢もない、
人間を善くするため、改心させるために、
何かを敎へることが出來るといふ自慢もない。
又おれには金もなく財物もなく、
世俗の名譽も光榮もない。
斯うしてこの上生きたいと思ふのは犬にもなからうぞ。
その爲めおれは魔法に耽つた、
若しか靈の力と口とに依て、
幾多の秘密が敎へられはせぬかとて。
さうなれば、おれは最う汗をしぼりながら、

三八〇　三七五　三七〇　三六五

366. 筆記者〔Schreiber〕とはこゝでは、學者殊に神學者を嘲つて呼べるもの。(D)

何が分らぬと言ふ必要もなくなる。
さうなれは、おれは世界をその奥底で
總轄して居るものを認識し、
一切の作用力と種子とを窺ひ知り、
そして最早言葉いぢりをやらなくなる。

おゝお前が、圓かな月影よ、
おれの苦患を見やるのも
これが最後であればよいのに！
この月明を待つておれは幾たびも
夜半までこの机に倚つて起きてゐた。
すると、本の上や紙の上に、淚も時々
憂鬱な友よ、お前が現はれて來て呉れたなあ。
嗟乎、おれがお前の好もしい光の下に
山の高みへ行くことが出來ればだが。
すると、山の洞を靈等と飛び彷徨ひ、
草原をお前の仄かな光にそゞろ歩きし、

三九五　三九〇　三八五

383. Samen〔種子〕は Keim〔萌芽、胎芽〕に代へた錬金術師〔Alchimist〕の用語、(D と Schr)—〔**395**〕 Dämmer=Dämmerung (Schr)

一切の息苦しい智識の重荷を免れて
お前の露を浴びて健やかになるのに。

あァあ！おれはまだ牢屋に籠つてゐるのか。
忌々しい鬱陶しい石壁穴、
好もしい天の光さへぢんよりと、
繪を描いた窓硝子越しに射し込む所だ！
所せきまで斯う本が積み上げられて、
それを蟲が喰み、塵が蔽ひ、
それに、高い天井の所までも
一々煤けた見出しの紙札が挿んである。
硝子の器や筒形箱をぐるりと置き列べ、
種々の器械を隙間もなく押し込み、
祖先傳來の家具があひ間に詰め込んである——
これがお前の世界だ。これを一つの世界と言つて居るのだ。
それにお前はまだ問ふのか、なぜお前の心臓が
おどゝしてお前の胸の中に押し詰まつて居るのかと、

四一〇　四〇五　四〇〇

420. 佛國生れの猶太人 Michel de Nôtre-Dame (1503—1566) は有名な星學者且つ醫者で、羅典語で Nostradamus と名乘つて居た。歴史的のファウストと同時代の人物であるけれど、ここに言ふやうな本の存在は證明されない。
427. 符〔Zeichen〕猶太祕教〔Kabbala〕の神祕的表符。
426—8. Nostradamus の祕法の書も大自然の中でこそその靈驗を現はすだらうが、この室内で思案するのみではその甲斐はあるまいと嘆つて居るファウストに不思議にも、この本を手にした許りのために、靈等があたりに徘徊して居るらしい氣持がするのである。

なぜ說き明すことの出來ぬ苦痛が
お前に生命のそよぎを片端から偃き留めるのかと。
神が人間を中に造り込んで置いた
生きて居る自然の代りに
お前を取卷くのは燻つて黴びた
動物の骸骨や死人の骨組ばかりだ。

逃げよ！いざ！去つて遠方の國へ行け。
そしてこの不思議の籠つた本が、
ノストラダームースの自筆の本が
お前に取つて不足なしの道連れではないか。
其時お前は星の運行を識る、
そしてお前が自然から教へを受けると、
靈が靈に語る如くに、
魂の力がお前のうちに萌して來る。
詮ないことだ、こゝで乾燥な思惟をして
それでこれ等の神聖な符の說明がついた所で。

四二五　四二〇　四一五

＋ 大宇宙〔Makrokosmos〕—神祕的猶太祕教的教說に據れば，物質的世界天界、超天界（靈魂界、又は天使界）の三つの世界があつて、相集つて大世界卽ち大宇宙を形成する。各世界にあるものは他の世界にあるものと類似點を有し，そして三つの世界は不斷に相互に相作用し合つて居る。靈魂界に於ける神的の力はこの世界から光の如く發せられる知能に由て天界へ、次に天界から物質界へと導き下される。然るに天界及び物質的世界はその中に籠つた衝動に由てまた向上の努力をし、斯うして茲に永遠の上昇と下降がある。443—53 行はこの事を形容して居るのである。(D と Fch とより)

お前等は、これ戯ごもよ、おれの傍を徘徊ふてゐるな。
おれの言ふのが聞えたら、返辭をせい。

（書を開きて大宇宙＋の符を一瞥す。）

や！これを一目見ると忽ち
おれの五官中を何とも言へぬ歡喜が流れる。
おれは若い神聖な嬉しい生活感が新たに熾り立つて。
おれの神經にも血管にも脈々と流れるのを感ずる。
これ等の符を書いた者は一箇の神であつたのか。
それがおれに内心の狂ひ騷ぐのを鎭めて呉れ、
この哀れな胸に歡びを充たし、
そして不思議な勢ひで促して
自然の樣々なカをおれの周りに露呈するではないか。
おれは一箇の神であるのか。心がこんなに朗らかになつて來たぞ。
これ等の清淨な符を通して、おれは自然が
おれの魂の前にあつて活くのが目に映る。
今にして思ひ當るのはあの賢人の言だ。
「靈等の世界が閉されて居るのではない。

四三〇　四三五　四四〇

〔431.〕Sinner（古形の複數）＝Sinne.－〔433.〕Nerv'（複數の積り）＝Nerven.
443.－6. 茲に賢人とはクストラダームース其人の積りで言つてあるのだとDが曰ふ。これはゲーテと同時代の哲學者ヘルデル（H rder）を指すのだとする說がある。それはヘルデルの次のやうな言葉に基いて居る曰く。„Komm' hinaus, Jüngling, auf's freie Feld und merke: Die ur lteste, herrlichste Offenberung Gottes erscheint dir jeden Morgen als Tatsache, groszes Werk Gottes in der Natur.“〔いざ、少年よ、郊外の野原へ出でよ、而してこの事に意を留めよ、卽ち、神の最古在の、最莊嚴なる啓示は每朝自然に於ける神の大なる業作たる事實として汝の前に現はれて來る〕ノ はこの說を排して、この言葉は少くともゲーテのファウスト製作の初め頃までは紙に書かれて居なかつたことを

汝の感能が閉ぢ、汝の心胸が死んで居るのだ。
いざ門弟よ、撓まず倦まず、
塵界の胸を曙の光に浴せしめよ。」（符に見入る。）
まあ何うだ、一切が集つて渾一體を織り成し、
萬物が互に他の物の中で活いて生きて居る。
天界の諸ろの力が昇りては降りて
黃金の鈞瓶を差し出して居るぞ。
祝福の薰高き翼を振つて
天を降つて地界を貫き、
諧調をなして萬有のうちに響き遍つて居るぞ。

何たる莊觀だ。併し嗟乎、觀物に過ぎない。
際涯もない自然よ、どこを執つておれはお前を捉まへやう。
お前たち物の乳房を、どこを執つて？お前たち一切の生命の源泉よ、
天も地もそれに懸かり、
凋んだ胸がその方へと迫り寄る——
そのお前たちは湧いて飲ませるが、おれは斯う慕ひこがれても甲斐がないのか。

四五〇　四五五

擧げ、又、ヘルデルよりも二世紀前のファウスト（歷史的）がヘルデルな賢人として擧げるのは可笑しいと言つて居る。併しSchrの認容する樣に、ゲーテがこの言葉を直接ヘルデルの口から聞いたことが可能であるとすれば、ゲーテが無意識に或は意識してこの言葉を土臺としてこの所謂賢人の言を書いたことも可能でめらう。尤もゲーテが一定の人を賢人として考へて居たとすることは、Schrも言つて居る樣に、必要ではあるまい　一曙の光〔Morgenröte〕は眞生命の衝發の象徵と見られる。－〔454.〕觀物に過ぎない。〔Ein Schauspiel nur!〕－唯だ一箇の象徵的表呈たるに留り、本體其ものは別にあつて、捕捉することが出來ない。－＋地の靈の符〔Zeichen des Erdgeistes〕物質的世界の靈の表符。

（不興げに本の頁をはねて地の靈の符十を一瞥す。）

まあ何うだらう、この符のおれに及ぼす効驗の遙ふことは。

これ地の靈よ、お前の方がおれに近い。

最うおれはおれの力が高まつた氣持がする。

最うおれは新たな酒を飲んだやうに身がほてる。

おれは勇氣を感じる、敢て世界に踏み出して、

地上の惱み、地上の幸福を受け、

暴風に逆らつて鬪ひ、

難船の碎ける音にも畏縮まない勇氣だ。

今おれの頭上に雲がかゝる——　四六〇

月がその光を潜める——

燈火が消え失せる！　四六五

四邊が烟り立つ！赤い焰が稻妻のやうに

おれの頭の周りに光る——圓天井から

すうと鬼氣が降りて來て、　四七〇

そして、おれを襲ふぞ。

おれは氣持で分る、お前はおれの周りを漂ふてゐる、わが懇請した靈よ。　四七五

〔475.〕 一つ傳はつた寫本(Göchhausen の寫本)では、この行の末句にコンマの代りに呼び掛けの符號を付け引離して別の一行にしてあるといふ。これがここの意味にもよく適ひ、又斯うすれば、この行以下が韻を踏むことにもなる。卽ち：

Ich fühl's, du schwebst um mich,
Erflehter Geist !
Enthülle dich !
Ha ! wie's in meinem Herzen reiszt !

正體を現はせ！

や！このおれの胸の中の搔きむしられるやうは！

おれの官能が悉く搔き亂れて

新たな情緒が起る！

おれはおれの心胸が全然お前に委ねられてゐる氣持がする！

姿を現はせ。何うあつても。おれの命に懸けても。　四八〇

（本を握つて地の靈の符を不可思議にも口に唱ふ。赤き焰ぴかりと燃え、精靈焰の中に現はる。）

靈

おれを呼ぶのは誰か。

ファウスト（顏を背向けて）

恐ろしい顏だ！

靈

お前はおれを勢ひ强く引き寄せた、

おれの天地に長い間吸ひついてゐた、

そして今度は—

ファウスト

〔479.〕 Sich erwühlen, sich anfreizen(Grimm's Wörterbuch)—〔481.〕 Du musst !=du musst erscheinen!(Scor)

あァあ！おれはお前には耐えられない。　四八五

靈

お前は息を顫はせながら懇願して居る、おれを窺ひ知らうと、
おれの聲を聽かうと、おれの面を見やうと。
おれをお前の魂の強い懇願が撓ませる、
それおれだ。—何といふ情ない恐怖に
超人のお前が襲はれるのだ。魂の呼聲はどこへ行つた。
あの胸はどこへ行つた、己れのうちに一つの世界を造り出して、　四九〇
保ち育くみ、おれ達と、靈等と肩を刻べやうと、
歡びに打顫えながら膨らんでゐたのに。
お前はどこに居る、おれが其の聲を聞いたあのファウスト、
全力を注いでおれに肉薄したファウストよ！
お前はこれか、この、おれの氣息に圍み脅かされて、
どこも彼も生命の底から震へて居る者か、
おど〳〵としてひつ屈んで居る一疋の虫か。　四九五

ファウスト

何の、おれがお前に、焰の結ぶ形に辟易してなるものか。

(I) Eratmen, schwer aufatmen, von demjenigen, dem aus Furcht oder Ermüdung der Atem ausgegangen ist. So steht in Wanderers Sturmlied„ Den eratmenden Schritt" (D.) (II) Erathmen, aufgeregt athmen,……Erathmete bewegt im Streben : zu schauen. (I) に依れば Eratmen は「息せき喘ぎながら」とでも譯すべきであるけれど、譯者は (II) の解釋を採つて願望のために興奮したる息づがひをする意に解したのである。—〔488.〕 Neigt, ma-ht geneigt. (D.)—〔489.〕 Uebermensch〔超人〕はファウストの如き精神的に凡人の上に聳えたる巨人を表示するためにゲーテの形づくつた言葉であるが Uebermenschlich〔超人間的〕といふ形容詞が以前から用ゐられて居たことを考へると、全然新たな言葉とはされない。(Sch) ゲーテは この言葉をその詩 Zueignung (von den Werken) の中にも用ゐてゐる。—〔490.〕 Umwittern, —種の雰圍氣を以て看破的に取圍むの意。(Sachs-Villatte 獨佛大辭典)—**500.** Bin D einesgleichen. お前と同等のもの即ち一箇の靈であるといふ意 —〔503.〕 Weben は自動詞として、「織る」の意味の他動詞とは恐らく別途に形成されたもので、

おれがそれだ、ファウストだ、お前の同類だ。

靈

生命の潮ざしを成し、事業の嵐に籠り、
波立つておれは昇り、沈み、
翻動ぎ來り、翻動ぎ去る。
誕生と墓、
永劫の海、
移り變る生動、
灼熱の生存、　五〇〇
斯うしておれは時のざわめく機の上に働いて、
神たる者の生ける衣を織り成して行く。　五〇五

ファウスト

廣い世界をさまよい廻るお前、忙しい靈よ、
おれはお前にどれ程緣が近いと感ずることぞ。　五一〇

靈

お前の類するのはお前の會得する靈にだ、
おれにではない。（消え失す。）

第一には、hin und her fahren, schwebend bewegen の意で、ここのはその用例。(Heyse 大辭典)—**506.** 生動としたのは Weben とあるのを、上と同じ自動詞の第二の意味に於けるものを名詞化したものとして、Regen des Lebens, des Geistes〔生命や精神のそよぎ〕(Heyse 大辭典)とあるのが、この意味でよく Weben und Leben と對句にして用ゐられることから考へて、ここでは次の生存〔Leben〕と對を搭えたものと見られるのでも、この意味が最も適切と考へられるので、不充分ながら、この語を當てたのである。〔**508**〕 Schaffen は廣變化動詞として用ゐる一方面の意味では 一般に各種の活動業作を指す、ここのはその用例。(Heyse 大辭典)—**509.** 自然が「神たる者の衣」と呼ばれるのは、讃美歌で「神の衣の緣〔へり〕」と呼ばれるが如くであると D が言つて居るが、兩者同一視すべきこととは思はれない。殊に、神〔Gott〕と云はずして、神たる者〔Gottheit 神位(者)、神格(者)の義〕と云つて居るに就ては、作者の心持では、これを基督教的の神とは別に考へたものとしなければなるまい。

フアウスト（ばたりと倒れながら。）

お前にではない？

では誰に？

神を其まゝ寫したおれだ！

それがお前にさへ比べられない！

（戸を叩く音す。）

あゝ死滅！解つてゐる—おれの助手だ—

おれの無上の幸福は滅茶々々だ。

これ程幻の充ち滿ちて居る時を

あの乾燥な奴がこそ〳〵やつて來て妨げることとは！

（ワグネル寬ぎ衣に夜の帽にて、手に燈火を執つて登場、フアウスト不興げに顏を背向く。）

ワグネル

御免なさいまし。聽いて居りますと、あなたは御朗讀の樣子。

屹度希臘の悲劇をお讀みで御座いませう？

この道では、私も少し利得をいたしたいので御座います、

何でも當節ではこれが大へん効を奏します故。

五二五　五二〇

〔514.〕 O Tod！〔あゝ死滅！〕ゲーテは之を普通に行はれた呪ひの言葉 „Tod und Teufel!“〔死と悪魔〕の代りに用ゐて居る。(D)—〔522.〕 Höl' は最初の誤植が一應訂正された後又誤つて現はれたもので，Göchhausen の寫本にはちやんと Hört' となつて居る。(D) これは前後の關係から見ても Hört' とあるべきである。

人の褒めて申しますのを度々聞きましたが、

俳優は坊さんの先生になつても宜しいと申すことで。

フアウスト

成程、坊さんが俳優の坊さんだとね。

時折はそんな事が隨分あるまいものでもないが。

ワグネル

嗟乎、人も斯う書齋の中に押込められて、

やつとお休み日が來て世間を見、

それもやつと遠目鏡で遠方からといふ時には、

何うして世人を勸說で導くべきで御座いませう。

フアウスト

胸に感じてゐなければ、あせつてもそれは遂げられるものではない。

それが魂から突いて出て、

底力のある面白味で

聽く人凡ての心を制するのでなければだね。

お前方まあお變らず坐つてゐなさい。切り接ぎの細工をしたり、

他人の御馳走をよせて混ぜ物を揑ね上げたり、

五三五　五三〇

〔530.〕 Museum〔「書齋」と譯す〕、學者はその勉强部屋を Museum と呼ぶ。(Sch.)—539 Brauen〔「揑ね上げる」と譯す〕は人工的に拵えることの形容(D)—Bagout〔混ぜ物〕に就ては、100 の註を見よ。—Andrer Schmaus〔他人の御馳走〕は他人の精神的生產物の形容。

盛り上げたお前方の灰を吹いて、
心細い火を熾したりするがよい。
子供や人猿の讃歎はお前方も
趣味に適つたら受けられやう。
だが、お前方の肺腑から出るのでなければ、
お前方は決して心を心へ引寄せることはあるまい。

ワグネル

五四〇 では御座いますが、演説振りは辯説家の運を作ります。
私はまだ餘程未熟だとよく解つて居ります。

フアウスト

五四五 先生驚嘆な成功を求めるべしだ。
鈴振り鳴らす馬鹿であるべからず。
頭がよくて考へが正しければ演説は
技巧はあまりなくとも獨りでに出來る。
で、何か言はうといふのが眞面目であれば、
言葉を詮索する必要があるかい。
何うもお前方の演説は人文の斷片を

541. Aschenhäufchen〔灰の小堆積〕は焔火に對比して、活力に乏しきものの形容。—〔**544.**〕 Herz zu Herzen schaffen〔心を心へ引き寄せる〕他人の心をお前方の心へ(お前方の信念へ)導くの意。普通の熟語では n Ans Herz reden, ins Herz greifen.〔心に語る、心に突き入る〕と言ふ。又諺に曰く „Was nicht von Herzen Kommt, das geht auch nicht zu Herzen"〔心から出て來ぬものは、心へ響はつて行きもせぬ〕(D)—〔**548.**〕 第三人稱單數代名詞 Er を第二人稱として用ゐてあるのである。これはこゝでは不興と疎外の氣持の表現である。(諸言參照)—**549.** Schellenlauter Thor〔鈴振鳴らす馬鹿〕Hofnarr〔H

折り縮らして燦然としてはゐるが、
秋の枯葉をそよぎ渡る
濕り風のやうに氣持の惡いものだ。

ワグネル

五六〇 これはしたり！藝術は長くして「人生は短かし」—原意
我等の生は短かしで御座います。
私は評論のために奮勵して居りますのに、
何うも頭や胸のことが毎々心配になりまする。
源まで溯るに要しまする手段を
我物にするのは生やさしい事では御座いません。
そして、半途にも達しませぬうちに、
氣の毒な奴は死ぬことになるので御座いますよ。

フアウスト

五六五 羊皮紙は神聖な泉であつて
一度飲めば永遠に渴を醫するとでもいふことか。
泉が自分の魂から湧くのでなければ、
得て心氣を爽快にする時はない。

本の昔のお茶坊主の如く、宮廷に居りたるおどけ者〕の着物には鈴が着いて居た(Schr) Schellenlaut とは「鳴る眞鍮と響く鈴」云々といふ使徒の格言に基いて居る。〔D〕要するに實質なくして徒らに音ばかり立てる愚かなものゝ形容であらう。—**555.** Schnitzel Kräuseln〔斷片を折り縮らす〕は美辭や言飾で胡麻化すといふ位のこと。Kräuseln とは何かに莊飾として着けるために紙ぎれなどを折り目をつけて縮らせなどするものに譬へて言つたもの。(D.)—**558—9.** 「人生は短かく、藝術は長し。」といふのが希臘の大醫者ヒツポクリタスの最初の金言であるが、羅典譯では Ars longa, vita brevis〔藝術は長く、人生は短かし〕となつて居るのである。—**565.** 羊皮紙〔Pergament〕昔は文書は羊皮紙に認められたる故、一般に書籍のことを指す。

ワグネル

お言葉では御座いますが、誠に愉快なのは、
その時代々々の精神になつて見て、
我々より前に賢明な人が何う考へたか、そして我々が、
何うしてそれを最後に斯う立派に先へ進めたかを窺ふことで御座います。

フアウスト

さうさ、遠く星の世界までも進めるのだね。
これお前、過去の時代々々といふものは
我々に取つて七つの封印を捺した本なのだ。
お前が時代々々の精神と稱ぶものは
畢竟書いた先生方固有の精神で、
それに時代が投影して居るのだ。
で本當に、そこに度々悲慘なことがある！
人はお前方を一目見て逃げ出して了ふ。
芥箱とがらくた部屋で
高々主要事件や國家事件に、
操り人形の口になら應はしい

五七〇　五七〇　五八〇

〔570.〕 Ergetzen は Ergötzen の古い形。(Schr)—576. 七つの封印を捺した本〔Ein Buch mit sieben Siegeln〕とは、新約約翰默示錄 5 の 1 以下に基いて、不可解なるものゝ比喩。一こゝにゲーテは 恰も彼の時代に現はれて居た學者の僭越な主張を諷し罵つて居るのである。(D)—582. 芥箱とがらくた部屋〔Ein Kehrichtfasz und eine Rumpelkammer.〕中には何も値うちのあるものゝ這入つて居ないといふ意味にて (D) ワグネルの說く學問の空虛を指す。

氣の利いた實用向きの格言が添へてあるのだ。

ワグネル

でも、世界で御座いますね、人間の心と靈で御座いますね。
誰も彼も矢張それに就いて何か知りたいと思つて居りますので。

フアウスト

さあ、その所謂知るといふ事がだ。
誰が生れ兒を正しい名前で呼べるものか。
少數の人達がそれに就いて何かを知つて
愚かにも、自分の胸を其まゝ護つては置かずに、
自分の感情や嶺ひ知つた事を愚民共に明かしたが、
さういふ人達は昔から磔けにされたり、燒き殺されたりした。
いやお前、最う夜が更けた、
今夜はこれで話を切り上げなけりやあ。

ワグネル

私は、ならば何時までも起きてゐて
あなたと斯うした學問上のお話を致したいので御座いますけれど。
でも明日は復活祭の初めの日で御座います、

五八五　五九〇　五九五

583. Haupt=und Staatsaktion〔主要事件や國家事件〕とは Johann Velthen (1704年死)以來、滑稽的な世話劇に對して、外國の事を仕組んだ英雄談や歷史物の芝居を呼んだ名稱である。これは矯飾に充ちた無趣味なもので段々惡變して、後に Gottsched に由て獨逸國內から驅逐された。(D)

一言二言お尋ねするのをお許し下さいまし。
私も熱心にこれ迄研究に身を入れて參りました。
知つた事も澤山ありは致しますが、何も彼も知りたいので御座います。（退場。）　六〇〇

フアウスト（獨り。）

まあ何うだらう、期望といふ期望が頭になくなつて了ひはせずに、
心が空つぽな代物にすがり着いて、
貪慾な手を延ばして寶を掘らうとし、
蚯蚓でも見つけると嘻しがつて居ることは。　六〇五

あゝいふ人間の聲がこゝで精靈が
おれの周りに充ち滿ちてゐる所で響いてなるものか。
だが嗟乎、今度はおれもお前に感謝する、
地上の子のうちで一番見すぼらしいお前だけれど。
おれの五官を最う滅茶々々にしやうとした
あの絶望からおれをお前が救ひ出したのだ。
嗟乎、あの現はれた姿の巨大であつたことは、
おれが自分を全く矮人と感じさせられた位だ。　六一〇

602. 期望〔Hoffnung=engl. hope〕好もしきことの將來出來るといふ見込。

おれは神の姿其まゝの者で、既に
永遠の眞理の鏡に面接する思がして、
天の光灼と清朗の境涯とのうちに自分自身を味はつて、
地上の子から脫却してゐたのに。　六一五
おれは火焰天使にもました者で、その自在な力が
最う自然の脈管に流れ遍らうと、
そして創造しつゝ神々の生を享けやうと、
胸を躍らして企てゝゐたのに、何といふ罰せられやうだ。
雷のやうな一語がおれを跳ね飛ばした。　六二〇

おれは自分を敢てお前に比べてはならぬのだ。
おれはお前を引寄せる力はあつけれど、
お前を引留めて置く力を少しも有たなかつた。
あの嬉しさ極まつた瞬間に
おれは自分がそれは小さく、それは大きく感じられた。
お前はおれを殘酷に　六二五

618. Chemb〔火焰天使〕—Dionysius Areopagita の天國の天使階級の書に依れば，Seraph〔六翼天使〕等が最も神に近い、それよりも遠く離れて Chemb 等が神を圍繞して浮動し、も一層離れた所に Engel〔普通の天使〕等が居る。(Schr)

不確かな人間道へ突き戻した。
誰がおれを敎へて呉れる。何をおれは避くべきか。
おれはあの熱欲の指圖に從ふべきか。
嗟乎、我々の爲す行ひも我々の受ける苦しみと等しく、
我々の生命の行く道を塞ぐものだ。

神靈の受け納れる一番立派なものにでも、
緣遠い緣遠いものが始終押かけて混り込む。
我々がこの世の善に達して見れば、
更に善なるものは虛僞で妄想だといふ。
我々に生命を與へたあの華々しい感情は
塵の世のごたくさに紛れて凝結する。

平素は空想が大膽に翺翔して
期望に充ちて永遠なものにまで擴がつても、
幸福に次いで幸福が時の渦卷に陷つて碎けると、
最う空想も狹い範圍に甘んずる。

六三〇　六三五　六四〇

〔635.〕 Fremd und fremder は單純な fremder を强めた（神靈に全く緣のないものゝ意で）のである。Immer は dringt an に附屬する。Immer fremd

憂ひが忽ち胸の奥に巢をくつて、
そこで人知れぬ苦痛を拵らへ、
落つきもなく動いてゐて、快樂と安息を妨げる。
それが絕えず新たな假面を被つて來る。
家にも庭にも、女にも子供にもなつて現はれることがある、
火となり水となり刃となり毒ともなる。
お前は係け構ひもないことを何を見ても打顚へる。
決して失ふことのないものを泣いて惜まずには居られない。

おれは神々には等しくないのだ。餘りにも深くそれが感じられる。
虫におれは等しいのだ、塵をもぐるあの虫に。
それが、塵の中で身を養つて生きて居ると、
行人の足に潰されて埋められて了ふ。

これも塵ではないか、この高い壁が
百こいふ棚があつておれを窮屈にして居るのも、
おれをこの蠶魚の世界で押狹める、

六五五　六五〇　六四五

und fremder を fremder und immer fremder（或は fremder und immer fremderer）の意に解することは immer の位置が容さない。(D)

千差萬別のがらくたのこの古道具も。
こゝでおれはおれの要るものを見出だすべきなのか。
到る所に人間が苦しんで居つたことを、
時偶に幸福な者があつたことを
千卷の本の上で讀めとでも言ふことか。
何とてお前は齒を露いておれを見る、空ろな髑髏よ、
大方お前の腦髓も嘗てはおれのと同樣に途方に暮れて、
輕やかな晝の明るみを求め、重くるしい仄明るみの中で、
心から眞理を追ふて、傷ましくも迷つたからと云ふのか。
お前等機械共も屹度おれを嘲つてゐる、
車や齒車や圓筒や曲り柄のある奴等が。
おれは門扉の前に立つてゐた、お前等は鍵になるべき筈だつた。
成程お前等の鬚はちゞれてはゐる、でもお前等は閂を外さない。
白日の下にも幽妙として
自然はその被衣を剝ぎ取らせはせぬ。
そしてそれがお前の靈に明かしたく思はぬものは
横杆や螺旋でも無理には開かぬ。

六六〇　六六五　六七〇　六七五

666. Den leichten Tag〔輕やかな晝の明るみを〕、朦ろな、重くるしい仄明るみに對して、空氣の輕く感ぜられるやうな晝間を。(D)

671. 鬚のちゞれた格好が細工を施した鍵に似て居るにつけて斯う言ふのである。(Schr)

678. 古い滑車と譯した alte Rolle は一說には、ランプの上の方に置かれて煙ぶつた羊皮紙の卷物と解せられて居るけれど、ランプが小机の上に吊されて居るとすれば、その置かれ場所が可怪しいといふ D の說に從つて、ランプを吊して上下する滑車と解したのである。

おれに入用のなかつた、お前古い道具よ、
おれの父に入用だつた許かりに、お前はこゝに置かれてある。
これ古い滑車よ、お前も燻ぶるのだ、
この机の上に薄暗い燈火がいぶる限りは。
おれはこゝでおれの僅かな財産を荷に背負つて汗を垂らすより、
賣り飛ばして使つて了つた方が餘つ程よかつたのに。
お前の先祖から讓り受けたものは、
それだけの働きをして我物にするがよい。
役に立てねば何でも重荷だ。
刹那の作り出すものだけしか刹那が役に立てることは出來ぬ。

だが何故おれの目はあの一點に凝と留るのだらう。
あすこのあの小瓶は目を吸ひ寄せる磁石なのか。
なぜおれは俄かに明るい好い氣持がして、
夜中森の中で月の光が漂ふて來て包みでもしたやうなのだらう。

おれはお前に會釋するぞ、唯だ一つの細長瓶よ。

六八〇　六八五　六九〇

683. Erwirb es um es zu besitzen を一說（Schr 等）には「それを使用して以て全然自分のものにせよ」と解し、D はこの說を浅趣味な見方だと排斥して、erwirb は geniesz〔享樂〕せよ〕の誤植に違ひないと言つて居る。併し何れの見解も十分納得することが出來ないのでこれを普通の辭義通りに譯して置いたのである。

685. 刹那が何物かを作り出す限りに於てのみ、刹那が吾人に役に立ち、吾人に享樂を與へる、無爲の刹那、卽ち物の活用の現はれない刹那は吾人には役に立たないといふ意。

お前をおれは恭やしく取り卸す。
お前に於ておれは人智と人工とを敬する。
お前、有がたい眠り液を種類を盡して合せたものよ、
お前、人をも殺す微妙なる有ゆる力の萃精よ、
お前の先生にお前の好意を示して呉れ。
おれはお前を見る、と、苦痛が和らげられる。
おれがお前を捉まへる、と、欲求努力が滅ぜられる。
心靈の潮さしが段々と退ひて行く。
大海へとおれは促されて乘り出だし、
鏡なす海がおれの足下に煌めき、
新たな岸へと新たな日が誘ふてゐる。

火焔の車が輕く搖れて動いて來る、
おれを目指してだ。おれはいざと言へば、
新たな道を取つて大空を突き通り、
純一活動の新天球へ向ひ得るやうな心地がする。
この高遠な生命は、神々の歡喜のやうたこの大歡喜は！

六九五　七〇〇　七〇五

690 以下。死後の光景が夢のやうに心に浮ぶのである。
702. 火焔の車は、舊約列王紀略下の2の5にエリヤを迎へに來て天國へ乘せて行つた「火のやうな車」の如く、彼を迎へに來るものと考ふべきである。

お前は、やつとまだ蟲でゐて、これを受ける功があるのか。
好し、何にしてもあの愛ほしい地界の太陽に
決然としてお前の背らを向けろ。
誰れも成るべくはこつそりと通り過ぎる
あの門を破り開ける不遜を敢てせよ。
實行に依てそれを證する時が來た、
男兒の威嚴は神々の高きにも地歩を讓らずに、
その中で空想がわれから苦しみ拔く
あの暗い洞に面しても戰慄かず、
その狹い口の邊りに地獄が一つになつて燃え上る
あの通り路へ押し進んで行くことを。
假令虛無の中に融け去る厩れがあらうとも、
心さやかに思ひ切つてこの巢に出でゐるのだ。

さあ、水晶の清らかな盃よ、降りて來い。
お前の古い入れ物から出て來て呉れ。
おれは永年お前を忘れてゐたなあ。

七一〇　七一五　七二〇

〔710〕 Vermesse, vermiss の代り、ゲーテにあつては珍らしくない用法。(Schr)
719. この擧〔dieser Schritt〕、自殺のこと。

お前は祖先等の祝宴の席に輝いて、
お前を取つて獻酬する、
眞面目な客人等に氣も晴々とさせたのだ。
澤山の繪樣の意匠豐かな立派さを、
飲む人の務めとして、韻を履んだ句で說き明かし。
唯だ一と口に凹みの酒を乾したことが
おれに幾多の青春の夜を想ひ起させる。
おれは今お前を隣りの人に獻さうとするのでもない、
おれはお前の意匠を因みにおれの才氣を示さうとするのでもない。
こゝに一つ、急に醉はせる液がある。
褐色の流れでそれがお前を充たす。
おれの拵えた、おれの撰ぶ
この最後に飲む一盞は、全心を籠めて、
莊大な祝宴の壽きとして、この朝に齎らされよ。

（盃を口に當つ。）

鐘の響と合唱の歌。

天使等の合唱

七三五　七三〇　七二五

737 以下。D 曰く、この歌の起句は世に知れた一つの古い復活祭の歌のそれを取つたのである。その歌の始めの方は、

Christ ist erstand n
Von der Marter B.n.len.
Des sollen wir alle froh sein.

——Christus の代りに Christ とするのは普通には古風な方式に用ゐられるのみである。(Schr)

基督はよみがへれり！
死ある者には歡びぞ、
彼はしも夫の禍ひする、
忍びやかの、世襲の
瑕瑾に纏はられしに。

フアウスト

何といふ深い聲の唸りが、何といふ晴れやかな音が、
强いて盃をおれの口から引き離すのだ。
お前等沈んだ鐘の音は最う復活祭の
序開きの時刻を告げ知らすのか。
お前等合唱の聲々は最うあの慰めとなる歌を謠ふのか、
それは昔墓場の夜に天使の唇から響いて、
新たなる一つの社團を確實にしたのだが。

女等の合唱

種々の香料もて
われ等主を香はしくして、
われ等主に背かぬ者

七四〇　七四五　七五〇

747. 昔基督の復活せしといふ時のことを指す。

748. Gewissheit einem neu n Bunde を「新たな社團(卽ち基督敎徒)に確實さを與へたもの卽ち基督敎徒團の成立の基礎となるものとして」の意に解す。

749—56. 新約馬可傳 16 の 1 以下、路加傳 24 の 10 以下、約翰傳 19 の 14 以下を參照すべし。

主を臥させまつりにき。
布と紐とを
清らかに纏ひにき。
嗟乎、さるを最早
基督はこゝに在さぬ。

天使等の合唱

基督はよみがへれり！
幸福にぞある、愛する者は、
夫の憂はしき、
救はんがための
試しに耐えし者は。

ファウスト

何とてお前達は強く柔らかな刀で、
これ天の諸音よ、塵の中におれを求めるのか。
あちらの方の、情に脆い人達のゐる處を響き廻れよ。
使信をおれも聞きはする、けれどもおれには信仰がない。
不思議は信仰の最愛の子だ。

七五五
七六〇
七六五

765. 使信〔Botschaft〕はこゝでは福音を指す。
766. 不思議は Wunder〔奇蹟をも意味する〕の譯。—Wunder は信仰あるものの對してのみ存在するといふのである。

懷かしい音信の響いて來る
あの天地へとはおれは敢て欲求努力はせぬ。
それでも、若い頃から聽き慣れた響とて、
これが今も亦おれを生へ呼び戻す。
昔は肅然とした安息日の靜けき中に、
天の愛の接吻が直下しておれの上に加へられた。
その時鐘の音が如何にも深く何物かを豫覺させる響を傳へた。
そして祈禱が身も熱する樂しみだつた。
不可思議に懷かしい憧憬の念があつて、
おれを騙つて森や草原を經廻らせた。
そして千行の熱い涙を流しながら、
おれはおれのために一つの世界の出來て來るのを感じてゐた。
この歌が青春に來らむとする快活な遊びを、
春の祭の自由な幸福を觸れ知らせた。
追憶がおれを今、小供のやうな心持で引き留めて、
假初めならぬ最後の決心を醸させた。
おゝ、響き續けよ、お前達甘美しい天の歌よ。

七七〇
七七五
七八〇

767. 懷かしい音信〔holde Nachricht〕とは Evange'ium〔福音〕といふ言葉に因んで言つたものであらう、この言葉の辭義が「良き使信」といふのであるから。(D)

涙が流く、おれはまた地界の有となつたのだ。

徒弟等の合唱

埋められし人の
既に天さして、
生きて氣高き人の、
莊麗しく昇り給ひしか。
生り成ることを樂しみながら、
歡びの創造する近くにや在す。
あはれ、地の胸にすがりゐて、
われ等唯だなやむのみ。
師は友がらを、われ等をば
こゝに殘して慕ひ焦れしむ。
あはれ、師の君よ、
われ等君が幸ゆえに泣く。

天使等の合唱

基督はよみがへれり、
朽敗の裡よりしてぞ。

七八五　七九〇　七九五

787. Lebend erhabene〔生きて氣高き人の。この世に生きて居た時崇高であつた人の意〕は意味の上から見て、785 と 6 との間に置かれるべきであるが、こゝでは詩の形のために句の順が（譯文でも）變へられて居るのである。

790. Schaffende Freude〔直譯すれば「創造しつゝある歡び」〕を D は Freude des Schaffers〔創造することの歡び〕と解して居るけれど、字義通りに解して、歡びが創造しつゝあるものと見、歡喜を創造の本源と見て差支へないと思ふ。

絆を斷ちて、
歡びて免れよや。
行ひもて彼の君を讃ふる者よ、
身に愛を體し示す者、
同胞の如く食を共にする者、
教を宣べて旅する者、
歡喜の來るを約する者、
汝等に近く師の君の
汝等のためにこそ在すよ。

八〇〇　八〇五

〔**801a.**〕Thätig ihn preisen, ihn nicht mit Worten, sondern durch Thaten preisen (Schr), ihm durch gute Werke dienen u. s. w. (D) —**801b.**「行ひもて」とある次に擧げてある樣なことはやがてこの「行ひ」に當るのである。

805. Wonne verheiszen〔歡喜を誓約する〕は、基督を信じて彼の意志を行ふ者には永遠の祥福の來ることを觸れ知らせること。(D)

市門の前にて*

種々様々の散策の人出で行く。

職人の若い者二三人
何うしてそつちの方へ行くんだい。

他の二三人
おれ達あ獵師茶屋へ出掛けて行くんだ。

初めの組
おれ達あ併し粉挽車の方へ歩いて行かうと思ふ。

若い者の一人
ねえおい、水屋敷へ行くがいゝぜ。

第二の若い者
あつちは途中がさつぱり詰らないや。

第二の組
お前は何うするんだい。

八一〇

* 市門の前にて。一場所は作者が Frankfurt am Main の郊外 Fachsenhausen の邊の積りにして書いたものとされる。(D

809. Jägerhaus〔獵師茶屋〕は Frankfurt の人達の散歩の目的地の一つ(市から一時間で行ける)である。(Schr)

810. Mühle〔粉挽車〕は Frankfurt と向ひ合つて居る Mühlberg にぶんだものらしい。(Schr

第三の若い者
皆なと一緒に行く。

第四の若い者
砦村へやつて行くさ、あすこなら外れつこなし、飛切りの別嬪もゐる、極上の麥酒もある、それに上等の喧嘩が出來るよ。

第五の若い者
おい、おい、餘まり噪興ぐなよ。お前また身の皮が痒つくのか、最う三度目だぜ。おいらああすこは御免だよ、見るのも無氣味だ。

女中
いやだ、いやだ！あたし町へ歸るわ。

他の女中
あの白柳のとこへ行くと屹度あの人が來てゐるよ。

初めの女中
來てたつてあたし大して有がたかあない。あの人お前さんと並んで歩いてさ、

八一五

811. Wasserhof〔水屋敷〕も Frankfurt でよく知られた場所である。(Schr)

814. Burgdorf〔砦村〕は何處を指すといふ見當がつかない。(Schr)

818. 身の皮がむづゝくのは喧嘩がしたくてといふこと。

八二〇

踊り場ぢやお前さんと許かり踊るんだわ。
お前さんが嬉しくたつてあたしの知つた事ぢやない。

他の女中

今日はあの人確かに獨りぢやないのよ、
さう言つたもの、髪を縮らしたあの人も一緒だつて。

書生

へえ？何うだいあの潑剌した尼つ子共の歩きつ振りは。
おい貴公來給へな、あいつ等のお供をすることだ。
強い麥酒にぴりつく煙草、
それに粉粧した娘つ子、これがおれには誘へ向きさ。

町家の娘

ちよいとあの樣子の好い大僧さんたちを御覽なさいな。
ほんとにまあ見つともない。
相手が要りやあ何んな良いのだつて出來るのに、
あんな下女共なんか追ひ廻してさ。

第二の書生（初めの書生へ。）

さう急ぐんぢやない！あすこに後から二人來る。

八二五　八三〇　八三五

824. Plan〔踊り場〕は Franken 地方の俗語としての意味〔教會の祭の踊り場〕でゲーテが採用したので他にも用例がある。(Schr)

829. Herr Bruder〔こゝに「貴公」と譯す〕は古風の呼び掛け言葉で、以前には羅典語で domine frater とも言つたものである。(Schr)

830. Toback〔煙草〕はこの言葉の十七八世紀に普通行はれた形であつた。これは英語の tobacco に基いたもので、その後佛蘭西語の tabac に基いて Taback といふ形が出來て來たのである。(Schr)

眞個清楚した身裝をしてるが、
一人はおれの家の隣の娘だ。
おれは甚くあの娘が好きさ。
奴等あゝ靜々と歩いて來るが、
我々と連れになつて呉れまいものでもないぜ。

初めの書生

おい貴公、可かんよ。おれは澄し込むのは御免だい。
急いだり！あのお肴を取逃がさないやうに。
土曜日に箒を取つて動かす手が
日曜には一番旨く男を撫でゝ可愛がるものよ。

町人

いや、わたしにや氣に入りませんや、今度の市長は。
役に就いた今日では、日に增して傍若無人になつて行く。
で、町のためにはあの男一體何をしてるます。
物事が一日一日といけなくなつて行くぢやありませんか。
嘗てない壓制のされやうで、
金はこれ迄になく餘計出さゝれる。

八四〇　八四五　八五〇

845. Caressiren〔愛撫する、spr. karesiren〕は獨逸語 liebkosen に當る佛蘭西語 caresser から出來たもので、十七世紀以來餘程通俗的になつて居た。(Schr)

847. Burgemeister と書いて Bürgermeister〔市長〕の代りにしてあるのは、多分ゲーテが當時實際あつた方言を採つたものらしい。(Schr)

乞食（謠ふ）

親切な檀那樣方、美しい御婦人方、
お身粧の宜しい、お頰の紅いお人々、
何うぞや私にお日を留め遊ばして、
私の難澁を御覽じて合力して下されや、
この繰言の申し甲斐がありますやうに。
お惠みをなさるるお人こそ心も浮々なされます。
人間の皆な休んで遊ぶ一日が
わたしには何うぞ收獲日であれかしや。

他の町人

わたしは日曜や祭日には何がよいたつて、
戰や鬨の聲のお話に越した事はありませんな。
それには、遠いあの奥の土耳古で
諸國民が攝み合ひをやつてゐますからね。
こちらは窓寄りにゐて小盃でぐびり〳〵、
そして、川を下へと、塗り立てた船が滑つて行くのを眺めますな。
それから晩に浮々して自家へ歸つて、

八五五

八六〇

八六五

853. Backenroth〔頰の紅い〕は本來の成語でなく新造語であるとSchrの言つてるのは事實であらうけれど、これは、rothbackig が持續的性質を指すに反して、一時的現象（こゝで、郊外の爽やかな空氣に當つたゝめ）を意味するらしいと言つて居るのには必ずしも同意しなくてもよさゝうである。

856. Leiern をこゝでは假借的の意味に從つて、繰言をいふ意に譯した。自分のことを斯う皮肉るのは可怪しいと Schr は言つて居るけれど、指定書きがないのに、實際 Leier〔一種の琴〕を彈じて居ると見なくてもよく、歌の前後の調子から見てこの皮肉が應はしいと思ふ。

862—4. これは1768—74年の露土戰爭のことを考へて書かれたものらしい。

そして無事安穩と太平の世を祝福します。

第三の町人

お隣りの方、さうで御座んすよ。わたしも亦その流さ。
向ふは頭のお鉢を開けてやり合つて、
何も彼もごちや〳〵になつて呉れるがよい。
だが自分のとこにだけは變つた事がなかれがしてがさあ。

老婆（町家の娘等へ。）

やれ〳〵！お粉粧しだこと。血の若い別嬪達！
誰だつてお前さん達にや涎を垂らす筈さ！
そんなにつんとはしなさんな。それで結構！
そして何かお望みならわたしの力で叶へても上げられますぞ。

町家の娘

アガーテ、あつちへお出で！あんな魔法使ひなんかと
人中で連れ立つのはあたし禁物さ。
婆さんあたしに聖アンドレーアスの晩に歷々と、
あたしのお婿になる人を見せて呉れたには違ひないけど—

他の町家の娘

八七〇

八七五

876. 「アガーテ、あつちへお出で！」〔Agathe forte!〕は、之を伴れの娘に對して言つたもので、Fort! はこゝから立去るやうに促がす意味とする說と、之を惡言雜を吐して退ける言葉とする說とがある。前說では fort! の意味を斯う解すべき用例が 2, 5, 2752 にあるのを擧げ 3712 にもあるが)、又 Agathe の字義が、希臘語で「善良な女」といふのであるから、この寬法使ひ婆には應はしくないといふので後說を排斥して居る。これは何れが正しいと斷じかねる。

878. 聖アンドレーアス〔Andreas〕は娘達の守護神であつて娘達はこれに緣結びを祈願する。聖アンドレアスの祭（十一月三十日）の前夜には、娘達は、テーブルにテーブル掛けを掛け、窓を開け、そして一定の呪文を唱へると、自分の將來のお婿さんがありありと見えるといふ。（D と Schr とより。）

あたしにはそれを水晶の中に現はして見せて呉れたわ。
軍人見たいで、幾人も大膽不敵らしい人のゐる中にゐたの。
あたしは四邊中を見廻はし、方々を探すのだけど、
その人は姿を見せて呉れやうとはしないのよ。

兵士等

塀も望樓も
高い砦を、
鼻で笑つた
氣負つた娘を
おれは取つてやりたいんだ！
意氣組は大膽で、
取れるものは豪勢だ！

そして喇叭の
促がすまゝに、
歡びへも破滅へも
おれ達は立向ふ。

八八〇　八八五　八九〇

880 昔一般に行はれた迷信に依ると、特殊の水晶の精といふものがあつて、人の見たいと思ふ人物や品物の影像を水晶の中に現はして見せるいふのであつた。(D)

これが一つの奮進だ！
これが一つの生き樣だ！
娘でも砦でも
落ちないぢやゐられない。
意氣組は大膽で、
取れるものは豪勢だ！
そして兵士等は
繰り出して進み行く。

フアウストとワグネル。

フアウスト

春の優しい、物を生かす目差で
河も小川も氷の縛から解き放たれた。
谷の原には期望の嬉しさが綠に萠して居る。
あの冬は老ひさらぼへてゐて、
凜烈な山々へ引き込んで行く。
彼方からそれが、逃げ行きながら、僅かに
小粒の氷の、力もないしぐれを送つて

八九五　九〇〇　九〇五

緣して行く原の上に幾條となき糸を描く。
けれども太陽は聊かの白いものをも假借しない。
所として形成と努力との動かざるはなく、
太陽は萬物に樣々の色を以て生彩を施さうとする。
だがこの界隈には花はない、
その代りとして太陽は着飾つた人間を照らして居る。
お前振回つて、この高みから、
後ろの町の方を見てみるがよい。
あの洞然とした陰氣な門から、
色賑やかな群集がうぢや〳〵と押し出て來る。
孰れも今日は日向に曝されたいのだ。
皆な主の復活を祝つてゐる、
それといふのも、皆な、自身も蘇生つたからで、
低い家の鬱陶しい部屋を出たり、
職人や町人の身の絆を離れたり、
破風や家根の壓迫を免れたり、
往來の人の押し潰されさうな狹い町を出たり、

九一〇
九一五
九二〇
九二五

911. 太陽は雪を殘らず解かして了ふ。

寺院の尊とぶべき闇を出たりして、
皆なが照り光る所へ導かれてゐる故だ。
あれ見なさい、何と敏速に大勢が
園生や畑を通つて散ばつて行くことだ。
あれあの川に、横に列び縱に列んで、
あんなに幾つもの賑やかな小舟が動き、
そしてあの一番後の傳馬船が沈みさうな程、
人を滿載して岸を離れて行くではないか。
あの山の上の遙かの小徑からさへ
色模樣の着物が光つて見える。
あれ最う村里のどよめきが聞える。
こゝが平民の本當の天國なのだ。
老若共に滿足して歡呼して言ふのだ、
こゝではおれも人間だ、人間であつてよいのだと。

ワグネル

先生、あなたと散歩いたしますのは
面目を施すこと、又利得のあることで御座います。

九三〇
九三五
九四〇

914. この界隈は恐らく Main 河の河べりの土地を指すものらしい。Revier〔「界隈」と譯した〕といふ語が一番始めは河べりの土地を意味したのである。(Schr)

でも私は凡て粗野なことの敵で御座います故、
私獨りではうか〳〵この邊へ參りはいたしますまい。
胡弓を彈くのや、呶鳴るのや、九柱戯をするのは
私には全く何うも忌はしい音で御座います。
魔物にでも攻め立てられるやうに暴れ狂ふて、
そしてそれを歡びと稱び、それを歌と稱びます。

百姓等　菩提樹の下にありて。

踊と歌

踊りに行かうと羊飼、
短褐に飾紐や花の環で
粉粧した所は意氣だつた。
菩提樹のまはりは人一杯、
疾うから狂つて踊つてた。
よいこら、よいこら、
よいよいの、よいこらさ、
胡弓の弓がこの調子。

九四五　九五〇　九五五

952. 當り前ならば „Schon war es um die Linde voll." とあるべきをゲーテ一流の語順變更をして居るのである。(Schr) — これはこの當り前の語順にしてもこゝで詩句としての形式だけにはちやんと適ふのであるから、この變更の理由は外にあることに注意したい。

奴さんとつかは駈けつけて、
一人の娘にぶつかつて、
臂で強たか喰はした。
元氣な尼つ子振回り
そして言ふには、鈍間だねえ、
よいこら、よいこら、
よいよいの、よいこらさ、
そんな無作法はおよしなさい。

それでも四邊は大車輪、
右へ左と踊る人、
上衣が皆なひら〳〵〳〵。
顔が火照つて身がやけて、
休んで息つく腕絡み
よいこら、よいこら、
よいよいの、よいこらさ、
お臂に臂が當つたり。

九六〇　九六五　九七〇

949. 以下。この前に舞臺面が變るのである。この歌は古い民謠に倣つて作つたものでゞもあらう。(D)
964. これは矢張尼つ子の言葉として直接 961 に續くものである。

狎れ狎れしうはおしでない、
定めた女を騙すのも
男にや隨分あるものを。
男が女の機嫌とる時、
菩提樹のとこから鳴り渡る、
よいこら、よいこら、
よいよいの、よいこらさ、
どなる聲やら胡弓の音やら。

百姓衆

博士樣、よくまああなた樣は、
今日は私共をお蔑みもなされませずに、
かうした下々の者の人混みの中に、
大層な學者樣のお姿を見せて下されますな。
では一つ、私共が樽明けの酒を盛りました、
この一番綺麗な大盃をお受け下されませ。
それをかう差上げまして、私は口に唱へてかう念じます、

九七五　九八〇　九八五

973—975. は或る女が或る男に向つて言ふ言葉であるが、羊飼ひが歌の主人公であるから、D の説に從つて、男をこの羊飼ひの積りに見てよからう。

978—9. 囃子は單に囃子として挾まれたもので、前の鳴り渡るの意味を受けたものでないと見るべきで、意味の上では 977 から直ぐ 980 へ接續すべ

この酒がお渴きを止めます許りでなく、
これに籠つた滴の數ほど、
御壽命の日數が殖へて欲しいと。

フアウスト

では頂戴して元氣をつけませう。
お前さん方一同の息災を祈つてお禮を申します。

衆人周りに集つて輪を作る。

百姓衆

ほんにこの目出度い日にあなた樣は
ようこそお出ましになりました。
さていつぞや惡い病の御座いました歳には、
私共のことをよくお心に掛けて下されましたなあ。
こゝにかうして生きて居ります者のうちには、
危ない所をあなた樣の阿父樣が
えらい大熱を取除けて下されまして
疫病を斷つて下されましたのが澤山御座います。
その節はあなた樣も、まだお若いのに、

九九〇　九九五　〇〇〇

きである。從つて原文 979 の最後にはコンマがあるべきで、コロンがあるべきではない。(D)

〔984.〕 Hochgelahrten—gelahrt は gelehrt に對する古風な形でゲーテが敬語の場合に用ゐたものである。(Schr)

療病院を一々お見舞ひなされましたが、
隨分と死骸になつて擔ぎ出されるのが御座いましたに、
あなた樣は御無事でお濟みなされました。
何度も危ない瀬戸をお越しなされました。
人助けをなさる方を天の助けの神樣がお助けなされたので御座いますよ。

一〇〇五

一同

お術の確かな先生樣がお達者で、
この末長く人助けをなされますやうに。

一〇一〇

フアウフト

天に在すあの方に屈んてお禮を申しなさるがよい。
あの方が助けることを敎へ、又助けを御送り下さるのぢや。

（ワグネルと共に先へと歩み行く。）

ワグネル

先生、大したもので御座いますが、何んなもので御座いませう、
この大勢の尊敬をお受けになる時のお心持は。
自分の天賦であゝいう望ましい事の出來ます人は
誠に幸福で御座いますなあ。

1020. ゼネラービレ〔Venerabile、敬ひ尊ぶべきもの〕又はSanktissimum最も神聖なるもの〕又は Monstranz〔示し見せらるべきもの〕といふのは羅馬正敎で金製の或は金被せの入物に入れた聖餅〔Hostie、主の肉體を意味するもの〕

父は子供に先生を指さして敎へます、
皆なが皆な、何處に何處にと押し合つて急き立ちます、
胡弓は鳴り止み、踊手は足を留めます。
お通りになると、人が墻を造つてゐて、
ばら〳〵と帽子をとります。
も少しのことで、ゼネラービレでも通りますやうに、
膝をついて拜みさうで御座いましたよ。

一〇二〇

フアウスト

もう少しだから、あの上の石の所まで歩いて、
こゝで足の疲れを休めるとしやう。
度々おれはこゝに獨りで思ひに沈んで膝かけて、
祈禱や斷食をして悶えたことがある。
期望には富み、信仰は堅くて、
涙を流し、太息をつき、手を組み合せて、
おれは天に在す主に無理にも願つて
あの惡疫を絶やして貰はうと思つてゐた。
あの大勢の稱讃の聲が今ではおれを唯だ嘲るやうに聞える。

一〇二五

一〇三〇

のことである。寺院でこれに禮拜させたり、民衆の祝福の際これを持上げたりする外、これを寺院外に擔いで廻つて、民衆に禮拜させるのである。(D)

お前はおれの胸中は察し得まいが、
おれ達は父も子も中々あゝいふ讃辭に
相應する事をした者ではないのだ。
おれの父は名も知られぬ君子人であつて、
自然とその神聖な諸圏域とを、
その心がけは誠實でも、その流義として、
怪想に耽つて苦心しながら考察してゐた。
錬金術の達士たちの仲間入りをして、
所謂黒い厨に身を閉ぢ籠め、
そして、際限もない指圖書きを守つて、
色々のものを鑄合せてあの胸くさの悪いものを拵えたのだ。
その時に一つの赤獅子が、この大膽な妻さがしが、
微温湯の陽壺の中で百合の姫と娶され、
それから一緒に、ほう〳〵と燃え上る火にかけて、
花嫁部屋から花嫁部屋へと責め立てられる。
すると樣々の色をして、若い女王が
玻璃の器の中に現れて來る。

一〇三五

一〇四〇

一〇四五

1034 以下。歴史的のファウストの父は平の百姓であつた。こゝに述べてある事はノスニトラダームスの若い時の行跡（1525年に Provence に疫病の起つた時、そこを通つて多くの百姓を救つたといふ）として傳へられることからの思ひ付きらしい。(D)

1035. Ihre Kreise〔その諸圏域〕、自然の作動する種々の領域。

1038 以下。錬金術師等は自身を Adepten〔達士〕等と呼んで居た、この術に達した者といふ意である。彼等の研究室、所謂 schwarze Küche〔黒い厨〕で、金から獲られた、所謂男性的、金屬的種子、卽ち „rothe Leu"〔赤獅子〕

これが藥だ、患者等は死んだ。
そして、誰れが癒つたと問ふものは一人もなかつたのだ。
斯うしておれ達は恐ろしい煮つめ藥を持ち廻つて、
この邊の谷の原や山々にかけて
悪疫よりも遙かに遲ましい害毒を流したのだ。
おれ自身がこの毒を飲ませたのも幾千人とあつて、
それ等は病み衰へて死んだが、おれは生き延びて、
人が破廉恥な人殺しを褒めるのを聞くことになつたのだ。

ワグネル

何うしてその爲めにお憂ぎになる譯が御座いませう。
人は受け繼いだ藝能を誠實に、
そしてきちん〳〵と行つて行けば、
正廉潔白の人の道を盡したものでは御座いますまいか。
先生はお若い時は、阿父樣を敬ひなさいますと、
喜んでそのお傳へをお受けになりませう。
御成人なされて、更に博く學問をなさいますと、
先生のお子樣は一層高い境地にお達しになることが出來ます。

一〇五〇

一〇五五

一〇六〇

が、銀から得られた女性的種子、卽ち „Lilie"〔百合〕と微温湯の中で混ぜ合され、灼熱を加へて一つの入れもの（花嫁部屋）から他の入れ物へと移されて、最後に所謂賢人の石が出來た。これを彼等は „die Junge Königin"〔若き女王〕と呼んだので、これが樣々の色をして見えたのである。この賢人の石は如何なる金屬をも金に化し、如何なる病氣をも治し（そのため Panazee〔萬病藥〕と呼ばれる）、且つは不死を與へるとすらされたのである。(D と Schr とより。)

〔**1053.**〕 Den Gift〔毒を〕この言葉を男性にしてあるのは異例。

いや、この迷の海から浮き上がるといふ
望みを有つて居られる者は幸福だ。
知つて居らぬ事こそ入要のある事で、
知つて居る事は役に立てることが出來ぬ。
だが、そういふ事をくよ〳〵考へて、今眼前に有つて居る
この美しい樂しみを妨げるのは廢しにしやう。
あれを御覽、夕日の燒ける光を受けて、
綠りの原の中の百姓家が輝やいてゐるではないか。
太陽がずん〳〵と後へ退く。けふの一日も經つて了つた。
太陽は彼方へ急いで行つて、新たな生命の發動を促すのだ。
あゝ、おれに地を離れて昇らせる翼があつて。
あれをどこ迄もどこ迄も追ふて行くことが出來ればよいのに。
さうしたらおれは、永遠の夕榮の中に
靜かな世界が脚下に横はり、
高い所は皆火のやうに燃え、何れの谷間も安らかにしてゐて
銀の小川が黃金色の流れに注ぐのを見やうのに。

一〇六五
一〇七〇
一〇七五

さうすると劍難な山に如何程の峽があらうとも、
神々のに等しいおれの行程を妨げる事はないのだのに。
最う海が日影に暖められた幾多の入江を擁して、
おれの驚き見る眼の前に擴がるのだ。
だが、女神は遂に沈み去る樣子だ。
併し新たな衝動が目醒める。
おれは女神の永遠の光を吸ふために彼方へと急ぎ行く、
おれの前には晝がある、おれの背ろには夜がある、
天は頭上にあり、脚下には波濤がある。
美しい夢だ、夢みるうちに女神はおれを殘して去る。
嗟乎、夢に翔る精神の翼はあつても
肉體の翼は容易にそれに伴はぬ。
だが、誰にしも生れながら具つた事でもあらうか、
我々の頭上を、蒼空に姿を消して、
雲雀の謠ひ囀づる時や、
松の林の、針を植えた梢の空に、
翼を擴げて鷲の翔り回る時や、

一〇八〇
一〇八五
一〇九〇
一〇九五

1685. 新たな衝動次に敍してあるやうなことを憧憬する心を指す。

平野を越へ、海原を渡つて、
故里へと鶴のひたすらに急ぐ時は、
人の感情は波を打つて、高くへと又遠くへと向ふ。

ワグネル

私も氣まぐれな事を考へることはよく御座いますが、
さういう衝動を感じたことはこれ迄ついぞ御座いません。
森や野原は見あき易いもので御座いますし、
鳥の翼が羨ましくなることは私には絶えて御座いますまい。
併し私共が本を一册一册、一枚一枚と讀んで行きます
その精神上の快樂はそれと何の位違ふか知れません。
讀書をいたしますと冬の夜も懷かしい美しいものになつて、
幸深い生命の感じか手足を暖めます。
そしてゞ御座います、結構な古書でもお繙きになりますと、
先生にも天上界が其まゝ眼の前に降つて參りますよ。

ファウスト

お前は唯だ一つの方の衝動しか覺え知つてゐないのだ。
何うか、も一つの方はいつ迄も知らずに居れよ。

一一〇〇
一一〇五
一一一〇

〔1108.〕 Fergamen は Pergamen の古き形の一つ。(Schr)
〔1116.〕 Dust は、英語に dust とある如く、Staub に當る方言であつて、Dunst のことではない。(D)
1117. 高き祖宗と辭義通りに譯した hohe Ahnen を Schr. は、往古の英雄的人間の神化されて理想の世界にあるものを指すとし、Witk は、凡て偉大なる先人の死して後天國、樂園といふが如き所（宗教的觀念の相違に從つて異る理想鄉）にあるものを指すとし、D は、人間に類緣のある、人間以上の存在者等（その神靈の一部分を彼れファウストも受けて居る）を指すとして居る。この成

嗟乎、おれのうちには二つの魂が住つてゐる、
兩々互に相離れやうとしてゐる。
その一つは、愛欲の念を逞ふして、
鋭のやうな五官を以てこの世界に執着してゐる。
今一つは強ひても塵埃を離れ去つて
高い祖宗の分野に到らんとする。
あゝ、この大氣の中に、天と地との間を
支配しながら漂ふ靈等があるならば、
何うぞ黄金の氣の中から降つて來て、
おれを新たな、色賑やかな境涯へ導き去れよ。
いや、おれに唯だ一つ魔法の衣でもあつたらばなあ。
そしてそれがおれを餘所の國々へ運び行きでもすれば、
おれはそれを如何なる錦繡に代へても、
王侯の衣に代へても他人に讓りはしまいものを。

ワグネル

何うぞあの、世に知れた鬼の勢をお呼び招き下さいますな。
あいつ等は水氣の中に流れ擴がり、

一一一五
一一二〇
一一二五

語は他に用例もないものらしいのであるが、こゝに用ゐてあるだけでその意味を規定しやうとすれば、結局ゲーテ其人の世界觀の見方次第で意見の相違が生ずるので、簡説し難い問題である。
1120. 黄金の氣〔der goldne Duft〕は天の雲の漂ふあたりのことを、地上に對して、立派なものとして形容したもの。(D)
1122. 魔法の衣〔Zaubermantel〕といふ考はファウスト傳説の通俗本にも載つて居り、又魔法使ひでこれを有つて居たといふことが幾らも語り傳へられて居るといふ。

人間に四方八方からして
幾千とない危險を釀して居ります。
北の方からは齒の鋭どい靈等が矢のやうに尖つた
舌を見せて、先生の方へ薄つて參ります。
卯の方からは、物を干からびさせながら、
あいつ等が寄せて來て、先生の肺腑を滋養にいたします。
丑の方の曠野から送られますのは
先生のお頭の邊に烈火に烈火を重ねますと、
西方の齎らす群は先づ爽快にさせて置いて、
先生も野も畑も溺らして了ひます。
あいつ等は、面白がつて人に害をする性で、好んで人の聲を聽き、
我々を騙かりたい心から、云ふことをよくきゝます。
あいつ等は天から遣はされたやうな風に見せかけ、
そして天使のやうに低語きますが、言ふことは嘘で御座います。
でも最う參りませう。最う四邊が黄昏れて、
風は冷えて、霧が降りますもの。
晩になつて見ますと家の難有味が分ります。

一一三〇　一一三五　一一四〇

1132. Von Morgen〔卯の方からは〕、東の方からは。
1134. Der Mittag〔丑の方〕、南の方。

何で先生はそんなに立留つて、魂消て向ふを御覽なさいます。
何がこの薄明るい所にあつて、先生をそんなに驚かし申しますのか。

フアウスト
お前あすこに黑い犬が刈束や刈株の中をうろついてゐるのが見えるか。

ワグネル
私は篤くに見ました、見た所別に何とも思ひませんでしたが。

フアウスト
よく見てみなさい！お前あの獸を何だと思ふ。

ワグネル
尨犬で御座いますね。犬の常として、
主人の跡を搜して苦しんでゐるので御座いませう。

フアウスト
お前には目に着かぬか、あれは渦卷形の圈を描いて、
我々を遠卷きに卷いて段々と近く寄せて來るが。
そしておれの僻目でなければ、あれの歩く道には、
火花が後に渦卷の線を引いて行くぞ。

ワグネル

一一四五　一一五〇　一一五五

〔1141.〕 Englisch, d. h. wie Engel. (Schr)

私には黒い尨犬一疋の外何にも見えません。
それは大方先生のお目の迷ひで御座いませう。

フアウスト

おれはさう思ふ、あれは先でおれ達を縛るために、
今おれ達の足の周りに魔法で、目に立たぬ輪差を掛けるのだ。

ワグネル

私が見ますと、あれは臆々怖々して我々の周りを跳ねて居ります。
主人はゐなくて、知らぬ人が二人見えるからで御座いませう。

フアウスト

一一六〇

圈が狹くなつて來る、最うあれは近くへ來た。

ワグネル

お見えなさいませう。それ、犬で、妖怪などでは御座いません。
ぐう〳〵いつて怪訝さうな目をします、轉がつて腹遣ひます。
尾を振ります。凡て犬の仕癖で御座いますよ。

フアウスト

おれ達の仲間入りをせい！こゝへ來い。

ワグネル

一一六五

〔1173.〕 Dressur, Abrichung〔仕込むこと〕(Schr)

これは尨犬並に愚かな獸で御座いますよ。
先生がお立留りになれば、前に畏まります。
先生がお話しかけになれば、先生に飛びかゝります。
何か失くすれば、それを拾つて參りませう。
先生のお杖を取りには水の中へでも飛び込みませう。

フアウスト

大方お前の言ふことが道理かも知れぬ。おれが見ても、
靈の痕跡は少しもなくて、凡て仕込まれた事許りだ。

ワグネル

犬にしても良く躾けてありますと、
賢人にでも可愛く思はれませう。
これも學生共には恰好な門生で御座いますので、
先生の御愛顧を受けます丈のことは十分御座いますとも。

（兩人市の門を入る。）

一一七〇

一一七五

〔1177.〕 Scolar〔「門生」と譯す〕, Scolaris, Lehrling. (Schr)

書齋

ファウスト　尨犬と共に入り來りながら。

ファウスト

おれは野や畑と別れて來た。
あの、暗示に充ちた神聖なる黄昏の色を以て
我々のうちに良き方の魂を喚び起す
その夜があの野山をば蔽ふてゐる。
野生的の本能は今や眠つて、
狂暴な業も從つて悉く無くなつた。
今や人間を愛する心が動いてゐる、
神を愛する心が今や動いてゐる。

靜として居れ、尨犬！ちよろ〳〵と駈けるな！
闇の所で、何をさうくん〳〵と嗅いでゐる。
そこの煖爐の背ろに轉がつて寢ろ、

一一八〇　一一八五

〔1179—81.〕この原文は普通の文法では次の樣でなければならない。„die eine tiefe Nacht bedeckt, die mit ahnungsvollem, heiligem Grauen in uns die bessre Seele weckt.“ 詩形のために句の構成に無理が出來て居るのである。(D)

おれの一番良い座褥を貸してやるぞ。
外でお前は、あの坂の多い途中で、
駈けたり飛んだりしておれ達を慰ませた、
それ故今度は温良しくおれの世話を受けて、
物靜かな珍客になつて居れ。

嗟乎、この狹いわが室に
燈火がまた親しげに燃えると、
さうするとわが胸のうちが、
自からを知る心のうちが明るくなる。
理性が再び言葉を發し始め、
期望が再び蕾を開く。
人は生命の小川へと憧憬れる、
嗟乎！生命の泉へと憧憬れる。

ぐう〳〵いふな、尨犬！今おれの魂を
すつかり包んでゐる神聖なる昔響は

一一九〇　一一九五　一二〇〇

1187. 悪魔メフイストフエレスが尨犬に化けて居るので、これには闇に描いてある魔よけの符が心配になつて居ることを考へなければならない。この室へ這入つて來る時は偶然のことでこの符に妨げられなかつたのである。(1400以下の註を參照すべし。)

如何にしても獣の聲とは調和しない。
我々の慣れて、怪しみもせぬ事だが、人間は
自分等の解せぬ事は嘲り笑ひ、
屢々自分等に煩はしくなることのある、
善なる事や美なる事を見てはぶつ〳〵と言ふ。
犬も、あれ等のやうに、それでぐう〳〵いふ心か。

けれども嗟乎！最うおれは、それを切望はしてゐても、
滿足の感じが胸のうちから湧き出でる心持がなくなつた。
けれども何ゆえ流れが然かく程もなく涸れて、
我々はまた渇きに苦まねばならぬのであらう。
この經驗をおれはこれ迄少なからず嘗めて來た。
でもこの缺陷は補はれる。
我々は地界以上のものを尊重することを學ぶ、
我々は天の啓示に憧憬れる。
この啓示は何處にも增して尊とく又美しく、
あの新約全書の中に燃えて居る。

一二〇五　一二一〇　一二一五

1211. Quellen〔湧き出でる〕の代りに quillen となつて居るのは恐らく第二人樣や第三人樣の形（quillst, quillt）から間違つた類推法で拵えたものらしいけれど、或はどこかの方言に典據があるのかも知れない。(Schr)
〔1213.〕 und の後に missen を補つて考へなければならない。(Schr)

おれは胸が躍つて、原典を開いて見たくなつた、
素直な心持で、一つ、
あの神聖な原文を
おれの好きな獨逸語に譯して見たくなつた。
（一卷の書を開きて、着手す）
斯う書いてある、「初めに諭ありき。」
こゝで最うおれは行き詰る！誰かおれを扶けて先へ進ませぬか。
おれは何うしても語をそれ程までに尊重することは出來ぬ。
おれが精靈に正しく照されて居るとすれば、
おれは譯を變へなければならぬ。
斯う書いてある、「初めに意ありき。」
第一行によく意を用ゐて、
惶だしく筆を進めぬやうにせよ。
抑も意が一切を生じ一切を營むものか。
いや斯うあるべきだ、「初めに力ありき。」
だが、おれが斯う筆を下して居ると、
最う何か知らおれを戒めて、これに安んずるなと言ふ。

一二二〇　一二二五　一二三〇　一二三五

1224. ファウストは茲に新約全書の希臘語原文から約翰傳の劈頭を獨逸語しやうとして居るのである。そこに神學上の一大論爭點となつて居る、Logos といふ希臘語が出て來る。卽ち、「初めに Logos ありき。」となつて居るのであ

おれを精靈が扶けるぞ！立ち處に案じついた。
おれは心强く斯り書く、「初めに業ありき。」

これ、おれがお前と部屋を共にして居るべきならば、
尨犬よ、鳴くのを廢せ、
吠えるのを廢せ！
さういふ、邪魔をする仲間を
おれは容赦して傍に置きたくない。
おれかお前か、どちらかゞ
この部屋から退く外はない。
おれは主人權を棄てたくない、
戸口は開いてゐる、勝手に出て行けよ。
だが、これは何うだ！おれに見えるのは？
自然に有り得ることか。
幽鬼の姿か。現實にあるものか。
あれは何うだ、おれの尨犬が縱横に擴がつて行く！
無理無體に延び上がる。

一二四〇　一二四五　一二五〇

1258. 「サロモンの鑰」〔Salomonis Schlüsel〕は原名を羅典語で Clavicula Salomonis といふ、呪文に依て惡魔を追ひ拂ふ方法を敎へた本で、ソロモン王がこの術を發明したのだとして、この名稱があるのである。(schr)

1259. 以下。　の靈等の圖は犬に化けた惡魔が圖に描いた魔よけの符に遮られて外へ出て行くことが出來ないことに就て言つて居るのである。

〔1260.〕 Hauszen は hie (r) auszen を約めたもの、古い形であるが Waimar では今日でも一般に用ゐられて居る。(Schr)

あの姿は犬ではない！
何たる妖怪をおれは家へ連れ込んだのだ。
最うあれは河馬のやうに見える、
火のやうな目をしてゐる、恐ろしい齒を見せる。
やあ、見究めたぞ。
斯ういふ生半寂な地獄の外道に對するには
「サロモンの鑰」が良い本だ。

靈　等（幽下にて）

こん中に一人捕まつてるぞ。
皆な外に居れ、あの眞似するな！
地獄者の古大山猫が
罠の狐に似て怯々。
でも氣をつけろよ。
あつちへ漂へ、こつちへ漂へ、
上れよ下れよ、
するとあいつが拔け出してるぞ。
お役に立つてやれるんなら、

一二六〇　一二六五

1262. Alter Höllenluchs〔地獄者の古大山猫〕とあるのは Luchs〔大山猫〕が目が鋭どく、待伏せして惡いことをする性質があるとされて居るので、これでメフイストフエレスの性質を形容し、彼の惡魔性を地獄といふ言葉で形容したのである。(Schr)—Alter に「古」といふ字を當てたのは、原意を推して、古强などいふのに準らへたのである。

うつちやつて置くんでない！
これまで大ぶおれ達には
盡してくれた者だからな。

ファウスト

先づおれはこの獸に立向ふに
あの「四者の呪文」を用ゐる。

火の精は燃き立つべし、
水の精は曲りくねるべし、
風の精は消え失すべし、
土の精はいそしむべし。

これを知らぬ者は、
四大とその力と
その特性とを
知らぬ者に
靈等を御よる

一二七〇　一二七五　一二八〇

1275. 四者の呪文〔Spruch der Viere〕は火水風土といふ四大の精等に對する呪文。四精は卽ちザラマンデル〔Salamander〕、ウンデーネ〔Undine〕、ジールフェ〔Sylphe〕、コボールト〔Kobold〕である。

1276. Kobo'd〔土の精〕はせかせかと立働く土の靈である。固より、482に現はれて來る地の靈とは全く別のものである。

棟梁ではない譯だ。

消え失せて焰となれ
火の精！
さゞめきて流れ集れ
水の精！
照つて天象の美を現ぜよ
風の精！
家の手助けをせよ、
Incubus！ 進み出でゝ結末をつけよ。

四者の一つも
この獸には潜んで居らぬ。
落つき切つて佇んで、齒を剝いておれを見て笑ふ。
おれの今した事ではまだ痛い目を見て居らぬ。
これ、おれがも一層強い

一二八五　一二九〇　一二九五

1287. メテオール〔Meteor〕は廣く氣象上の種々の現象や流星、隕星等の現象を意味するけれど、玆では、特に流星の場合に於ける如き美しい天空の現象の意味で用ゐてある。

1290. インクーブース〔Incubus〕は、脚韻のために、Kobold の代りに用ゐられて居るのであるが、これは本來は、羅馬時代に、寶物の靈とされ、次には惡夢の靈とされ、後には人間の家事を助ける靈（Kobold と同樣に）とも考へられるやうになつたものである（Sc'n）

呪文を聞かせてやるぞ。

輩ら汝は
地獄を脱け出でゝ來れる者か。
さらばこの護符を見よ。
この前には皆な跪づくぞ、
あの暗黒の勢共が。

最うあれが刺々しい毛を堅てゝ膨れ上がる。

墮落せる有情よ、
汝はこれを讀み得るか。
これは絶えて芽ざしもせず、
説き表はされもせず、
有ゆる天に漲ぎ擴けられ、
不敵なる手に穿たれしものぞ。

一三〇五　一三〇〇

1306—9. これを見ると、こゝでファウストの見せて居るのは基督の御名の護符であると考へられる。新約全書に出て來る所謂「猶太人の王、ナザレのイエス」といふ羅典語 Jesus Nazarenus Rex Judaeorum の各語の頭字 I. N. I. R. をモノグラム〔組合せ文字〕にして教會で用ゐるのが、念呪の際にもよく用ゐられるのである。この四行の意味は、基督は卽ち神其者として萬物生成に先つて存在し、芽ざし生じたものでなく、言語を以て眞に説き示すことの、出來ぬもの、宇宙萬物の中に籠れるもの（哥羅西書〔Kolosser〕1の16—20 參照）、併し肉身のイエスとしては、死後には不敵漢のために鎗を以て突き刺された（約翰傳 2の 31と37 參照）といふのである。（D と Schrより。）

殘燼の背ろに封じられて、
膨れてあれが象のやうになる、
あたり一面に擴がり遍る、
搖けて霧にならうとする。
昇りすぎて天井に達くなよ。
棟梁の足下に身を横たへろよ。
見ろよ、おれは徒らに脅かしはせぬ。
おれは神聖なる火焔でお前を燒き焦すぞ。
待受けるなよ
あの三たび熾き立つ光を。
待ち受けるなよ
おれの術のうちの一番強い術を。

霧散すると共にメフイストフエレス行旅の修學書生(*)の裝ひして燼燼の背ろより進み出づ。

メフイストフエレス
お騷ぎは御無用なこと！何御用で御座いますか。

ファウスト

一三一〇　一三一五　一三二〇

1317—9. 神聖なる火焔〔heilige Lohe〕は三たび熾き立つ光〔das dreimal glühende Licht〕と同じものを指すので、神聖なる三位一體の符を意味して居る。（D と Schr）

*行旅の修學書生〔fahrender Scholaticus〕とは"幻術、魔術、讖言術等を修得し又は學者等と議論を闘はせるために旅行して廻る、大部分は未熟の學道人のことである。メフイストフエレスも斯ういふ書生の風をして現れて來たのである。（Tに依て。）

ではこれが彪犬の齧であつたのか
旅の書生か。この一條には笑はされる。

メフイストフエレス

改めて、博學な先生に御挨拶を申上げます。
あなたは私に強たか汗を掻かせなさいました。

フアウスト

名前は何といふか。

メフイストフエレス

それは詰らぬお尋ねでは御座いませんか、
あなたは詰といふものを甚くお蔑みになり、
一切の假相から遥かに遠ざかつて、
唯だ本體の深みを求めてお努めになるではありませんか。

フアウスト

か、これ、お前方に就て見ると、
名を見れば本體が讀めるのが常であるが、
それを蠅の神、損傷者、嘘つきなどゝ稱んでは、
名詮自稱も明瞭過ぎて困るではないか。

一三二五　一三三〇

1324. スコラスト〔Scolast〕はScholasticusを省約して拵へた語、別段典據はない。—Der Casus(羅典) der Fall. (Schr)

1334. 舊約列王紀略下の1の2にAccaron(地名)の神Beelzebubとあるのは一つの偶像神で、辭義が「蠅の神」といふのである。—新約約翰默示錄9の11に、「底なき坑の使者〔Engel〕を希伯來語にてAbbadonといひ、希臘語にてApollyonといふ」である。この希臘語は「損なひ傷ける者」の意である。—約翰

では宜しい、一體お前は何だ。

メフイストフエレス

不斷に惡を欲して
不斷に善を生ずるあの力の一部であります。

フアウスト

この謎のやうな言葉は何ういふ意味に用ゐたのか。

メフイストフエレス

私は不斷に否定する靈でありますので！
そしてこれは至當なことで。と申すのは一體、一切の生起するものは
滅するのが相當であります。
だから寧ろ、何にも生起しなかつた方が宜しい。
それで、凡てあなた方が罪といひ、
破壞といふ、一括して惡と稱ぶものが
私の本來の生息境であります。

フアウスト

お前は一部と名乘つた。でもおれの前には全體で居るのか。

メフイストフエレス

一三三五　一三四〇　一三四五

傳8の44に、惡魔が嘘つき等の父とされて居る。ゲルマン異端的の神Lokiも嘘つきとされる。惡魔の希臘語Diabolosは「讒謗者」の意である。(Dとschrより。)

1335. 6. 「不斷に惡を欲して不斷に善を生ずる」とは惡魔が常に神に反抗して破壞を逞ふしても結局神の創造力(善)を發揮するに終るといふ意を籠めて居る。(Dとschrより。)

わたしは造り飾りのない眞理をお話しゝますので。
所が人間は、この少さな愚世界は
自分を一箇の全體と思ひ做すのが常であります。
わたしは初めには一切であつた一部の又その一部であります、
闇の一部で、この闇が光を產みましたので。
この光が、この氣負つた光が今や、母たる夜と
舊來の位を爭ひ空間を爭ひます。
が、それでも望みが成就せぬのは、左程に努力はいたしても、
あれが捕はれて物體に粘り着いて居るからであります。
物體からあれが流れ出で、物體があれを美しくし、
物體があれの行く道を遮ぎります。
それでわたしの見込みを申すと、遠からず
あれは物體と共に滅びませう。

フゾウスト

それでおれはお前の負ふた結構な務めが分つた。
お前は何にも大規模の破壞が出來ぬので、
それを片つ端から小規模にやつて行くといふのだな。

一三五〇　一三五五　一三六〇

〔1347 a.〕Wenn=indem.(D)—1347b. 希臘哲學に起つた考で、全宇宙を大宇宙〔Makrokmos〕と言ひ、これに對して人間を小宇宙〔Mikrokosmos〕と言ふ。この語を譬擬〔もぢ〕つて小さな愚世界〔kleine Narrenwelt〕と言つたのである。
1349 以下。メフイストフエレスのこの思想は古代希臘の開闢說（最初には Chaos〔渾沌〕があつたといふ）に基つて居るらしい。彼なフアウスアは 1333 に渾沌の子と稱んで居る。希臘の神統記〔Theogonie〕に依れば、渾沌から Erebos〔地下の暗がり〕と黑き夜とが生じ、この兩者の混合から Aether〔光の明るみ〕と晝が生じたといふ。(D)

メフイストフエレス

尤も、さうしても、これまで格別なことは出來て居りません。
虛無に逆らうて立つもの、卽ち
「或もの」には、この無細工な世界には、
これ迄これ程　たしが手を代へ品を代へてやつてゐても、
何うもあいつには匹敵する術がありませんで、
波や暴風、地震や火事と持つて行つても、
海も陸も結局依然として平氣でゐますもの。
それからあの囊忌々しい代物、禽獸や人間といふ外道には、
こいつには全く何とも手の着けやうがありません。
わたしはこれ迄何んなに澤山のものを葬りましたらう！
が、何時も新たに、新鮮な血が循環します。
何時までもこの調子で、業を養やしたくなりますよ。
空氣からも、水からも、土からも、
千萬の芽生えが拔け出て來て、
場所の乾濕、寒溫を撰びません！
わたしが焰といふものを取留めて置かつなかつたものなら、

一三七〇　一三七五

〔1368.〕Geruhig=völlig ruhig, 珍らしい用例. Ge は意味を强める (Schr)
1377. 沼の中には生物は存在し得ず、焰は地獄に充ちて居るもの故、斯う言ふ。(Schr)

わたしには何一つ獨占の物はなかつたのであります。

フアウスト

それではお前はあの永遠に息む時なきものに、
あの、救濟のために營爲する勢威に逆らうて、
惡魔の冷たい拳を揮ふのだな。
徒らに拳を固めて意地の惡い事をするのだ。
實に渾沌の產んだ奇怪な子ではある！
改めて何か外の事をやるやうに心掛けるがよい！

メフイストフエフス

わたし共は實際思案して見やうと思つてゐます。
この次にもつと詳しくお話しをしませう。
今度はこれでお暇にさせては下さいませんか。

フアウスト

お前にはそれを訊く仔細もなさゝそうだ。
これでお前の素性も分つたといふもの。
では氣の向いた時に訪ねて來るがよい。
こゝには窓がある、こゝには戸口がある、

一三八〇　一三八五　一三九〇

1383. 渾沌の……子〔desChaos—Sohn〕, 1347 以下の註參照。

1395. **ヅルー**デの足形〔Drudenfusz〕－ペンタ**グラン**マ〔Pentagramma〕：五芒星形〕（次の註の圖を參照。）－五芒星形は古くは古代希臘の貨幣に記されて居る。これは希臘のピタゴラス學徒や新プラトーン學徒や、グノステイーク〔Gnostik〕學派に依て、神祇、完全、宇宙〔又は大自然〕乃至健康等の象徴と考へられて居たのである。中世紀以後は、これが惡い靈等に對する護符として用ゐられて來て、獨逸では今日でも田舍ではワルプールギスの時（後のワルプールギスの夜の場の註參照）、魔女等を避けるために、家畜の小屋に記すといふ。又、獨逸では、これが鶴鳥や白鳥の足跡の型に似て居ることが因となつて、夜間魔鬼の一種たるヅルー

煙突も一つあるものと承知してよい。

メフイストフエルス

白狀けて了ひませう。わたしがそろ〳〵出掛けやうとするのを
差とめますよ、ちよいとした邪魔物が、
お部屋の閾の上のあのヅルーデの足形が—

フアウスト

あの五芒星形がお前に苦になるのか。
さあ、聞かう、これ、地獄の子、
それがお前を祓ふのなら、何うしてこゝへ這入つて來た。
何うしてさういふ靈を瞞着したのか。

メフイストスエレス

あれを確と見て御覽なさい！良く描いてありません。
外へ向いた、一方の角が、
御覽の通り、少し開いて居ります。

フアウスト

偶然の事からさうなつてゐたのは有がたい。
お前はするとおれの俘になつてゐる譯か。

一四〇〇　一三九五

ーデ等に關係づけられて、ヅルーデの足（形）と稱ばれて居るのである。（M と L とに依て。）

1400 以下. 五芒星形の室外に向いた一角が圖にあるやうな風に缺けて居るので、外からこの室へ這入るのに對しては魔よけの効がないが、內側に面した圭は開いて居ないので、惡魔は出て行くことが出來ないといふことで、この特殊な事情はゲーテの發明である。（D に依つて。）－この五芒星形が閾の線に對して果して何ういふ角度を取つて描かれてあるかは到底定められない。その故は、こゝに外へ向いたのを一つの角としてあるが、おれを祓づたその圭〔die Spitze〕は」と、內側にあるこれも單數にしてあるので、

拘らず、L.22に

闇らぬ事で旨く行つたな。

メフイストフエレス

老犬は何にも氣がつかずに飛び込んだのでありますが、
只今では勝手が違ひます。
この惡魔はこの家を出ることが出來ません。

フアウスト

だが何故お前は窓を抜けて行かぬのか。

メフイフトフエレス

それには一つ、惡魔と妖怪の掟がありますので。
すべくり込んだ入口から出て行かなければならぬと申します。
這入る方は勝手でも、出て行く時は自由が利きません。

フアウスト

地獄にさへも法律があるのか。
それはおれには好都合だ。では屹度
お前方と契約も結べる譯だね。

メフイストブエレス

約束をした事は水を混ぜずに上げますし、

一四〇五　一四一〇　一四一五

〔1405.〕 Ohngefähr は „ohne Gefahr, Hinterlist" といふ本來の意味から轉じて „ohne Absicht, durch Zufall" の意となつたもので、今日では大底の場合 ungefähr といふ形に由て代られて居る。(H)

1410. 斯ういふ掟といふものが迷信にもあつたか否やは分らない。何れにしろ後の「契約」といふことを引出すに役立つて居るのである。(Schr)

それを少しでも無理に削り取りなどはしません。
でもその事はさう手短かには話せません。
この次に御相談するとしましせう。
でも今度のところはこれでお暇を下さるやうに、
偏へに〳〵お願ひします。

フアウスト

それにしても、もう烏渡居つて、
何か珍聞を聞かせた上にして貰いたい。

メフイストフエレス

今は放免して下さい。程なくまた戻つて來ます。
その時は何でも御隨意にお尋ねなすつて宜しい。

フアウスト

おれがお前に網を張つたのではない、
お前が自分から罠にかゝつたのではないか。
惡魔を抑えた者はそれを抑えて置けだ。
こいつは急にまたと捕まるものでない。

メフイストフエレス

一四二〇　一四二五

〔1420.〕 Hoch und höchst は sehr を極强めて、切に願ふ意を表はす。(Schr)

1423. Gute Mähr' sagen とあるのを D は „Rede stehen" 〔質問に答へる〕と解して居るけれど、これを形式的の言句と言ひ(Mähre は今日では Märe と綴り、Kunde, Nachricht 等の意)、獨逸中古語以來の用例から推して、こゝで「何か面白い話をして聞かせる」位の意と解する Schr の說を採つて譯した。

お好みとあれば、わたしも畏まつて、
こゝに居つて、お相手をしませう。
でもそれには條件が附いて、わたしの術で
結構にお暇潰しをしますので。

ファウスト

それは一つ見たいものだ。勝手にやつて宜しい。
唯だ併し、術は氣持のよいのにして欲しい。

メフイストフエレス

いや、あなたは、あなたの五官に取つて、
この一時間には一本調子の一年よりも
得る所が多いことになります。
優に柔しい靈共のあなたに謠つて上げるのは、
彼等の齎らす美しい繪卷物は
空な魔法の見せ物ではありません。
尙ほ亦あなたの嗅覺も慰みます、
それからあなたは舌を響應して、
そしてそれからあなたの心持が恍惚とします。

一四三〇

一四三五

一四四〇

〔1445.〕 Voran は vorher の代り。Vorbereitung といふべき所を Voran と Bereitung とに引き分けた形になつて居るのであるのある。(Schr と D とに依て。)

支度をしてかゝるには及ばない、
皆な揃つた、お始めな。

靈　等

失くなつてしまへよ、
暗いあの天井！
外から蒼空、
可愛さを增して、
につこり覗け！
暗いあの雲は
消えればよいのに。
星はきら〳〵、
幾つも日があつて
光が和やか。
御天の子達の
靈のやうな美しさが
屈んでよろめき
漂ふて通れば、

一四四五

一四五〇

一四五五

一四六〇

〔1460—2.〕 Hinüber のあとにセミコロンを、vorüber のあとにコンマを置いてなければならない。(D)

憧れる思ひが
あちらへ從いて行く。
そして衣の
飾紐がひら〳〵
諸國を覆ひ、
四阿を覆ひ、
そこには戀人、
生涯の戀人、
思ひに沈む。
四阿が並ぶよ。
芽を吹く蔓よ。
重たい房が
桶に飛び込み
潰して搾られ、
川になつて馳せる
泡立つ酒が
貴とい清い

一四六五
一四七〇
一四七五

〔1467—9.〕原詞は „Wo sich fürs Leben liebende tief in Gedanken geben(ergeben, sich)“ といふのを詩形のために語順を變へてあるのである。

〔1483.〕Genügen grünender Hügel, genügliche grüne Hügel. Genügen は genugsam〔分量的に不足のないこと〕の意味でなく、快適の意味に取るべきであ

巖の間をちやら〳〵、
後ろに山を
殘して置いて、
海と廣がる、
心ゆく、綠の
小山を圍んで。
そしてまた鳥は
甘露を啜り、
日の方へ飛んだり、
明るい島々
目ざして飛んだり、
その島は波に
搖られて動く。
そこには合唱組が
歡び叫び、
草原で踊る
人達が見える、

一四八〇
一四八五
一四九〇

る。(D) –Das Genügen=die Fülle〔充實〕、die Menge〔多數〕(Schr) –Witk もこれに似た意味に解して居る。Hügel はこゝで複數になつて居るので Schrの説も成り立ちはするけれど、譯者はDの説を採つたのである。

家を出て皆な
慰さんでゐるのだ。
こちらには山に
攀登る人達、
あちらには海に
泳いでゐる人達。
空を行く人達。
皆なが生へと、
皆なが遙かへ
愛しむ星へと、
慈愛の幸へと。

メフィストレエレス

眠つた！それでよい、これ、空氣みれいな、柔しい妨や達！
そち達は忠實に誘つてこれを寢かしてやつたな。
この演唱ではそち達の御恩になりました。
お前はまだ、惡魔を抑える男でないよ。
心地よい、夢の姿形でこれを誑らかしてやりな。

一四九五
一五〇〇
一五〇五
一五一〇

〔1504—5 a.〕Lib ende r Sterne と Selig r Huld とは文法上 Apposition〔同格〕にあつて、第二格として前の Ferne に繫がるものである。—**1501—5**b. 愛しむ星〔Libende Sterne〕を D は愛を寵めて笑みかけてこちを見て居る目的を指すものとし、Sehr は各箇の人に寵を與へる特殊の星宿のことを言ふものと解して居る。何れにしも慈愛の幸〔Selige Huld: 直譯すれば、「祥福ある愛寵」〕はこの星其ものゝ愛に就て言つてあるのである。

これを妄想の海に沈めてやりな。
だがこの闕の禁厭を裂いて解くのに
おれには一つ、鼠の齒が入り要だ。
長く呪文を唱へるにも及ばない、
最うそこで一つがさ〳〵やつてゐる、直樣文句が聞えやう。

一五一五

鼠や小鼠、蠅に蛙の殿樣が、
床虫、虱の殿樣が仰せられる、
その方思ひ切つて進み出でゝ、
そこの閾を嚙らうぞ。
あすこに油を撒り給ふと—

一五二〇

最うぴよい〳〵と跳ねて來るね。
さあ威勢よく仕事にかゝつた！おれを祓つたその圭は
先の突端の隅にある。
いま一と咬みで濟んでしまふ！—

一五二五

さてファウスト殿、そのまゝで、今度會ふまで夢みなされ。

ファウフト（目覺めながら。）

1521—4. メフィストーが五芒星形の、部屋の內側の方へ向いた圭に油を撒りかけて鼠にその場所を示すと、鼠が飛び出して來そこを嚙つて無くするのである。

1525. Fauste〔ファウスト殿〕は羅典語で Faustus の呼び掛けの形である。これはゲーテがファウストの人形芝居にあるのから思ひついたのであるといふ。

おれは又しても欺かれたのか。
精靈の氣に充ちたあの衝迫が斯うした事で消え失せるのか、
夢から假現の惡魔を見せられ、
一疋の尨犬を取逃がしたといふことで。

15 7. 衝迫としたのはDrangをこゝで心の何かを欲求して強く押し進む氣持と解しての譯である。併しgeisterreicher Drangを靈等の世界に向ふ心の衝迫と解する(D)のはいかゞと思はれる。これを靈等の顯現のAndrang〔大勢の押かけ〕と解する(Schr)のにも點頭きがたい。

書齋

ファウスト。メフイストフエレス。

ファウスト
戸を叩くな?お這入り!誰がまたおれを惱まさうとするのだ。

メフ ストフエレス
わたしで。

ファウスト
お這入り!

メフイストフエレス
三度さう言はなくてはなりません。

ファウスト
うん、お這入り!

メフイストフエレス
それでよう御座んす。
我々は仲善しになれやうと思ひますな。

といふ譯は、あなたの下らぬ物思ひを追つ拂はうと、
わたしは、この通り、高貴な若樣として、
金絲の緣飾を施した赤い衣物を着て、
上の小外套は硬ばつた絹で出來、
牡鳥の羽を帽子に飾り、
長い尖つた劍を佩きました。
そしてあなたに單簡適切にお勸めします、
わたしと對の扮裝をなさるべしと。
するとあなたは絆を斷つて、思ひのまゝに、
人生とはどんなものだかを經驗します。

ファウスト

何ういふ衣物を着た所で、恐らくおれは
この窮窟な現世の苦患を感ぜずには居られまい。
おれは唯だ嬉戲に耽るには齡とり過ぎ、
欲望を斷つて居るには若過ぎる。
世界がおれに何の滿足を與へるか。
無きに甘んずし、無きに甘んずべし！

一五三五　一五四〇　一五四五

1535 以下。民俗傳說でも惡魔はよく斯ういふ姿をして現はれて來て、Junker〔若樣〕、Junker Hans〔若樣ハンス〕、Schönhans〔美男ハンス〕などゝ稱ばれて居る。(D)（ハンスに就ては 26.8 の註を見よ。）

1546–7. ファウストはこゝで四十歲から五十歲の間の成熟した年配の男であると考へられなければならない。(Schr)

1553. 嗄れ聲で〔heiser〕は反感を與へることを意味す。(D と Schr)

これが永劫に繰返さるゝ歌だ。
これが誰にでも耳について響いてゐる。
これを、我々は一生の間、時々刻々
嗄れ聲で謠つて聞かせられるのだ。
朝目が覺めるとおれはもうそら恐しい。
あの晝を見るのかと思ふとおれは
さめ〴〵と泣きたくなる、その一日中、
望んで叶ふことば一つもないではないが、一つも！
快樂の豫覺にさへ强情な白眼の批判が
片端から水を注して行く。
おれの胸の勢よく創造するのをさへ
生活の凡百の醜面が妨げる。
亦おれは、夜の幕が降りて、
身を床の上に延しても不安は退かない。
寢て居つても安息は授けられずに、
荒誕な夢がおれを畏縮させる。
おれの胸の中に住つて居る神は

一五五〇　一五五五　一五六〇　一五六五

1558. Der は前々行の Tag を受けた關係代名詞。

〔1559〕. Krittel〔白眼の批評、瑕疵(あら)探しをすること〕はこゝで始めて文學上に現はれた言葉である。(Schr)

1566. Tausend Lebenstratzen〔生活の凡百の醜面〕の Leben を解して D は世間の生活とするに反して Schr は日常生活とし、ゲーテの晩年の Eckermann との談片を援用して居る。曰く、「わたしのファウストの第二部では、わたしは唯だ晝間の早い時間にしか、わたしが睡眠で元氣づいた、强まつた氣分のする、そして日常生活の醜面がまだわたしの心を攪さないうちにしか仕事することが出來ない。これは何れとも斷定する譯に行かない。

おれの心の奥を搔き動かせはせはする。
これがおれの有ゆる力の上に君臨してゐるものゝ、
外へ向つては何にも動かすことが出來ない。
それだからおれには存在は重荷で、
死が望ましく、生は忌はしいのだ。

メフイストフエレス

それでも死は一向どうも歡迎される客でありません。

フアウスト

嗚呼、幸福なる哉、あの、勝いくさの光輝の中で、
血染めの月桂冠を死から授かる者は、
あの、足も空に踊り狂つた揚句に、
少女の腕に抱かれなから死を迎へる者は。
あゝ、おれもあの高い精靈に面した時、
狂喜して、魂を失つて、倒れ死ねばよかつたのに！

メフイストフエレス

それでも誰やらはあの晩に
茶色の汁を飲み干さなかつた。

一五七〇　一五七五　一五八〇

1577. 前の 513 以下を參照すべし。

1584. Ein süsz bekannter Ton = ein süzser, bekannter Ton (D と Schr; 前の 54 の註を參照。) に從つて「甘美しい、覺えのある音」と解したのであるけれど、süsz を其まゝで bekannter に附屬する副詞と見て、甘美しく覺え知

フアウスト

お前は慰みに隱密を勸めると見えるね。

メフイストフエレス

わたしは全知ではないけれど、知つてゐる事が澤山あります。

フアウスト

あの恐ろしく搔き亂れた思ひからおれを
甘美しい、覺えのある音が引き出したのだ。
それが、おれに殘つた一抹の小兒の心持を
樂しかつた月日の面影で欺かつたのだ。
だがおれは呪つてやる、何でもあれ、魂を
餌で誘き手品で誑らかして縛り括り、
そして、それを光輝で迷はせ、巧言で欺いて、
この憂ひの洞に繫ぎ留めて置くものを。
豫め呪へよ、驕慢の心を、
精神の以て自からを包むそれを。
呪へよ、我々の五官に群がり迫る
あの現象の幽靈を。

一五八五　一五九〇

られて居る音と解しても通ずる、結局は同じ意味になるが。—これは言ふまでもなく復活祭の歌のことを指すのである。

1590. 憂ひの洞〔Trauerhöhle〕は苦悩の谷〔Jammertal〕と同樣な言ひ方で、この現世のことを指す。

呪へよ、我々の嬉しい夢想となつて我々を惱ませる、
あの名聞や身後の譽れといふ欺瞞を。
呪へよ、所有といひ、妻子といひ、下部といひ、
鋤鍬といつて我々に媚ぶるものを。
呪はれてあれマンモンは、財寶で誘つて
我々を放膽な事業に向はしむる時にも、
また閑散な慰みを我々に勸めて
我々を座褥に安んぜしむる時にも。
呪ひあれ、葡萄の房の靈液に！
呪ひあれ、あの最高の戀の愛寵に！
呪ひあれ期望に！呪ひあれ信仰に！
そして呪ひあれ、何にも增してあの忍耐に！

靈等の合唱（姿は見えずして。）

あはれ！あはれ！
汝そを毀ちにし、
美しき世を、
いと强き拳もて。

一五九五
一六〇〇
一六〇五
一六一〇

1599. マンモン〔Mammon〕は金銀財寶の神、起原は新約全書にあり。（馬太傳 6 9 の 24 參照　但し邦譯には　マンモン の代りに 財（たから ）とあり ）
1604. 最高の戀の愛寵と譯した höchste Liebeshulp を、D は Wieland が佛蘭西語に les dernière faveur とあるのに準じて die letzte Gunst〔最後の惠み〕と言つたのや、Winckelmann が der letzte Genusz〔最後の享樂〕と言つたのに比して、ゲーテは脚韻のために Huld としたと言つて居るけれど、Huld は必ずしも Gunst と同一とは考へられない。且つ、「最後の」といふのと「最高の」といふのとでは言ふ人の見る態度に差があると思ふ。（1505の註參照。）
1602–26. この歌に就ては種々の解釋があつて、或はこれを眞實メフィス

そが崩るゝよ、そが潰ゆるよ。
半神のそを打ち碎きにし！
われ等その
微塵をば虛無へとぞ運ぶ。
歎かはしや
あの美しきものゝ跡もなきことの。
力强き
地の國の子や、
彌麗はしく
そをまた建てよ、
汝の胸に築き上げよ。
新たに生きて、
朗らかの
心にてあれ、
新たなる歌の
響かむぞ。

メフイストフエレス

一六二五
一六二〇
一六一五

ーの部下たる靈等の嘲罵の歌（半神〔Halbgott〕といふのも全く嘲罵の語）とし（D等）、或はこれを、ファウストの通俗劇や人形芝居に現はれる善惡二靈のうちの善靈の哀嘆の歌に因んだ、善意ある靈等の謳ふ歌とする（Schr等）。この歌の原調の格調から受ける感じは第一の說を容れ難い。そして第二の說が承認されると共に、Kuno Fischer がこの歌をファウストの自己憐憫の一種とするといふことにも、作者の心に立入つて考へると、同意されると思ふ。（1627—31の註參照）
1614. Trümmern は男性名詞 Trumm の複數 Trummer が女性名詞の單數と誤り考へられて、これから更に複數として拵えられた古い形。（Schr）
1617—8.「地上界の子〔人間〕等のうちで力强き者たる汝よ、」の意。

これは私の所の
小さい奴等で御座います。
お聞きなさい、何と歡樂と事業とへ
老成ぶつて勸めまするぞ。
五官も身の液も働き止まる
寂寞の境涯から、
あなたを遠く世間へと
誘き出だす氣で御座いますわい。

煩悶を玩具にすることはお廢めなさい。
それが禿鷹のやうにあなたの生命を喰ひ物にしてゐるのだ。
人中に出ると何んな詰らぬ奴を相手にしてゐても、
あなたは人間仲間の人間だといふ氣がします。
でもこれはあなたを下司仲間に
押し込まうと言ふ積りではない。
わたしは決して偉大な者の一人ではない。
でもあなたがわたしと一緒になつて、

一六三〇
一六三五
一六四〇

1627—34. 前の歌の解釋に就て第一說を採る者はメフイストーのこの口上を言葉通りに承認して居るのである。併しメフイストーは自分勝手の嘘をついて前の靈等を自分の部下と呼ぶので、1627 以下は靈等の歌にメフイストーが自分勝手の解釋を下したもの（作者自身の心の奥ではこの歌とこの解釋とに根本には深い關係があると認めて居たかも知れないとしても）と見做してもよいと思はれる。(1607—26の註參照。)

世の中を渡つて見やうと思ふなら、
わたしは卽座にその氣になつて、
快よくあなたのものになつて了ふ。
わたしはあなたのお仲間になる、
そして御都合次第では、
召使にでも家來にでもなる。

ファウスト

そしておれはその代りにお前に何をしてやることだ。

メフイストフエレス

そのことは今急いで決めるに及びません。

ファウスト

いゝえ、いゝえ！惡魔は利己主義者だから、
何うして何うして容易な事で
他の者のためになる事をするものでない。
條件をはつきり言つて呉れ。
斯ういふ召使を家へ入れるには危險があるから。

メフイストフエレス

一六四五
一六五〇
一六五五

1636. 泥土から人間といふものを作つた Prometheus が、この人間のために天上の火を盜んだ罪に依て、天上の主神 Zeus の指圖の下に、Kaukasus 山に鎖で繫がれて居ると一羽の禿鷹〔Geier〕が來てその肝臟を喰ひ物にする、肝臟は食はれる後から後からとまた出來て來るといふ。（希臘神話。）

わたしはこの世で義務としてあなたに仕へ、
あなたの願使に從つて、怠けもせぬ息めもせぬ、
あの世で再び我々が落合つたら、
あなたはわたしにその通りにすることだ。

フアウスト

あの世といふのをおれは餘り氣に掛けない。
お前がこの世界を打ち破して屑にした上でなら、
も一つの世界が後に出來ても構はない。
この大地からおれの歡びが湧く、
この太陽がおれの受ける苦を照す。
おれがこの天地から別れることが出來た上では、
あつて宜しい何だらうと、ありたい事が出來る事が。
この上少しも聞きたくは思はない、
未來でも人は愛しの惱んだりするのかも。
またあの諸世界にも上帝下帝が
あるか何うかも知りたくない。

メフイストフエレス

一六六〇

一六六五

一六七〇

〔1663.〕 quillen. 1211 の註を見よ。

1678—85. 悪魔はどうせ新うした、眞の價値のないものしか所有して居ないだらうといふ皮肉である。1685の終りには疑問符が置かれてなければならない。

さういふ心なら、それを遣つ付けてよ御座んす。
契約をなさいな。あなたにわたしは近々に
わたしの術を見せて喜ばせて上げる。
まだ人間の一人も見ないことを見せて上げる。

フアウスト

何を憐れな惡魔のお前が見せて呉れる氣か。
人間の精神がその向上の道に努むる時、
お前の同類に了解された例があるか。
たが、お前に有るといふのは、滿腹させぬ食べ物かい、
水銀も同樣に、少しも靜として居らずに、
手に取ると融けて流れる赤い金かい、
負けて許りゐる勝負事かい、
おれの胸に縋りながら、最う隣の男に
色目を遣つて渡しをつけるやうな娘かい、
名譽の美しい快樂、神々の快樂の、
流星のやうに消え失せる奴かい。
見せろよ、折取らぬうちに腐る果物や

一六七五

一六八〇

一六八五

1686—7. 始めから腐つて居るやうな、眞價のないものや、日毎に若葉する樹といふやうな、魔術で出來る假現のものでも見せるがよい、どうせ眞價のあるものや眞實な立派なものは見せ得ないからといふ皮肉。

日毎新たに若葉する樹を。

メフイストフエレス

さういふ註文に度膽を抜かれるわたしでない。
さういふ寶物なら御用立てが出來ますな。
だが、あなた、落ついてゐて何か旨いものを
頂戴したいといふ時が遣つて來ます。

フアウスト

おれが心靜まつて安樂寢臺に寢ころぶ時が來たら、
おれは立ち處に萬事休した者であれ！
お前が巧言令色を用ゐて
おれに自適の心を起させることが出來たら、
お前がおれを快樂を以て誑らかし得たら、
その時はおれの最後の日であれ！
賭をしやう！

メフイストフエレース

宜しい！

フアウスト

一六九〇

一六九五

1693. Top！〔宜しい！〕は佛蘭西語の topeから、更に溯ると伊太利語の toppo から來た商人用語で「私は同意する」の意である。伊語 toppare が、相手の手に手を打ち合せて同意を表するといふ意味の動詞で、toppo はそれの第一人稱單數の形なのである。—〔そして打擊又打擊とだ〕と譯したのは、Und Schlag auf Schlag とあるのに就て、成語的用例のあるやうに、Schlag を運命の打擊、Schlag auf Schlag を打擊の相次で到る形容と見て、これはフアウストが誓を破つた場合に應報の相次で到ること（この以下のフアウストの言を參照）を指して言つたものと解したので、メフイストーが „Top“ と云ひながら差出した手にフアウストが手を打合せてから徐ろに „Und“〔そして〕と云つてこの成語を唱へたものと解するのである。（Hの字解とDの說とを斟酌した）。こゝの所作に就ては、Schlag を字義通りに「擊ち」と解して、繰同へし手を打合せることに解せられたり、又そ

そして打擊又打擊とだ！
將來おれが、「まあもつと居れよ。
お前は何うも綺麗だなあ。」と言つたら、
その刹那にお前はおれに械を嵌めて宜しい。
その刹那におれは甘んじて沒落する！
その刹那に死を觸れ知らせる鐘が鳴つて宜しい。
その刹那にお前は勤めを免ぜられる。
時計は留まり、針は落ちて宜しい。
時間はおれに取つては終りを告げよ。

メフイストフエレス

よくお考へなさい、わたし達はそれを忘れはせぬから。

フアウスト

それは至極御尤もなことだ。
おれは分外に不敵事を企てたのでない、
おれが固執するその通り、おれは下郎だ、
お前のか誰れのかは問ふ所でない。

メフイストフエレス

一七〇〇

一七〇五

一七一〇

の第一回はメフイストーの方から „Top“ と云つてフアウストの手に自分の手を打合せたものとされたりして居る。諸註釋者の說は煩瑣であり、又何れも十分の根據がなく、作者の眞意は結句確定はされないから、諸說を擧げて一々批判する煩を避ける。

1710. こゝに「おれが固執するその通り」と譯した原文 „Wie ich beharre“ に就いては種々の解釋があつて十分信じられる說はない。或は「おれが存在して居る限りは」と解し、或は「何物かに固着執着する場合は」と解したりする。この譯は言葉の最も普通な用法に基いた最も單純な解釋に基いたのである。卽ち 1710—11の意味を、「おれが自分の主張を斯う固執するその通り確實におれは、誓を破つた場合には、奴隸になるのだ。奴隸の主人は誰だらうとそんな事はどうでもよい」といふ風に解したのである。

わたしは今日にもドクトル祝宴に、
召使になつてわたしの義務を盡しませう。
唯だ一つ！後日のため念のために、
ちよいと二三行書いて貰ひませう。

フアウスト

書いたものまで呉れといふのか、このペダントが！
まだ一人の男子にも逢つたことがないのか、男子の一言を知らないのか。
おれの發した言葉はおれのある限りは
永劫おれを制するといふだけでは不足なのか。
世界は流れの數を盡して荒れ狂ふのに、
おれは一つの約束に抑えられて居ることなのか。
だがこの謬見は我々には病膏肓に入つてゐて、
誰れもその束縛を脱したがりはしないではないか。
幸なる哉、信義を無垢に胸中に懷く者は。
如何なる犧牲も彼に悔を殘すことはない。
けれども、字を書いて判を捺した卷物は
幽靈のやうにそれを誰れでも恐がるのだ。

一七一五　一七二〇　一七二五

1712. ドクトル祝宴〔Doktorschmaus〕は試驗に合格して新たにドクトルになつたものゝための祝賀の晏會。

1714.「後日のため念のため」に當る原句 Um Lebens und Sterbens willen〔生と死とのために〕は契約を證書にして貰はうとする際の慣用の熟語で、死んだ場合や忘れる場合のためといふ意が籠つて居るのである。(Schr)

1716. ペダント〔Pedant〕は元と伊太利語で、硬くるしい、偏僻な、瑣事や形式に拘泥する人間の義。今日普通衒學者の意に用ゐられるのはこの義からの轉用である。

筆に上せると言葉の精神はなくなつて、
支配權を有つものは蜜蠟と鞣皮だ。
何を悪魔のお前がおれに求めるのだ。
犧が、大理石か、羊皮紙か、紙か。
おれは鐵筆で、鑿で、鳥の羽で書くことか。
おれは何であれお前の撰擇に任せるぞ。

メフイストフエレス

何だとてあなたはさう熱して來て、
大袈裟に辯舌を振ひます。
何んな紙片れだつて構はない。
ほんの一滴の血で署名をなさればよい。

フアウスト

それでお前が十分滿足するのなら、
馬鹿げてゐるが、それでも宜しい。

メフイストフエレス

血といふものは全く特別な汁だなあ。

フアウスト

一七二〇　一七二五　一七四〇

1729. 蜜蠟と鞣皮〔Wachs und Leder〕は Pergament〔羊皮紙〕に書いて、蜜蠟で捺印した證書を指す。(Schr)

〔1739〕 Fratze=Posse〔悪戯〕(Schr)

1740. この時メフイストーはフアウストが證書を書いて、血で署名するのを見ながら言ふのである。

おれがこの盟約を破るといふ心配だけは無用にしろ。
おれの全力を注いで欲求努力するのは
取りも直さずおれの今約束することなのだ。
おれは餘りに高く膨れ上つてゐたのだ。
おれはお前の斑に列するに過ぎない。
あの大いなる靈はおれを擯斥した、
おれに對しては自然が閉ぢてゐる、
思索の絲は斷ち切られて、
おれは久しく智識といふ智識に嘔吐を催ふす。
五官の慾の深みへ這入つて、
燃え立つ情熱を鎭めやうではないか！
微入されぬ魔法の夜を被つて、
何ういふ奇蹟でも直ぐ出來るやうになつて居れ！
いざ、あの「時」の早瀨の中へ、
事がらの逆卷く中へ躍り込まう！
さてその時は苦痛と享樂とが、
成就するのと氣を腐らせるのとが

一七四五

一七五〇

一七五五

1764. greift(mir)zu 〔御自由にお取り下さい〕は客に御馳走物を自分で手を出して取るやうに勸める言葉（今日では普通 greifen Sie zu! と云ふ）で、メ

能ふがまゝに交錯して宜しい。
男子は何でも休みなしに身を活らかすのだ。

メフイストフエレス

あなたには制限は置かれてない。
何うぞそこらぢゆう撮み食ひをして廻り、
何かお氣に召す好物がありましたら、
逃げしなに何れ程か引つ浚つて下さい。
さあ、御自由にお取り下さい、ほけてゐなさるな！。

フアウスト

お前に言つたではないか、悅樂は問題でないと。
醉ひよろめきにおれは身を捧げる、苦痛極まる享樂に、
愛しらしい憎惡に、胸のすくやうな憤悶に。
劇しい智識慾の病が醫せられたおれの胸には
將來何ういふ苦痛でも受け入れさせてやる。
そして、全人類に授けられてゐるものを
おれはおれの内奥の自己にあつて味つてやり、
おれの心靈を以て最も高い最も深いものを攫み捉へ、

一七六〇

一七六五

一七七〇

フイストーがこれからフアウストに與へやうと思ふ享樂に就て、ふざけて言つて居るのである。

全人類の哀樂をおれの胸の上に積み重ね、
斯うしておれ自身の自己を擴げてそれの自己と合致せしめ、
そして、それ自身と等しくおれも終には碎け散つてやる。

一七七五

メフイストフエレス

いや、わたしは幾千年もこの堅い食べ物を
嚙んでゐる者だから、信用してお聞きなさい、
搖籃から棺桶までの間かゝつても一人として
この醱酵種を食べてこなした人間はありません。
手前共の言ふことを信用なさい、この全體は
單に、一箇の神のために作られてゐますのさ。
彼れは身を永劫の光輝の中に置いて、
わたし達は闇の中へ持つて行つた。
で、あなた方に役に立つのは晝夜きりだ。

一七八〇

フアスト

併しおれはやつてやる。

メフイストフエレス

いかさま、おやんなさいませう。

一七八五

1789. Associeren〔組合ふ〕は佛蘭西語 associer から出來て、本來は一般に「聯合する」の意から轉じて商業上では「組合商賈を始める」意に用ゐられて居る。こゝではメフイストーがこの意味をシヤレに用ゐたものと見るがよいと思ふ。

たが唯だ一つわたしに氣懸りな事がある。
時は短く、藝術は長しだ。
あなたは人の敎を聽く方だと思ふ。
一人の詩人とお組合ひなさいまし、
先生に賴んで、心の中で遊歷して、
有りとある高貴な資質を
あなたの君子膈天の上に積み重ねさせなさいまし、
獅子の勇氣や、
鹿の快速さや、
伊太利亞人の火のやうな血や、
北方人の根氣の强さやをね。
彼に祕訣を見出ださせて、
寬大と陰險とを一身に兼ね、
又、温かな青春の情慾を以て、
豫定の計畫に從つて慾れ込みなさい。
わたし自身もさういふ先生を知己にしたいのだが、
それを小宇宙先生と稱んでやらうに。

一七九〇

一七九五

一八〇〇

1793. は 1791 に所謂高貴なクヮリテート〔Qualit t=Eigenschaft：資質〕の實例を列擧したのである。

1802. 小宇宙〔Mikrokosmus〕、1347 の註參照。

ファウスト

若し、おれが努力してもこの人類の頂冠を、
有ゆる官能の求めて犇めくそれを
手に入れることは可能でないとすれば、おれは一體何だ。

メフイストフェレス

あなたは結局あなたゞけのものだ。
幾百萬の攣れ毛束の鬘をお冠りなさい、
幾尾と高い靴に足をお載せなさい、
あなたはそれでも依然としてあなたゞけのものだ。

ファウスト

おれはさういふ氣がする、徒らにおれは
人間精神の有ゆる寶物を自分の上に攫ひ寄せたが、
最後に靜と坐つて見ると、それに拘らず、
心の奥に何の新たな力も湧いて出ない。
おれは一髪の幅ほども高さを加へてゐない、
無窮なるものには一歩も進み寄つてゐない。

メフイストフェレス

一八〇五

一八一〇

一八一五

1803. 人類の頂冠〔der Menschheit Krone〕、全人類の受けることを許されに有ゆる享樂を統べ合せたもの（D）で、上にファウストの述べたてゝ來たものを一纏めにして言つたのである。

〔**1805**〕dringen は drängen の代り。495 の註參照。(Schr)

いや、先生、あなたは物事を見るのに、
世間並みそのまゝの見方をなさいますね。
我々はもつと悧巧に振舞はなければなりません、
でないと手遲れして、人生の悦樂が逃げ出します。
なに箆棒な！成程手と足と
頭とおし◇、これがあなたのだ。
だが、何であれ自分が威勢よく受用したら、
それも一樣に自分のぢやありませんか。
わたしが六足の馬の代金を拂へたら、
そいつ等の力はわたしのぢやありませんか。
わたしは駈けて行く、ちやんと一人の男でゐて、
わたしに二十四本の足でもあるやうにね。
だから元氣々々！考へ事は一切お廢しなさい、
そして一緒に世間へ一文字に駈け込むんだ。
お聞きなさいよ、思辨に耽る先生は
獣が乾からびた荒野原をぐる〳〵と
惡靈に引廻されてゐるやうなものだ、

一八二〇

一八二五

一八三〇

1820. H——〔おし◇〕, Hintern〔臀部〕と云ひかけて中止したのである。(Schr)

〔**1825**〕die meine は die meinen の代り、Frankfurt の土地訛 (Schr)

周りは一面綠りの牧場になつてゐるのに。

ファウスト

手始めには何うするのか。

メフイストフエレス

今にでもこゝを出て行きます。

これは何とした拷問場だ。
何とした生活を送るといふものだ、
自分も退屈し、弟子共も退屈させて。
これはお隣の便腹さんにお任せなさいな。
何であなたは屠藥を扱いて身を苦しめる氣だ。
あなたに分ることの出來る一番良い事は
小僧共にお話しなさることもなりますまい。
丁度今、一人廊下に來てるのが聞えます。

ファウフト

おれにはそれに會ふことは迚も出來ない。

メフイストフエレス

あの子供可哀さうに長く待つてゐます、

一八三五　一八四〇

〔1837.〕 ennuyiren (spr. ann—; 佛語 ennuyer より。)=langweilen.

1838. 便腹〔Wanst〕とは何の向上心もなく安逸を貪つて居る凡俗人の比喩として用ゐられたもの。これに隣人〔Nachbar〕と冠してあるのを解して、D はファウストが斯ういふ人達の中に生活して居たからだとし、Schr は der erste beste の意味で、さういふ風の人なら、誰でも構はぬ、まつ先に見つかつた人に任せるといふことに見て居るけれど、何れも十分な解釋とは思はれない。—— メフイストーは別にこれと定まつた人を考へずに出鱈目を言つて居るのも知れない。

慰めてやらずに歸してはなりません。
さあ、あなたの上衣と帽子をお貸しなさい。
さういふ假裝はわたしに珍妙に似合ふに違ひない。

着換へす。

後はわたしの才智にお任せなさい。
四半刻の時間しか要りません。
その間に樂しい旅のお支度をなさい。

（ファウスト退場。）

メフイストフエレス

（ファウストの長き衣物を着て。）

何でも理性と學問とを、
人間の無上最高の力を蔑視しろ、
何でも幻術魔法に身をはめて、
嘘言靈に氣力を授かれ。
さうすると最うお前はそつくりこつちのもの—
彼れに運命が心靈を一つ與へたが、
これが不羈に先へ先へと押し進み、

一八四五　一八五〇　一八五五

839. 〔屠藥を扱く〔(leeres) Stroh dreschen〕とは、無効の或は空虛な仕事に骨折ることの形容。こゝでは普通の用例に違つて、この leeres〔空虛なる〕といふ言葉が缺けて居るけれど、勿論これが有る積りで解釋しなければならぬ。

1842. 〔丁度今〕は glejch = eben (D に從つた譯 Schr がこれを、この場合、(今しがた)の意味だと見て居るのは 2344 の意味から推したものらしいけれど、これでは hör'(ich)〔聞える〕といふ現在動詞が反則になる 前に聞いたのを別にして、兎に角現在聞えて居るといふ刹那の感覺を單純に言つたものと 見てもよからうが、メフイストーの言葉を文字通りに承認して論理を 明かにする必要もあるまい。

そしてその慌たゞしい欲求努力が
地上世界の悦樂を飛び越すのだ。
彼れを連れておれはあの荒くれた生活の中を、
平板な瑣事の中を引ずり廻す。
彼れを蹣かせ、凝り固まらせ、粘り着かせてやる。
そして、彼れの飽くことのないのに對して、
食べ物や飲み物を食意地立つた唇の前にちらつかせてやる。
彼れは渴を醫しやうと甲斐もなく懇願するだらう。
が、假令んば惡魔に身を委ねなかつた所で、
彼れは矢つ張破滅せずにはゐられぬ譯だ。

一學生　登場。

學　生

私は當地へつい近頃參りました者で、
人が皆畏敬してお噂さをします
その御人物に拜謁してお話が伺ひたいと存じまして、
謹んで罷出でゝ御座います。

メフイストフエレス

一八六〇

一八六五

一八七〇

〔1861〕 Unbedeutheit は Unbedeutenheit〔瑣事〕の代り。(Schr)

1862. 蹣く〔zappeln〕は窮地から身を拔き出さうとして、騷燥することを凝り固まる〔starren〕はその他の凡ての事に對して無感覺になるやうな或一情熱の强まることを、粘りつく〔kleben〕は下等な情慾の對象に執着することを指す。(D) ——これは必ずしもこれだけの事と解しなくてもよいと思ふ。

これは御鄭重な御挨拶で甚だ恐悅に存じます。
御覽の人物は他にも有ふれた人物に過ぎません。
あなた最う他處へも行つて御覽なすつたか。

學　生

何うかあなたが私の面倒を見て下さいませんか。
斯うやつて參りました私は氣力には滿ち、
金は凌ける程にあり、血はまだ新らしう御座います。
母が中々傍を離さうともいたしませんでしたのに、
旅の此地で何か一廉の學問をいたしたいと思ひますので。

メフイストフエレス

だとあなたは恰好な土地へお出でなすつた。

學　生

正直の所は、最う立去りたい氣がいたしますが。
斯ういふ石壁や斯ういふ堂は
何ういたしても私の氣に合つて呉れません。
誠に何うも切り詰められた場所で御座いまして、
何一つ綠色のものも、立樹一本も見えません。

一八七五

一八八〇

一八八五

〔1877.〕 Leidlich〔淺げる程〕と譯す〕は「忍び得られる」の意が丁度間に合ふ程の意に轉用されたもの。(Schr)

〔1881.〕 Aufrichtig h.i wenn ich aufrichtig die Wahrheit sagen soll. (Schr)

そして講堂で、腰掛にかけますと、
私は耳も目も頭もぼうつといたします。

メフイストフエレス

それは唯だ習慣に依りますな。
さういふもので小兒は母の乳房を
直ぐ最初からは含みたがらないが、
程なく旨がつて飲むやうになります。
さういふ譯で、あなたも智見の乳房が
日に增して戀しくなつて行きませう。

學生

私もその智見の胸に取りつきたいのは山々で御座います。
聞かして下さいませんか、何ういたせば、そこに達し得ますものか。

メフイストフエレス 一八九〇

外の話をなさる前に、同ひませう、
あなたは何ういふ分科をお選びか。

學生 一八九五

私は一廉の學者が志望で御座いますが。

1897. Facultät〔分科〕、大學に於ける法文醫農理工等の各科の稱。

そして、慾には地上と天上とに
ありますものを、學問と自然とを
會得したいので御座いますが。

メフイストフエレス 一九〇〇

それは適切なお考へで。
だがわき見をなすつてはいけませんよ。

學生

私は身も魂もそれに打込みます。
尤も併し、樂しい暑中のお休みには、
少しは自由があつて暇潰しの慰みでも
出來ますと有がたいので御座いますが。

メフイストフエレス 一九〇五

時間を善用なさるがよい、光陰は矢の如しだから。
でも秩序が時間を儲けさせます。
だからね、お勸めしますのは
第一には論理の講座だ。
そこであなたの精神かちやんと仕込まれて、 一九一〇

〔**1904.**〕Seel' und Leib, 普通 Leib und Seele といふのを脚韻のために顚倒したのである。(D).

〔**1911.**〕Collegium Logikum (lat), die Vorlesungen über die Logik (schr)

西班牙長靴を穿かせて、紐で締めつけられ、
それで、精神が爾後は前より思慮深く
思想の道筋をのろ〳〵と辿るやうに、
そして、横や斜めに、あちこちと
鬼火めきなんぞしないやうにされます。
それから幾日間も教へられるのが、
あなたの平生は一氣にやつた事に、
飲み食ひのやうな勝手な事に、
一、二、三とつける必要があるといふ事だ。
固より思想工場では
機屋の名技と同じ譯で、
一足踏めば千本の糸が動き、
梭はあちらへこちらへ射て通り、
糸は見る目を掠めて飛び、
一打ち打てば千の連絡がつけられる。
哲學者といふものが這入つて來て、
そして證明して呉れます、これはさうある筈だとね。

一九一五　一九二〇　一九二五

1913. 西班牙長靴〔Spanische Stiefeln〕はふくらはぎをむごく締めつける拷問の道具（D）。
〔**1917.**〕irrlichteliren は名詞 Irrlicht〔鬼火〕をもぢつて動詞を作つたのである。Irrticht は直譯して 迷ひ光 であるからこの意味でもしやれたものらしい。
〔**1923.**〕Weber=Meisterstuck は直譯すると「機屋の名作品」であるけれど、こゝでは製作中の技術に就て云つて居るので、名技としたのである。
1935. 機屋〔Weber〕な、上に述べた名技に因んで、立派なものを創造する天才者の比喩として、哲學研究者は思想の創造的活動を論理的に説明するけれども、自身には思想上の立派な創造は出來ないといふ意を表はして居るのである。――このあたりはゲーテが當時 Leipzig に廣がつて居た Wolf（カントの先

第一段は斯うだつた、第二は斯う、
だから第三、第四は斯うだ、
そして若し第一、第二がなかつたらば、
第三、第四は何時になつてもない譯だと。
これを到る處の學生が稱讃します。
併し一人も機屋にはなつてゐません。
何か生氣のあるものを認識して記述しやうとする者は、
先づ精神を追ひ出だす工夫を凝します。
さうすると部分部分は手に握るが、
惜しい哉、精神的の脈絡は脱けてゐます。
これを化學は Encheiresin naturae と呼ぶ、
自身を罵るに當るのに、その譯を知らずにゐます。

學生

仰しやる事が何うもすつかりは分りませんが。

メフイストフエレス

なに、あなたが何も彼も還元したり、
それ〴〵に分類したりする稽古をすると、

一九三〇　一九三五　一九四〇

途）哲學を嘲罵したものである。（D）
1940. 羅典語で Encheireisis は化學上の作業（處置）を意味する言葉として古くから用ゐられたものであるといふ。ゲーテはこの言葉の本來の辭義が「手で扱ふこと」といふのであることを考へて、Encheiresis naturae〔普通に譯して「自然の處置」〕といふ、恐らく彼れ自身が新造したとされる成語を「自然を手先で（表面的部分的に）取扱ふこと」で、自然を精神で（內面的統一的に把握會得することではない」といふ意味になつて居るものとし、これは化學が化學自からを嘲罵するに當る言葉であるのにこの事を知らずに居るといふことにしたものと察せられる。諸註釋者の解では十分判然しないので、それは擧げない。
1944. 還元する〔reduciren, 獨化羅典〕は根本概念に引戻して考へるの意。（Witk.）

つい其うちに分りがよくなります。

學　生

私は斯う色々のお話で馬鹿のやうになりまして、
何だか頭の中で粉屋の車でも廻つて居りますやうで。

メフイストスエレス

それからだな、何は扨て置いて、
あなたは形而上學に取掛らなければなりませんよ。
すると分りますよ、あなたが人間の頭惱に適合しないものを
思ひを潛めて把握することの出來るのが。
頭惱に這入るものにも這入らぬものにも
一つ一つ美事な言葉が御用を待つて控えてゐます。
だが眞先にこの半年間は
最善の秩序に意を用ゐなさい。
あなたは毎日五時間の課業がある。
鐘の鳴ると共に中へお這入んなさいよ。
前以てよく豫習をして、
一章一節とよく覺え込んで置きなさい、

一九四五　一九五〇　一九五五

1959. Witk に依れば、ゲーテ時代には大學の講座で大底は或る教科書を講義の土臺に用ゐたもので、こゝにはその事を指して居るのであるといふ。一章一節と當てた原詞 Paragraphos は「文節」といふ羅典語の複數を對格の形にして用ゐたもの。(Sehr)

すると後で尙よく分りますから、
先生は本にあることの外は何にも話さないのだと。
だが、筆記には精をお出しなさい、
聖靈が口授してゞもゐる氣でね。

學　生

それは二度と仰しやつて下さるまでも御座いません。
どれ程それが役に立つかは自身考へて居ります。
白の上に黑といふものが手にありますと、
心强く自家へ持つて歸れますもの。

メフイストフエレス

だがまあ分科を一つお選びなさいな。

學　生

法律學はやる氣になれません。

メフイストフエレス

わたしもそれをあまり惡い事には思へません、
わたしはこの學科の樣子も知つてゐますので。
制度法律も遺傳して行きますよ、

一九六〇　一九六五　一九七〇

1963. Heilig' Geist〔聖靈〕にあるやうに形容詞の語尾變化（こゝでは e）を書くのは、古くあつた形で、聞いて古めかしい感じのするものである。(D と Sehr より。)

一つの永遠な病氣のやうにね。
そいつがずる〳〵と代を追ふて傳はり、
又所を追ふてそろ〳〵と移つて行きます。
條理は沒條理になり、善行は苦腦になります。
子孫に生れて來た者は禍なる哉だ。
我々の有つて生れた權利はといふと、
それは、悲しい哉、一向問題にされません。

學生　一九七五

お話を伺ふと、厭さが一層募ります。
あなたに諭して頂く者は誠に仕合せで御座いますよ。
それで私は神學でも勉强したいと存じますよ。

メフイストフエレス　一九八〇

わたしはあなたを歸路に導きたいとは思ひません。
一體此の學問となると、
間違つた道を避けることが中々難かしい。
その中には潛んだ毒がそれは澤山にあつて、
そして藥と見分けることがほと〳〵出來ない。

メフイストフエレス　一九八五

一番良いのはこゝでも、あなたが唯一人の先生のだけを聽いて、
そしてその言葉を堅く信奉しなさることだ。
總じて言葉に縋つておるでなさいよ。
するとあなたは不惑の門を潛つて
確實の殿堂へ這入ります。

學生　一九九〇

でも言葉には一つの概念がある筈で御座います。

メフイストフエレス　一九九五

宜しい、分りました。だが餘まりくよ〳〵と案じ煩ふものではない。
何故といふと、概念の缺けてゐる所へは
言葉が旨く間に合ふやうにやつて來ますから。
言葉では結構に爭論が出來ます。
言葉では體系の膳立が出來ます。
言葉では立派に信仰して居られます。
一箇の言葉からは一箇のヨータも奪はれません。

學生　二〇〇〇

御免不さい、色々とお尋ねしてお邪魔をいはしましたが、

2000. ヨータ〔iota〕は希臘語の最も小さな字母の名、極めて小きなもの、少しのものゝ形容。

それでも、も少し御面倒をお願ひしなければなりません。
何うか醫學のことに就きましても私に
手強いお言葉を一つ聞かして下さいますまいか。
三年の月日は短かいもので御座いますのに、
まあ何うで御座いませう、見渡す處は眞闇茫々として居ります。
一寸指で方角が指して貰へましたら、
後は最う手探りでも參れませう。

メフイストフエレス（獨語。*）
おれは乾燥な調子には最う飽きた。
また確かり惡魔で演つてやらなくちや。
（聲高く。）
醫學の精神を把握するのは造作もない。
あなたは大世界と小世界とを隈なく研究する、
すると結局それを取逃がす、
これが神樣の思召なので。
あなたがそこら中を學問式にぶらついたとて詮がない、
各人銘々その學得し得ることしか學得しないのだから。

二〇一五
二〇一〇
二〇〇五

* 獨語は原文で Vor sich の代りに für sich となつて居る、外にゲーテの若い時分に書いたものにもこの用例があるといふ。(Schr)

だが、刹那刹那を捉まへるのが
男らしい男といふものだ。
あなたはまだ相應に良い體格をしておいでだ、
膽力もあなたには缺けてゐますまい。
で、あなたが御自分自身に信頼して居りさへすれば、
他人の心もあなたに信頼します。
殊には女共を扱ふ修行をなさるがよい。
あいつ等の久遠永劫難やとか悲しやとかの
百萬遍を
治するに一つの甲所がある。
で、あなたが半分程君子然としてゐると、
あいつ等は皆なあなたの掌中に落ちる。
稱號を一つ貰ふと初めてあいつらが打解けて來ます、
あなたには諸藝に越した藝があるといふことで。
そこであなたはようこそお出でとあいつ等の七つ道具を索りあてる、
他の奴等は何年も周りを撫で廻してゐる所をね。
脈を取る指にちやんと力の入れ方を心得なさい、

二〇二〇
二〇二五
二〇三〇

〔2026.〕 Curiren (spr. kur—; 獨化羅典) heilen.
〔2028.〕 S—V に ihr 以下を擧げて、「彼女等は皆あなたに服して來る。」と譯してある意味を採つて譯した。

そして、燃え立つてこすく物言ふ目で、
何でもその花車な骨盤の邊を見据てゐ、
紐の締りの堅さ加減を見て取りなさることだ。

學　生

その事だと樂で御座いますなあ。勝手がよく分りますもの。

メフイストフエレス

一切の理論は灰色でと、よう御座んすか、
そして生命の黄金樹は緑り色だ。

學　生

眞箇の所、私は夢を見てゐる氣がいたします。
お煩さくも御座いませうが、また今度
御識見の根本を伺ひに上つても宜しう御座いませうか。

メフイストフエレス

何でもわたしに出來る事なら、喜んでいたします。

學　生

私はこの儘お暇は出來ません、
まだ私の記念帖にお願ひをいたさねばなりません。

二〇三五　二〇四〇　二〇四五

2038—9. 「一切の理論は灰色で、そして生命の黄金樹は緑色である。」は誠に成つた言葉である。灰色と緑色とに就て色々の註釋があるけれど、こゝにはその意味を定義し制限して却てその眞意を失ふ虞れがあるので擧げない。

〔**2042.**〕 Auf den Grund, gründlich (D)

2048. この羅典語は「汝等は神の如くなりて善惡を知るに至らむ。」の意である。Vulgata〔古い羅典譯の聖書で羅馬正教會で唯一の正典とされて居るもの〕の創世紀3の5がこれと、Deus〔神〕の代りに dii〔deus の複數、神々〕とある點を除いて、全く同一であるといふ。これはエデンの園で蛇がエヴに智慧の木の實を食はせやうと誘惑する言葉の末節である。ルーテルの獨逸譯にはこゝ

御眷顧を賜はりまゝた甲斐に何うかこれにお書入れを。

メフイストフエレス

よう御座んすとも。—

（書きて渡す。）

學　生（讀む。）

Eritis sicut Deus, scientes bonum et malum.

（恭しく帖を閉ぢて暇を告ぐ。）

メフイストフエレス

何でもこの古語とおれの緣者のあの蛇とを手本にしろ、
お前にも屹度、神に似てゐるので不安になる時が來るぞ。

ファウスト　登場。

ファウスト

これからどこへ行くことなのか。

メフイストフエレス

どこへともお好きな方へ。
我々は小世間から大世間と見て行きます。
どんなに歡喜して、どんなに有益に、あなたが

二〇五〇

に Gott〔神〕と單數にしてあるのであるから、ゲーテは恐らくこれに基いて、Vulgata の句を自分のこの場合の目的に適ふやうに改めたものであらう。舊約書の卓拔な譯とされる G. Kautsch の獨逸語譯（現代）にはこの箇所が „ ihr werdet, wie Gott, erkennend Gutes und Böses "〔お前達が、神の樣に、善い事と惡い事とを知分けるやうになるであらう。〕となつて居る。

2052 Die grosze Welt〔直譯して「大世界」〕はこゝでは、言葉の最も普通な用ゐ方に從つてゐるものと考へるべきで、即ち、宮廷並びにその周圍を指して、これに對してそれより下流の市民等の社會を小世界とするのだと見る Schr の說に從つてこれを大世間と譯して小世間と對せしめたのである。

この課程の御馳走を相伴して通ることだらう。

フアウスト

けれどもおれはこの長い髯のある身で、
おれにはあの樂々とした處世の調子がない。
それを試みはしやうが旨く行くまい。
おれは昔て世間に適合することの出來たことがない。
他人の前ではわが身が如何にも小さく感じられる。
これからも當惑して許りゐることだらう。

フアウスト

いや、あなた、そんな事は何うにかなります。
あなたに自信が出來るが早いか、處世の道は分つて來ます。

フアウスト

我々は何うしてこの家を出て行くのかね。
どこにお前は馬や下男や車を置いてゐる。

メフイストフエレス

我々は唯だこの外套を擴ける限りでこれに
空を渡つて我々を運ばせてやります。

二〇五五　二〇六〇　二〇六五

〔**2054.**〕Cursum は羅典語 Cursus〔課程〕を羅典語の目的格にして用ゐたのである。(Schr)——Schmarutzen は schmarotzen の通俗の形。(D)

あなたはこの大膽な手段を取るに當つて、
決して大きな包みは持たないことだ。
火瓦斯をぽつちりわたしが拵えると、
それが敏速に我々をこの地上から引き上げる。
そして我々が輕ければ、揚り方が早う御座んす。
で、あなたにこの新生涯に入る御壽を申上げます。

二〇七〇

2069. 1766 年頃英國人 Cavendish が石炭瓦斯が特別に非常に輕いものだといふことを發見した。この事が世人の注意を惹いて、これが動機となつて、1782 年に Montgolfier 兄弟が輕氣球を發明するに至つた。これで見ると、この行以下は 1782 年になつて、或は 1784 年二月に Waimar で小さな輕氣球飛揚の試驗があつて後に挿入されたものらしい。(Schr)

ライプツィッヒなるアウエルバッハの寄店

陽氣に騒ぐ連中の酒宴。*

フローシュ

おい、誰も飲まうとしないのか。笑はうとしないのか。
おれが顔の歪め方を教へてやるぞ。
皆な今日は濡れた藁みたいだな、
かねては始終ほう〳〵燃えてゐる癖に。

ブランデル

それあお前のせゐよ。何にもやらかさないぢやないか、
馬鹿なことも、穢ならしいことも。

ブローシュ（彼に頭の上より一杯の酒を注ぎかく。）

そうら兩方一緒だ。

ブランブル

豚の豚！

二〇七五

* この酒宴の光景は ライプチッヒ〔Leipzig〕の優雅な學生等をよりも寧ろ Gieszen の學生等を思はせるものである。（D）

2074. 飲んだり笑つたりしないと、ひどい目に會はせてやるぞといふのである。

2080. 上の 2078 にある「穢ならしいこと」に當る原語 Sauerei が野豕或は豚を意味する普通名詞 Sau から出來た抽象名詞であることに注意したい。

ブローシュ

御意とあるもの、畏つて豚にならなきや。

ジーベル

爭ひする奴あ窓から放り出せ！。
胸を擴けて、ルンダを謠へよ、鯨飲れよ、喚鳴れよ。
さあ遣れ！おオいおオい、こらア！

アルトマイエル

災難だ、參つた！
綿を呉れ！野郎おれの耳を突き裂くぞ。

ジーベル

圓天井が反響を返す時でないと、
低音の根元力は身に染みない。

フローシエ

さうだい。出て行けよ、何かで氣を惡くする奴あ。
あア！ たら らら だア！

アルトマイエル

あア！ たら らら だア！

二〇八〇

二〇八五

2082. ルンダ〔Runda〕といふのは酒盛の歌で „ Runda, runda, runda, runda dinella! " といふ口雜子のつくのたどれでもさう呼ぶのである。（D）

2083. おオいおオい、こらアは原文に Holla ! Ho ! とあつて、これは前行に喚鳴れよとあるのにひつ掛けて、凄まじい聲で喚鳴るのである。

2088. 譯は音譯で、原文の中に A ! tara lara da ! とあるもの、歌を謠ふ前に聲調べのために唱へる無意味な音節である。

フローシュ　喉は調子が整つてるぞ。

（謠ふ。）

愛しい神聖羅馬の國は
何うして未だにもてゝ居るやら。

ブランデル

いけ好かない歌だな。ちえッ！政治歌なんぞ。
面白くもない歌だ。皆な毎朝神樣に忍禮を申せよ、
羅馬帝國の心配が要らないのが有がたいと。
少なくともおれだけは、皇帝でも宰相でもないことが
輕少でない儲けものだと思つてる。
だが我々にも首領が一人ないでは可けない。
皆で一人法皇を選ばうぢやないか。
皆も知つてるね、何ういふ資格で鬼がついて、
その男が位に登るといふことは。

フローシュ（謠ふ）

飛び上つて行きなよ鶯の小母さん、

二〇九〇　二〇九五　二一〇〇

2099—2100. 學生酒宴の法皇になる資格は飲む酒量に依て決するのである。（D と Schr より。）

2111. 地の靈小僧と譯したのは Kobold 卽ち土の精であるけれども、こゝでは前に 1276 に出たのと少し違つて、小さな無氣味なものと考へられて居るらしい。

可愛いあの媚に宜しく言つてね、千萬遍も。

ジーベル

あの娘に宜しくなんか廢せ！そんな事些とも聞きたくないぞ。

フローシュ

あの娘に宜しくだよ、接吻だよ。差止めては貰はんよ。

（謠ふ。）

門外せ、靜かな夜に。
門外せ、情人が起きてる。
門掛けろ、朝まだ早く。

ジーベル

よしよし、謠へ、たんと謠つてあいつを褒めそやせ。
今に見ろおれが笑つてやるから。
あいつおれを騙しやがつた、お前も今にさうされる。
あいつ情人には地の靈小僧でも得つかれよ。
そいつがあいつと四辻でふざけるとよい。
一疋の鎧山羊が、ブロッケンから歸る時、
駈け拔けしなに、今晩はとあいつに向いて啼くとよい。

二一一〇　二一〇五

2112. 四辻〔Kreuzweg〕は靈等や魔女等の寄り合ふ所である。（D）

2113. ブロッケン〔Brocken〕はハルツ連山〔Harzgebirge〕の一高峰で、民俗信仰に依れば、ヲルプールギスの夜に魔女等がこゝに集まつて、荒誕な騷宴を催ふすといふ。こゝへ行くのに魔女の或者は鎧山羊〔alter Bock〕に乘つて行くといふ。（後の「ヲルプールギスの夜」の場を參照すべし。）

血も肉も蹙ひなしのちやんとした男は
あの女郎にや餘まり良すぎる。
あいつに宜しく言ふなぞは以ての外だ、
窓を破して硝子を喰はしてやるがよい。

ブランデル（卓上を叩きながら。）
東西、東西！おれ樣の仰せに從つたり！
貴公がたもお認めで、拙者は處世の道知りだ。
女に惚れた人達がこゝに御座る。
それで拙者は身分相應、この人達に
今夜お別れの御馳走をせにやならぬ。
謹聽々々！最新形の歌で御座い！
反復文句を威勢よく合せて貰ひますぜ。

（謠ふ。）
鼠が一疋窖の中に巣を組んで、
獸脂と牛酪許り喰つて生きて、
どん腹を一つ肥やしてた、
ルーテル博士みたやうに。

二一一五
二一二〇
二一二五

〔2117—8.〕の原文は辭義通りに解すれば、重出を避けて略された態になつて居る wissen といふ言葉を第二句末にも補足して考へるべきである。

〔21.9〕. Luther は、その綴り方及びその由來（Lôthar から出た）に拘らず Lutter と發音されて、Butter ときちんと韻が合ふ。(Schr)

おさんがそいつに毒をやつた。
奴さんこの世が窮窟になつて來た。
身うちに戀でもあるやうに。

合　唱（歡呼の聲にて。）
身うちに戀でもあるやうに。

ブランデル
奴さん駈け廻り駈け出して、
水溜りを呻つて廻り、
家中を引つ掻き散し嚙り散し、
暴れても些とも甲斐がない。
心配で飛び上つたも何度だか、
それも程なく、可哀さうに、駄になつた、
身うちに戀でもあるやうに。

合　唱
身うちに戀でもあるやうに。

ブランデル
奴さん恐ろしくなつて晝日中、

二一三〇
二一三五
二一四〇

〔2138〕. thät は „thun“ の半過去の Indicatv „that“ の古い接續の形 „tet“ の訛傳したもの。(D と Schr)

〔2140〕. genung=genug, ゲーテの特に度々用ゐる形。(Schr)

臺所へ駈けて來て、竈前に
倒れ轉がり身をぴくつかせ、
そして心細い鼻の息。
毒盛つた奴がゐて失笑した。
へえ？程なくこの世のお暇か、
身うちに戀でもあるやうに。

合　唱

身うちに戀でもあるやうに。

ジーベル

何うだいこの平板な學生等の嬉しがりやうは！
可哀さうに鼠に毒を撒いてやるなんか
一廉の藝といふものさね。

ブランデル

貴公は餘程鼠共が御最負と見えるね。

アルトマイエル

禿け藥鑵を頂いた腹でぶ〳〵の先生だい。
不運で氣は折れ心は和む。

二一四五　二一五〇　二一五五

〔2147.〕 Auf dem letzten Loche pfeifen は、吹奏樂器に幾つもの穴のあるのに因んで、程なく終りを告げるといふことを意味すると E' にある、卽ち今最後の穴を吹き鳴らして居る、それが濟めば事終るといふ考から、死に瀕して居ることを意味する熟語なのである。

〔2150.〕 Bursch（複數 Burschen; 又は Burscde, Burschen〕は大學生を指すにも用ゐられ、この意味では、今日でも尙敬意ある用語であると H が說いて、その用例のうちにゲーテのこの一文節をも引用して居る。

素膚れた鼠を見ると、
御自分そつくりその儘と思ふんだ。

ファウストとメフイストフエレス。*

メフイストフエレス

わたしはあなたをこれから、何は扨て置いて、
陽氣に騷ぐ連中の中へ案內して、
どんなに樂な生活が出來るかを見せませう。
こゝにゐるこの手合にはどんな日でもお祭り日だ。
僅かな才智と餘計の滿足で、
尻尾を狙ふ小猫みたいに、どれもこれも
小さな輪を描いてぐる〳〵廻りだ。
頭痛で弱つて居らぬ時は、
掛け借りが延して置けるその間は、
お機嫌よしの呑氣者で御座んすのさ。

ブランデル

あれあ旅をして今來た許りだな、
あの擧措の奇怪しけなのを見ると分る。

二一六五　二一六〇

2154. 樂鑵頭の意味で kahle Platte〔禿げた平板〕と言つてゐるのは 2150 に platte Bursche〔平板な學生等〕とあるのに一矢酬ゐたのである。(D)

* 茲に兩人は、前の場の初めの所で 1535 以下に敍せられて居るやうな衣裳を着けて出て來るのである。(2177 及び 2179 の註參照。)

2164. これは原文(2163)では dreht sich im engen Zirkeltanz〔直譯して「狹い輪舞に於てぐるぐる廻る」〕とあつて、小天地の外に出でず小範圍內の小活動で滿足して居るといふ意。

こゝへ着いて一時間にもなるまい。

フローシュ

眞箇お前の言ふ通りだ。おれはわがライプチツヒを讃美するぞ。
これは一つの小巴里で、その人間に磨きを掛ける。

ジーベル

お前あの旅の奴等を何だと思ふ。

フローシュ

まあ〳〵おれに任せて置け！波々と一杯獻して、
おれが一つ、子供の齒のやうに造作なく、
奴さん達に鼻から虫を拔き出してやる。
おれには、あれあ上流の家柄の奴等だと思はれる。
高慢な、不滿らしい樣子をしてる。

ブランデル

野師だよ屹度あいつ等あ、啫でもするね。

アルトマイエル

そんなものだらう。

フローシュ

二一七〇

二一七五

2172. 小巴里〔Klein Paris〕、ライプチツヒは „Paris im Kleinen"〔小型の巴里と呼ばれて居た。(D)

2176. に鼻から虫を拔き出してやる〔Einem die Würmer aus der Nase zieoen〕とは人の隱して居る眞相、或は底意などを、狡猾な手段で看破つてやること。

2177. これは二人の服裝からもさう察するもの！考へられる。前頁の＊印の註參照。)

2179. 野師の原語 Marktschre'er は直譯して「市場に叫ぶ者」の意で、昔大道で、齒を拔いたり病氣を治したりするのを商賣とした者が大聲で客を呼んだからこの名稱があるのであるが、この野師は時としては本職の傍らは道化芝居をもやつてあるいたのである。こゝでは二人が物々しい衣裳を着けてるの

よく見てろ、おれが本音を吐かしてやる。

メフイストフエレス（フアウストへ。）

惡魔を俗衆は決して嗅ぎつけません、
假令んばそれに襟元を掴まれてゐるやうとも。

フアウスト

皆さん、今晩は。

ジーベル

御挨拶は痛み入ります。

（メフイストフエレスを横より見やりながら、小聲にて。）

何だな、あいつ片足で跛を引いてるぞ。

メフイストフエレス

如何で御座いませう、お仲間入りは出來ますまいか。
良い飲み物は望んでも駄目な代りに、
お話相手になつて興を添へて頂きたいもので。

アルトマイエル

あなた方は餘程口の奢つた人と見えますね。

フローシュ

二一八〇

二一八五

な斯ういふ野師兼道化役者と推定したものと考へられる。(Schr)(前々頁の＊印の註參照。)

〔2180.〕の末句は ich schraube sie + um die Wahrheit と補つて考へなければならない。

2181. 惡魔は、基督教の考に依れば、天上から地獄のどん底へ直下墜落したゝめに跛〔びつこ〕になつたのである。基督教以外の宗教觀にもこれに似た思想がある。惡魔は通例跛者として現はれて來るものであるけれど、このメフイストーに就てはその跛であることを明かに示したのは此箇處だけで、他の場面々々では全く問題になつてゐない。但し、メフイストーは人目を惹くことの不利を考へて、これを隱す手段を取つてゐることを自身で 2499 以下に述べて居る。(D)と Schr より。)

〔2187.〕 Ergetzen は erg tzen の古い形。(Schr)

あなた方は大方リッパッハを遲くなつて發ちましたね、
ハンスさんと一緒にお夜食を食べた上で。

メフイストフエレス

今日はあの人の所を素通りして來ましたよ。
この前の時は逢つて話をしました。
あの人の身寄の話を色々聞かされまして、
何の人にも重々宜しく言つて呉れと頼まれました。

（フローシュの方へ身を屈して會釋す。）

アルトマイエル

そうら、お前遣られた。あつちや旨いや。

ジージル

由斷のならない先生だぜ。

フローシュ

なあに、今に見ろ、おれが遣つつけてやるから。

メフイストフエレス

わたしの耳の聞き誤りでなければ、
練れた聲で合唱があつて居りましたね。

二一九〇

二一九五

2189—90. リツパツハ〔Rippach〕はライプチツヒから程遠からぬ所の一宿驛の名である。Hans Arsch von Rippach〔リツパツハのハンス・アルシユ〕と云へばライプチツヒで、無骨無作法者の義である。(D)

屹度、こゝなら歌がこの闘天井から
美事に反響するに相違ありませんな。

フローシュ

あなたは屹度その道の名人でいらつしやるね。

メフイフトフエレス

何ういたしまして。技倆は詰りません、でも好きは大の好きなんで。

アルトマイ ル

何か一つ聽かして下さいよ。

メフイストフエレス

御所望なら、百でも。

ジーベル

そして何でも一つ出來立てのほや〳〵といふ奴をね。

メフイストフエレス

わたし達は西班牙から戻つた許りで御座んすが、
あちらは酒と歌との宜しい結構な國で御座んしてね。

（謠ふ。）

昔どこかの王樣が

二二〇〇

二二〇五

〔2201.〕 Virtuo's（新羅典、伊語）, Meister in seiner Kunst, bes. inder Musik.

大蚤を一疋有つてゐて—

フローシュ

あれを聽け！蚤だとよ！一同勘違へなんかしまいね。
蚤と御座つたのは小綺麗でいゝなあ。

メフイストフエレス（諺ふ。）

昔どこかの王樣が
大蚤を一疋有つてゐて、
自分のお子でもあるやうに、
大層もない御寵愛で、
御用の仕立屋を召されると、
仕立屋がやつて來た。
この若の服のすを取れ、
そして亦ずぼんのもだ！

ブランデル

何でも、忘れないで仕立屋によく言ひ聞かして下さい、
寸法を極きつちりと取つて呉れつて、
そして、自分の首が愛しけりや、

ずぼんに皺一つ寄らせるなつてね。

メフイストフエレス

天鵝絨仕立て、絹仕立て、
着込んだる衣裳には、
飾紐を澤山上衣に着け、
十字架を上にかけ、
そして直樣大臣の
嚴めしい星章。
すると亦その同胞も
殿中で幅利かす。

御殿の殿方姫方は
そのために大弱り、
御妃もまた腰元も
螫されては嚙られた。
でも潰しては相成らぬ、
引つ爬いて除けてならぬ。

だがおれ達は螫すと直ぐ、
潰しては締め殺す。

合　唱（歓呼の聲にて。）

だがおれ達は螫すと直ぐ、
潰しては締め殺す。

フローシュ

旨い、旨い！好かつたなあ。

ジーベル

蚤は何れでもそんな目に逢ふべしだ。

ブランデル

指先を細くして、鮮やかに抑えなさい！
自由萬歳！酒も萬歳！

メフイストフエレス

わたしも一つ祝盃を擧げて大に自由を敬したくは思ひますが。
皆さんのお酒がもう一寸宜しう御座んすとなあ。

ジーベル

そんな事は二度と聞きたくないもので！

二二四〇

二二四五

〔2254〕. Judiciren（獨化羅典）=Urteilen.

メフイストフエレス

わたしは唯だ心配なので、こゝの亭主が苦情を申すかと。
でないとこの結構なお客樣方に何か一つ
わたし共の奢のを御馳走いたしますのだが。

ジーベル

さつさとお出しなさいな。苦情はわたしが引受ける。

フローシュ

良い奴を一杯飲まして下さると、皆なであなたを讃歌しませうよ。
でも、餘まり僅かのお毒味はお斷り。
わたしは審判を仰せ付かつたら、
口一杯にたつぷりと頂ひます。

アルトマイエル（小聲にて。）

あいつ奢あライン邊から來たんだ、おれはさう睨んだ。

メフイストフエレス

錐を一つ取寄せて下さい。

ブランデル

錐で何をなさるのかね。

二二五五

2256. 兩人を葡萄酒の名産地たるライン河邊から來た者と見做したもの。

まさか戸口の外にあなたの樽がありもしますまいな。

アルトマイエル

それ、その後ろに亭主が道具籃を置いてゐます。

メフイストフエレス（錐を取る。フローシュへ。）

所で、伺ひませう、あなたは何が召あがりたい。

フローシュ

それを聞いて何うなさる。そんなに色々とありますかね。

メフイストフエレス

御銘々のお好み次第に差上げます。

アルトマイエル（フローシュへ。）

ははあ、貴公最う唇をべろ〳〵舐めてるね。

フローシュ。

宜しい！撰べとあれば、ライン葡萄酒にします。

祖國の賜物に優した賜物は何だつてないや。

メフイストフエレス

（フローシュの坐せる邊に卓の縁に錐にて穴を一つあけながら。）

蠟を少し貰つて下さい、直ぐ栓をするやうに。

二二六五

二二六〇

〔2269.〕 Mussiren, od. moussieren（獨化佛語）=schäumen.

アルトマイエル

なあんだ、これあ手品を使ふんだ。

メフイストフエレス（ブランデルへ。）

それからあなたは？

ブランデル

わたしはシャンパンが欲しい。

そして確かり泡を吹く奴にして貰ひますよ。

（メフイストフエレス錐を揉む。一人その間に栓を作りて穴に詰む。）

ブランデル

何うも外國物も避けて許りはゐられない。

良いものが遠方にあることが往々ある。

生粋の獨逸男兒には佛蘭西人がすべて氣に喰ぬが、

奴等の酒は快よく飲みますね。

ジーベル（メフイストフエレスの自身に近づくを見ながら。）

斯うなると白狀しますが、わたしは酸ぱいのは欲しくない。

わたしには本物の甘いのを一杯下さいよ。

メフイストフエレス（錐を揉む。）

二二七〇

〔2272.〕 佛蘭西人を指すに用ゐた Franze といふ語は古い形の一つでゲーテ時代まで行はれたもの」(Schr)

ではトカイ葡萄酒が流れ出るやうにして上げます。

アルトマイエル

いイや、お兩人、目を眞面にわたしにお向けなさいよ。
分りますよ、我々を茶にしなさるんだ。

メフイストフエレス

何の何の！斯ういふ高貴なお客樣方を相手に
それではちよいと許し大膽が過ぎませうもの。
お早く！さ、さつぱりと仰しやること！
何酒を差上げればよ御座んすか。

アルトマイエル

何でも宜しい。長詮義だけはお斷りだ。
（穴が皆穿たれ、栓をされて後。）

メフイストフエレス（異樣なる身振を伴ひて。）

葡萄の房着けるのは葡萄の幹で、
角を着けるのは山羊の牡よ。
酒は汁がち、葡萄は木に生る。
木造りの卓も酒を作れる。

二二八〇

二二八五

2276. トカイ葡萄酒〔Tokaier〕は匈牙利の小さな町 Tokay で出來る、金黃色をした極上の銘酒。

2285. Ziegenbock〔山羊の牡〕を角のあるものゝ代表にしたのは Weinstock〔葡萄の幹〕と韻を合せるためであらう。(D)

自然の奥を窺ふ一と目よ。
こゝに奇蹟がある、御信仰々々々！
さあ、栓を抜いて御賞味下さい。

一同（栓を抜けば、各自の盃に所望したる酒の迸り入るを見ながら。）

やあ、美事な噴井が湧いて呉れるなあ。

メフイストフエレス

何うか用心して下さい、少しでも零さないやうに。

（一同盃を重ねて飲む。）

一同（謠ふ。）

無性獰猛によい氣持ち、
五百疋の猪みたいだい。

メフイストフエレス

これが自由の民だ。御覽なさいな、何と安樂なものではありませんか。

ファウスト

おれは最う立去りたい氣がするが。

メフイストフエレス

そんな事は後廻しにして、確かりしていらつしやい。

二二九〇

二二九五

〔2293.〕Kannibalisch は「食人種〔Kannibale〕の如く殘忍」といふ意味を假借して快感（wohl）を形容したのである。